
女鑑
第十九年
第三號

新學期開講

實用女學講義錄

▲本會は中學講義錄の發行に從ふこと既に五ケ年通信教授に於ける甚深の經驗を基礎となし今回更に女學部を新設して『實用女學講義錄』を發行せり。

▲講習期一ケ年半、此間に於いて高等女學校程度の學課は勿論、本邦家庭の事情に照らし女子必須の諸科目を講說し圓滿なる主婦を作る事を目的とす

▲講義錄は毎月二回發行とし講師は教育に經驗深き斯道專門の名家のみ也講述極めて平易、總ふり假名の談話體なれば何人も解し難き憂なかる可し。

▲毎月機關雜誌『新國民』を發行して會員に限り毎號無料進呈す『新國民』は現代知名の專門教育家及び斯道大家の訓話學說創作及び會員の投稿を掲ぐ

▲會長尾崎行雄親しく本部を監せらる。組織整頓し取扱最も懇切也。且つ會費極めて低廉都會一ケ月の遊學費を以て優に全學科を修了する事を得べし

◎新學期開講＝三月三十日迄入會金を全免すべし◎

無料進呈
見本つき規則

大日本國民中學會女學部

東京駿河臺
電話本局三千〇四番
振替口座四千二百番

第十九年





東京よし町
長電話浪花百五十六番


PEARL 毛髪料 CREAM
パール
毛髪の保護發育に注意せらるゝ諸君に告ぐ煉香油パールの有する特効は
黒色の美を全たからしめ特に頭髪の悪臭を去り衛生上唯一の必要品と認めらる
Pearl
スミレ香水本舗
東京濱町一
平尾亢店

花の姿



橋本子爵令嬢　小菊子君

閨秀名歌十二ヶ月



三月

下田歌子女史作歌　跡見玉枝女史圖

月の俤



塚原周造君令孃 とめ子君

少女すガた




瓦斯の應用
アカリとヘッツイ
（取付の費用は一文も戴きませぬ是非試して御覽遊ばせ）
白晝の如く黄と白とが見分くることが出來る位光力が強う御座います普通用ひられて居るのは五十燭光で一時間瓦斯代が僅か四厘弱しかいりません
御飯なれば二升が十七分間位で出來瓦斯代一錢四五厘御湯なれば四五分で沸きます殊に竈には月三十錢の損料で御貸致しますから至極御手輕であります至急御申込下さい
東京瓦斯株式會社
清潔…輕便…安全…經濟


美術造花材料
各種勉強販賣致候
天野卯兵衛商店
東京市日本橋區横山町一丁目拾六番地
電話浪花一六四三番
振替口座四九七〇番
營業案內は郵送料四錢封入御申込あれ

文藝 新小說

二月號（三月一日發行）

實價二拾五錢（郵稅二錢五厘）

小說 手筒……柳川春葉

小說 信號……草野柴二

小說 明暗……鳥海嵩香

小說 巷の人……長谷川時雨

小說 二階の下……兒玉花外

脚本 サロメ……小林愛雄

東京市日本橋 春陽堂發行 振替一六一七

思潮

猫と文學……片山孤村

日本文學に缺如せる一性格……齋藤信策

時文

「[illegible]界を大ならしめよ」……

△同様錄……後藤宙外

壁談

文藝院に望む……上田萬年

二三の事故

彫刻界の新現象……長沼守敬

裝飾の本義は

美點の表想……村田丹陵

寸鐵

食人[illegible]作業者へさし[illegible]、[illegible]歌の[illegible]、[illegible]の末路、[illegible]さ推讃辭、文士[illegible]界の[illegible]丈夫、批[illegible]、批評の價値、流[illegible]主義、寂滅主義、無解決、三面記事、野合の大[illegible]、[illegible]鬼大將、餓狼の眼、小說の不振、小說の前[illegible]、文壇風聞[illegible]、[illegible]の[illegible]伏、流行音樂、[illegible]合等……

月旦

一月號の各雜誌……

家庭

汚點拔きと洗濯……高等工業學校助教授 吉川良治

三味線の作り方保せ方……微笑生

生花の要心……花守廼舍

片岡仁左衛門……若菜胡蝶園

君江と涙子……高崎春月

春の花……前田曙山

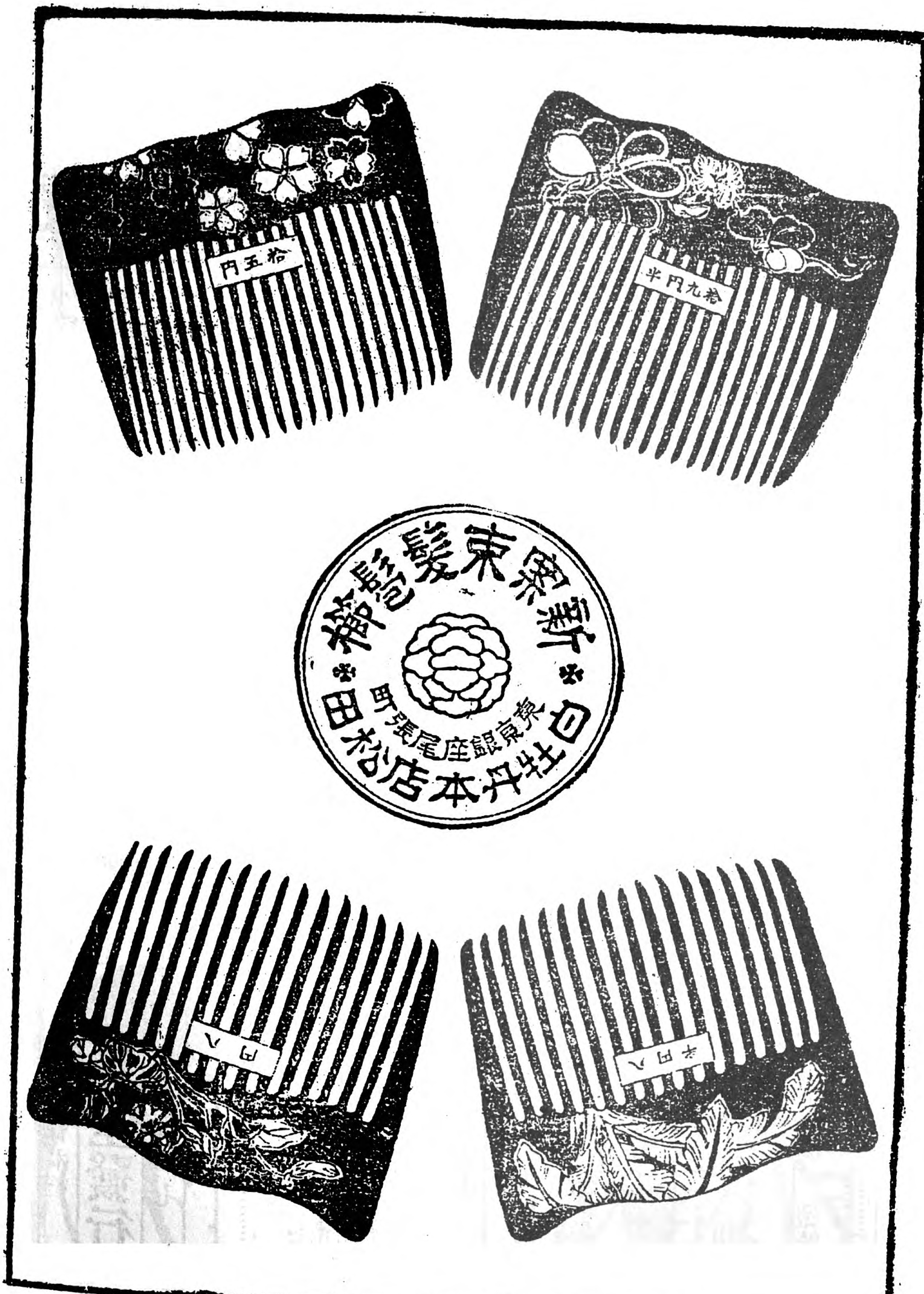
桃の節句……流行子

市頭小景……白柳秀湖

其他「雜錄」「藝苑」「譯叢」「社會」の各欄材料頗豐富趣味橫溢

繪 和田英作、平福百穗、山中古洞、鏑崎逸陵、◎石版[illegible]コロタイプ刷

畫 一[illegible]十年紀念……明治座……（寫眞版）


拾五円
拾九円半
新案束髪髷櫛
東京銀座尾張町
白牡丹本店松田
八円
八円半

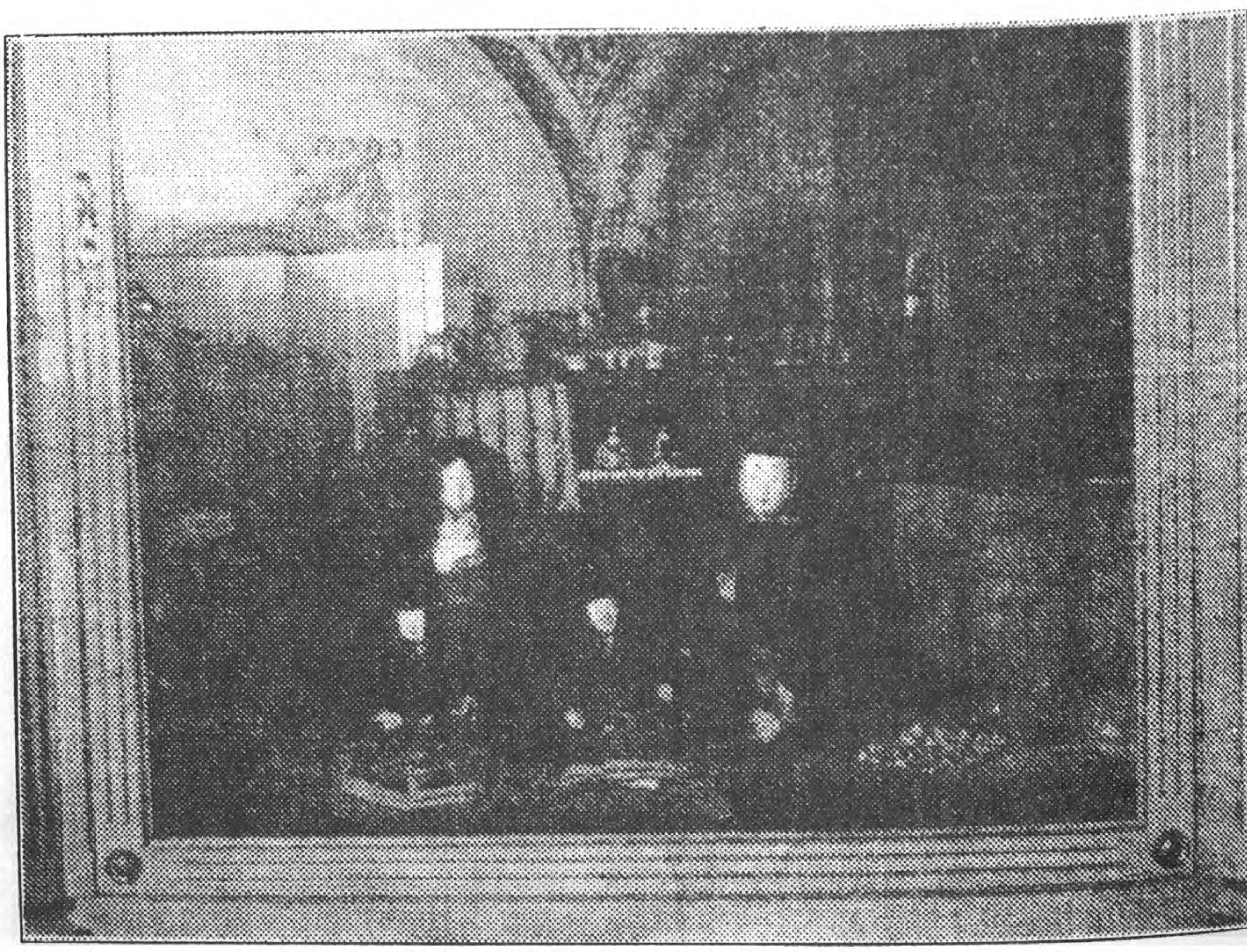
繪畫の教室



日本女子美術學校現況

桃の節句





三越呉服店陳列

新 規則書

真正純粋椿
みやけ油

登録商標



◎天下唯一

全國中最良の純粋椿髪油

御注意商標三婦人の下に東京三宅堂本舗の名義なき者は商店に責任なし

一大偽物あり御注意

村井弦齋先生の賞賛を博したる唯一の最良品なり

發賣元 東京日本橋區人形町通り 振替貯金口座八七五一番

みやけ堂本舗

東京人形町通三宅堂本舗

純煉みやけ油 定價

特大瓶	八十五錢
大瓶	四十五錢
中瓶	二十五錢
小瓶	十五錢

精製香入みやけ油

大瓶	三十錢
中瓶	二十錢
小瓶	十三錢

優等みやけ香油

大	四十五錢
中	二十五錢
小	十五錢

右送料十二錢

高峰博士創製　（消化新劑）

タカヂアスターゼ

澱粉不消化の一般徴候

醫學博士谷口長雄氏曰く『……澱粉不消化に因する主なる徴候は胃の膨滿、疼痛、溜飲、腸内瓦斯蓄積、便秘若くは下痢等にして甚く營養の障害を來す是等の疾病に對しタカヂアスターゼの頗る有効なるを信ず』

胃腸の虚弱なる者は勿論病者虚弱者等に本劑を與ふれば食物の消化を迅速ならしむる爲め自然食慾亢進從て營養を增進す。本劑は粉末錠劑各大小容器入として各有名藥舖にあり類似模造品數多あり必ず高峰氏タカヂアスターゼと要指定、說明書御申込次第無代郵呈

佐伯氏創製　（滋養新劑）

グリコナール錠

醫學博士**北里柴三郎氏**指導の下に醫化學者佐伯矩氏が牡蠣の滋養成分に就き研究創製せる本劑は滋養劑として肺病及一般病者虚弱者に必適なるのみならず之を用れば自から心臟を強め盗汗を制止し速かに體力を恢復して元氣を旺盛ならしむる特異の効顯あり

用量一回四錠宛一日三回用ふ各瓶百錠入として發賣せり各地有名藥舖にあり

グリコナール說明書は直接發賣元に要求せられよ無代郵送す

S

バークデビス　（緩和下劑）

カスカラ糖衣錠

最も優秀なる緩下劑カスカラ、サグラダはパークデビス製藥會社が藥用として初めて治療界に提供したるものに係り同社は該越幾斯を服用に便ならしめんが爲に之を糖衣錠となせり本劑は啻に緩下の効を有するのみならず一般に強壯劑として稱揚せらる又不快の副作用例へば腹痛の如き症狀を呈せざるは殊に本劑の特性にして總ての藥物中常習便秘に對して第一の特効藥とす

用量　二錠宛一日三回又は頓服として三乃至六錠を空腹時に與ふ一定時を經て緩和爽快なる便通あり

三共合資會社

移轉!! 藥局開設!!

本會社は事業の發展に伴ひ今回日本橋區室町三丁目十番地に移轉致候に就ては當分の間本會社發賣品の藥名簽及其他の印刷物に記載しある町名番地は新舊混同しあると可有之候得ども其本會社發賣品たるに於て異なると無之候間御懸念なく御買求被下度此段稟告致候也

東京市日本橋區室町三丁目十番地
三共合資會社

本會社内に藥局を開設し社員藥學士越澤滿藏を其主任と爲し專ら懇切正確に大家の處方調劑に從事せしめ候間藥品販賣部同樣御愛顧御引立を賜はり度切望仕り候

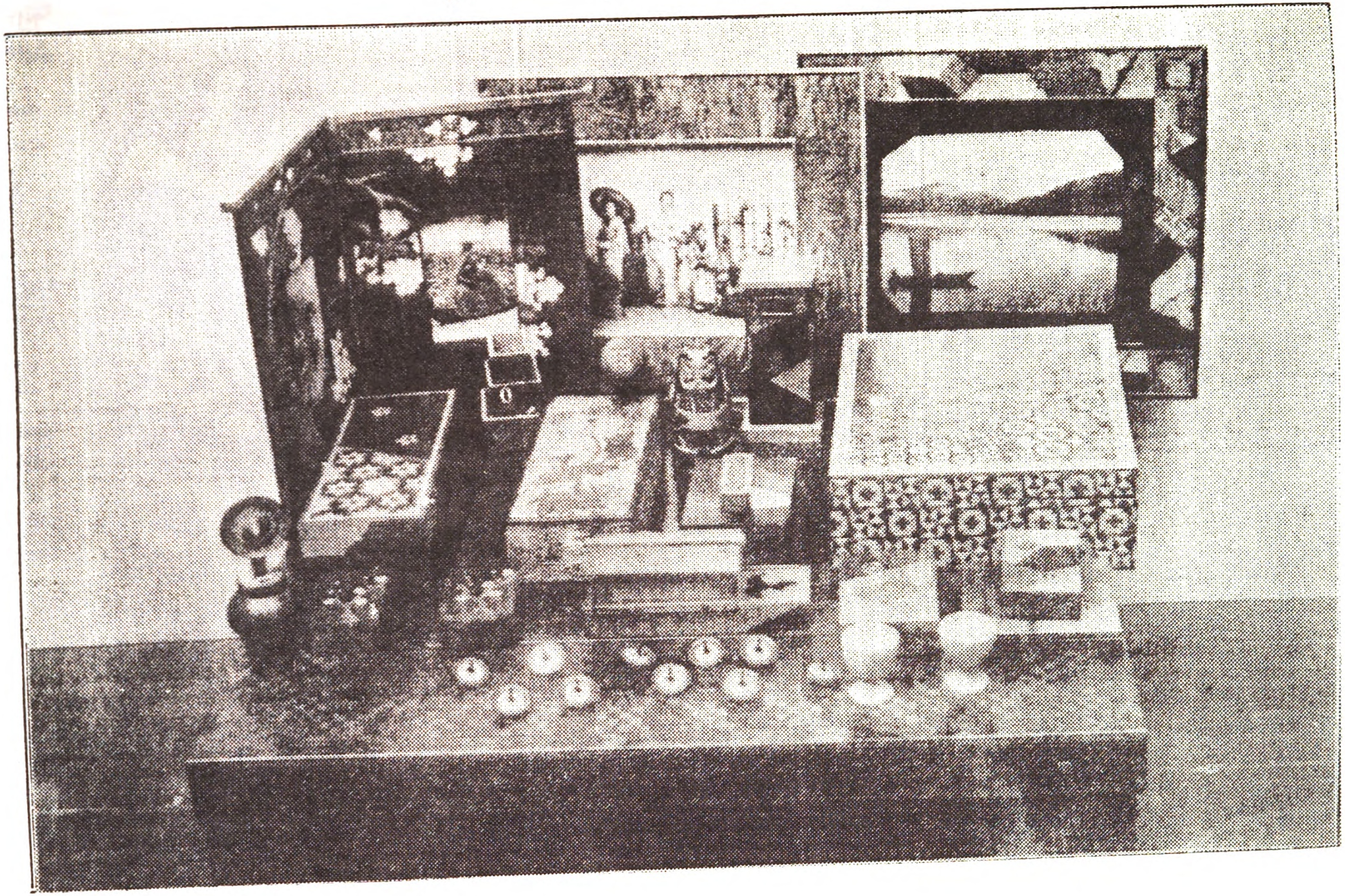
東京市日本橋區室町三丁目十番地

三共合資會社

下鴨神社



木だくみ



萬口一齊に賞贊せらるゝはそも何故なるや

材料愈新

女學世界

指導懇切

三月一日發行 第九卷 第四號 [illegible]

正價廿錢 郵稅二錢 前金四冊八十二錢 八冊一圓六十一錢 十六冊 增刊年四回 則一ヶ年分三圓十二錢

●**偉人の母より學ぶべき貴き經驗** 鳩山春子

●愛情を倹約する人の境遇 某實業家の妻

●噂に高きゴム輪の令嬢 挑割式部

●當世女房氣質 わかむらさき

●**立派な婦人となるに就ての心の工夫** 宮川壽美子

●**どの位の程度で生活すべきか** 佐治實然

●**教育が及ぼす感化の力** 勝田孫彌

●**廣く世間を見ての生活** 清藤秋子

▲**女子教育の方針** 法學博士 浮田和民

●**二十年前同窓の面影** 宮崎すみ子

●**虎の門評判記** 河岡潮風

●**會社員となる女の性格** 黒柳千代子

●**女書生の不平錄** 玲瓏女史

●**家庭四季節用** ●**實用衛生問答** 其他

●**寫眞技師の見たる婦人** 覆面女史

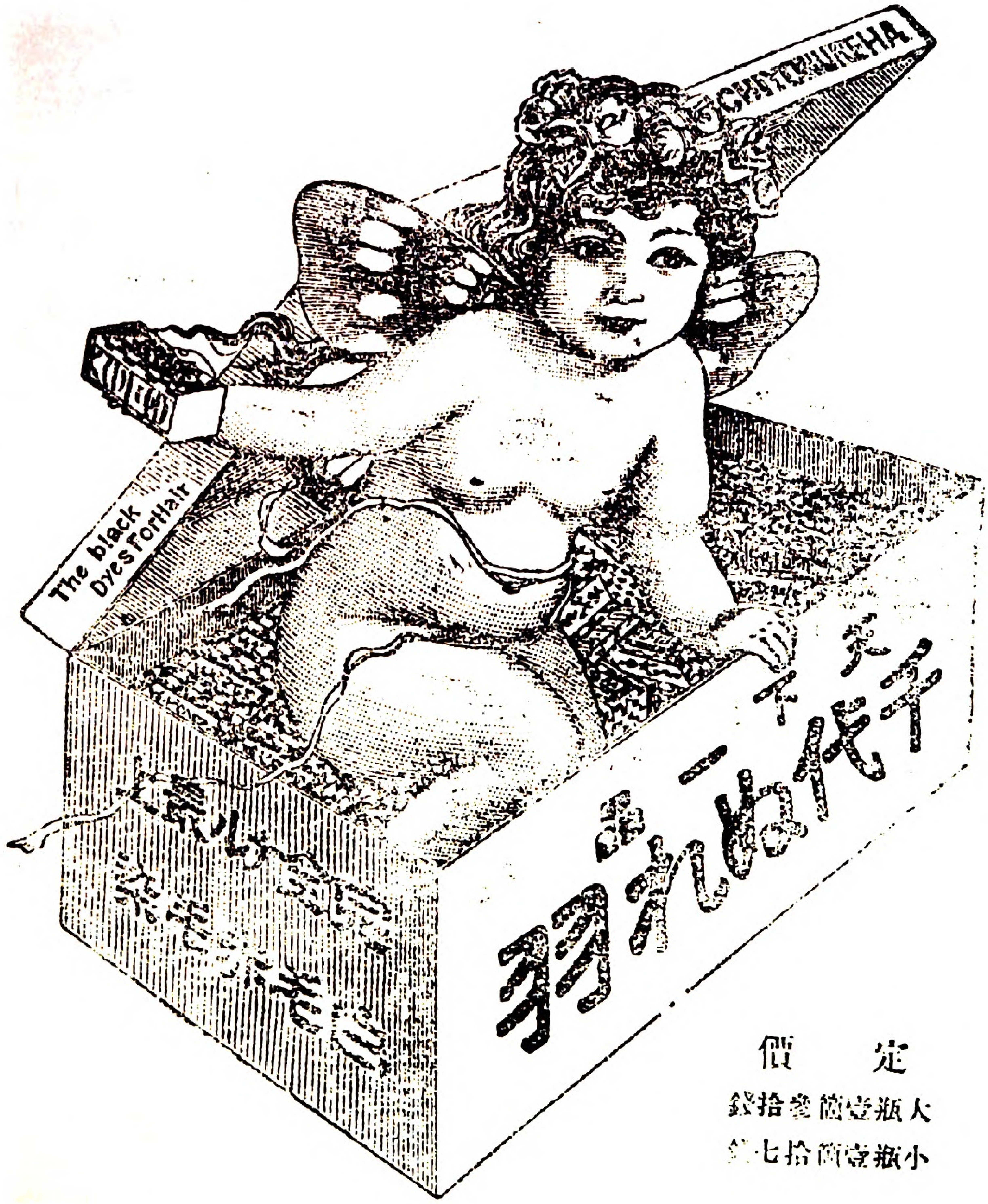
東京本町 **博文館發行** 振替貯金 二百四十番

●本品は確實なる無害の御證明有り

●近時類似品續出す御買求の際は特に商標の**千代ぬれ羽**に御注意を乞ふ

●本品を以て赤毛を染むる時は優に半ヶ年以上を保つと云ふ御使用各位よりの奏効禮狀日々多大なり

●賣捌所は全國到る處の小間物化粧品店藥店に有り



定價
大瓶壹箇參拾錢
小瓶壹箇拾七錢

東京市日本橋區通鹽町一番地

發賣製造 本舖 大服部松榮堂

電話浪花二一七五番

振替貯金口座一二八六五番

女學校の教師生徒は婦人世界の購讀を勸めらる

婦人世界

三月第三號 一日發行 四卷 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共一圓五錢 一年分二圓五錢

▲妻君曰く良人が放齋先生の夫婦情愛論を讀んでから私に對する擧動が一變しました。情愛論は女が見ても男が見てもためになることが澤山あります

▲女學生曰く前號の[illegible]講談は大層可哀さうで私は泣かずにはゐられませんでした。私はあゝいふお話が大好きです。毎號引續き出して下さい。記者曰く本號には妙沖尼が父の行衞を尋ねる面白いお話が出てをります

△名流婦人十八歳當時

△髮を美しくする法 岡村博士

△名流婦人の頭相判斷

△責任事して弟と共に苦學す 川上きん子

△女學校の教師が一番困る生徒の癖 宮田修

△米國の令孃は如何に若き男子と交際し良人を選ぶか 森盛一郎

△納豆を賣り孤兒が良家に嫁せし話 一記者

△日本に歸化せる感心すべき米國婦人

△西洋婦人が始めて日本料理を食べる時の話

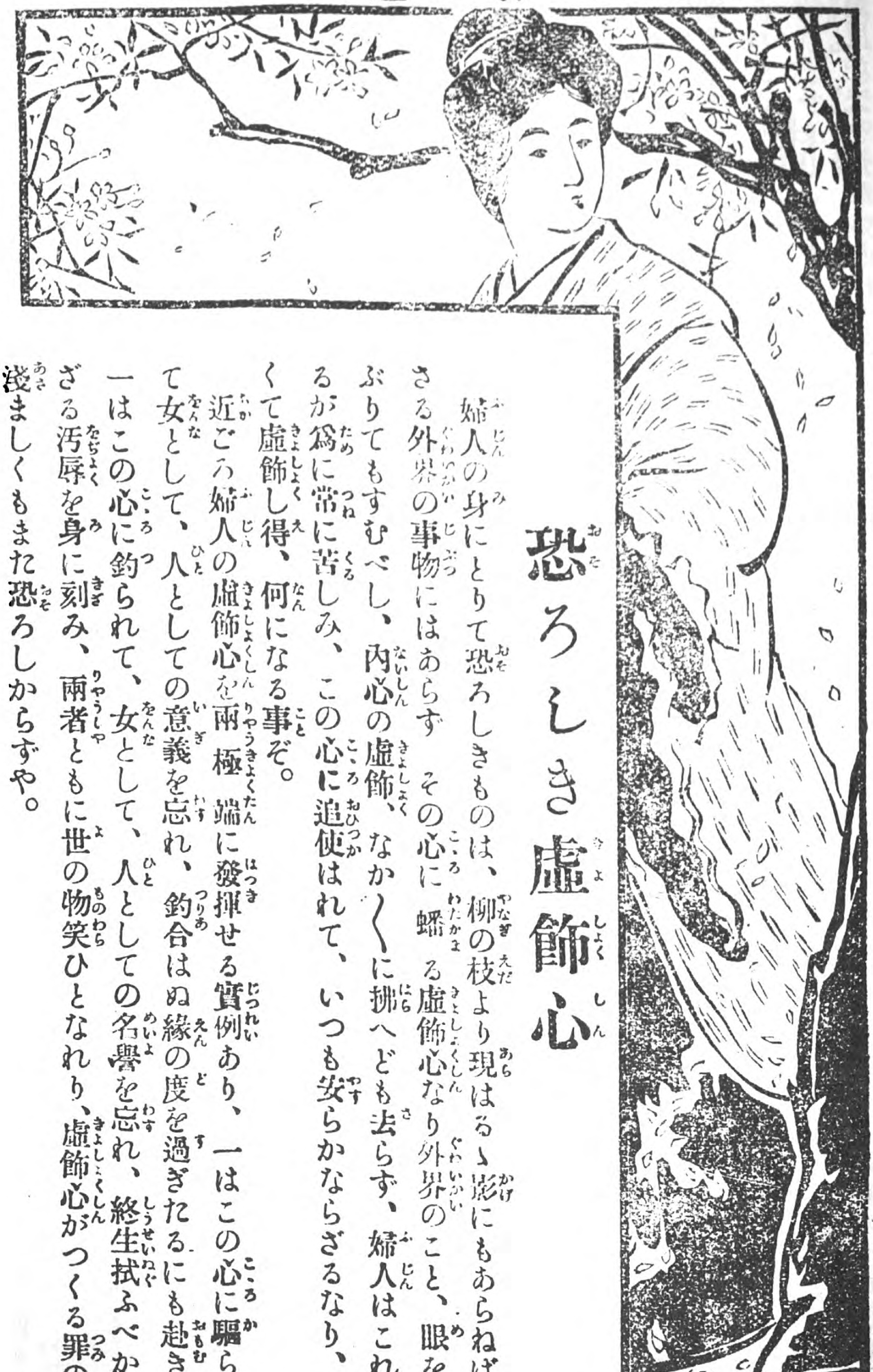
△美人畫を描く時の苦心 清方

△内職して通學せる女學生

▲記者曰く本號には記者が或る貴婦人から聞いて來た白粉の塗方が出てをります。顔を美しく見せようと思ふ方は是非一讀しなければなりません。奥樣にも女學生にも切におすすめします

▼田中宮相の結婚は婦人社會の大問題です本號にはこれに對する増田社長の意見が出てゐます。その外放齋夫人の料理談 伊庭學士の子宮外姙娠の話など爲になる話澤山あります

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 (郵便振替貯金口座參貳六番)(電話新橋八七四番) 全國賣捌書店



恐ろしき虚飾心

婦人の身にとりて恐ろしきものは、柳の枝より現はるゝ影にもあらねば、さる外界の事物にはあらず　その心に蟠る虚飾心なり外界のこと、眼をつぶりてもすむべし、内心の虚飾、なか〳〵に拂へども去らず、婦人はこれあるが爲に常に苦しみ、この心に追使はれて、いつも安らかならざるなり、かくて虚飾し得、何になる事ぞ。

近ごろ婦人の虚飾心を兩極端に發揮せる實例あり、一はこの心に驅られて女として、人としての意義を忘れ、釣合はぬ緣の度を過ぎたるにも赴き、一はこの心に釣られて、女として、人としての名譽を忘れ、終生拭ふべからざる汚辱を身に刻み、兩者ともに世の物笑ひとなれり、虚飾心がつくる罪の、淺ましくもまた恐ろしからずや。

男子の婦人を誘惑する、人は容易く誘惑さるゝものにあらず、虛飾心を誘惑するなり、小兒に飴をねぶらせる如く、虛飾心の餌をさへ與へなば、容易く誘惑し得らるゝなり、婦人の最も大切なる貞操も、虛飾心の前には光りなく、故に多くの結婚も、虛飾心を滿足せしむるが、第一の目的となれるが如し、而も虛飾心の分量多きほど婦人の屑なるはなし、

誘惑てふことは、素行あしき男子によつて演じられ、婦人その犠牲となるものゝ如く、年々數限りなく東京に遊學する女學生の、幾多誘惑の材料となれるが、誘惑とはかくて露骨に演じらるゝものゝみを云ふにあらず、

官等を振廻はし、財産を肩に掛け、或は年金にてもよし、公債證書にてもよし、さるものを看版にして不當の結婚を求むる如きも一の誘惑なり、官等財産にて婦人の虛飾心を釣る、これほど罪ふかきことなし、さるにても近ごろの婦人の算盤だかきには驚かざるを得ず、

さて婦人の美〻しく飾立つるハ誰に見せん爲ぞ、折角の粉裝も、その見せて歡を買はんとする、その目的の人の頭白く、もしくは腹黒きものならんにはいかに、所謂紅酸漿つける心中立の、あまりにいやしからずや、須らく婦人は虛飾心を去れ、これありては家も治まらず、子も眞面目に敎育されず、聞くだに恐ろしき裁判所に、被告となれるものゝ多くは、男によらず女によらず、其種は婦人の虛飾心が蒔くなり、風俗の敦厚を缺くやうになりしも、その源をこの虛飾心に發するなり、豈恐ろしからずや、

虛飾の世の中

幾度か夫を持かへしほどの不貞操な女にして、女學校の校長となれるあり、我夫ならぬつまを重ねし不評

判の女にして、女學校の教頭となれるあり、これを東京に於て求むることを得べし、かゝる人に何も窮窟なる教師などせんよりはと思へど、これも虚飾心を滿足すべき手段なるを如何せんといふ、さる教師によつて建てられたる學校に、知らずして足を入るゝものこそ災難、何事は覺えずとも、この虚飾心は正しく養成さるゝなり、その張きれる如き虚飾心を、現代女子の理想とするものあるに至つては、實に以ての外のことり、さる車屋の娘、世間を見やう見眞似の虚飾心あり、柔らき衣服も珍らしからず、貴夫人のすなる手安火までして、伴をつれていづくにか練行く、その娘の衣服のあまりに美しきを多く持てるより、その財源は疑問の種となれり、よく／＼煎じつむれば、着飾りたる衣服の常に變れるは、損料物を借着にて、伴をまでと見しは其母なりけり、それほどに苦勞して何になる事ぞといへば、これでなければ紳士淑女の中に立交るを得ずと、而も鏡に向へば、猿芝居のお染となりて映るべきには氣附かざるなり、

以上の如く、虚飾心の無事に通過する間はなしとするも、兎角はこの心無事には行かず、虚飾といへばその文字に示すごとく、まづ不眞面目なることなり、不眞面目なるが故に、麗はしき心も、やさしき心もいつとはなく曇りて、近くは植村なにかしにしても、かゝれとは思ひ掛けざりしなるべし、されど今になりて良心に雲かさなり、さまで心を惱まさゞるものゝ如し、もとは何れにありと云へば、虚飾心なり、おぞくも虚飾心を釣られて、人交りの出來ぬ身となりしなり、野口なにがしとても同じ、もしこの虚飾心なかりせば、押しも押されもせぬ賢夫人として、今日の如き悲慘の境遇とはならざりしなるべし、

婦人の淺はかにも虚飾を以て、世を瞞着せんとす、まことに危險なることなり、誘惑し易きは虚飾心に如くはなく、やゝもすれば虚飾を誘惑は招くなり、恐ろしき誘惑、虚飾心にかゝれば、恐ろしきものとは思はず、果は目的の虚飾を形なしにすることあり、男子の誘惑よりはその乘し易き虚飾心を警戒せよ。

崇拜すべき現代の女流精神教育家

雪洲山人

予は先月十一日即ち紀元の佳節を撰び、日比谷公園に官民が擧つて憲法發布の二十年祭を行はるゝに方り、予も亦市の一員として聊か祝意を表せんが爲に末班に列したのであるが、式後堵を成す群集に揉まれながら彼方此方と徘徊する中、いつか大神宮の祠前を過ぎるに方りて、予は幾んど一種の魔力に魅せられたかの樣に深き〳〵感慨に捕へられたのである。

开は外でも無い、今は予も日となく東京の紅塵に塗れて居るが、指を僂ふれば約二十有年前、笈を負ふて東京に在りし時は、晝も尙ほ物騷であると云はれた日比谷は、通俗長刕原と稱する荒涼たる練兵場であつた位であるから、從つて當時その原頭に建設せられたる大神宮の社殿なるものは、勿體ない話だが、僅かに知る者さへも之を勸請した者を以て痴人の爲に類すると云つて指笑した位の寂寥の觀なるものであつたから、概して云へば一日に參詣する者が僅かに五指を屈するに足らなかつた程の有樣であつたものが、現今では人生の大禮たる婚儀を其祠前に於て行ふ事となつて、それが踵を接するといふに至つては、之を勸請せられた主唱三輪田某氏は定めし衷心に滿足せらるゝであらうと、坐ろに深き感慨に打たるゝと同時に、氏が尊皇の大義を皷吹せられた先見に服するのである。

初めて此所に天照大神を勸請せられた三輪田某氏は、現時麴町區四番町に宏壯なる高等女學校の校長として、將現代女流の標本として一世の尊敬を荷へる三輪田未亡人眞佐子刀自の良人たる元綱氏の令弟

である。

三輪田家は伊豫松山市外の神職で、元綱翁は頗る和漢の學に通じて居らるゝのみならず、深く古今の成敗に造詣して居られて、殊に勤王の志の厚い方であつた、その證據は振氣篇に遺れる氏の辭世を見ても知らるゝ即ち

親といへど二人しわれど二人なき
　わが大君を人はしらずや

といふ歌であるが、成程父とか母とか單に言ふ時には一人でも、引括めて親といふ時は二人ある、けれども我等が戴く大君に至りては決して二人と在ますものでは無い、去れば此辭世の底に如何計り元綱氏の勤王の志の厚く且つ堅いかと云ふ事が推想せらるゝではないか、併し予は單に此辭世に因つて元綱翁を欣慕瞻仰するのでは無い、これには頗る深き緣由のある事で、それは嘉永年間に一たび亞米利加の黒船が來てからと云ふものは、天下は騷然として殆んど鼎の沸くが如く、人心は洶々として堵に安んせずと云ふ有様で、今にも日本全國は往昔の戰國時代を再現するかと想はるゝ計りなるのみならず、三百諸侯の中でも或は勤王を唱へ或は佐幕に傾く、それとて動もすれば朝三暮四の弊があつたのであるから一藩の中でも朋黨比周が行はれて、或は尊皇攘夷に熱する者もあれば或は佐幕に偏して居る者もあると云ふ風で、直ちに黒白を判する事は出來なかつたのである、兎に角斯う云ふ鹽梅で嘉永安政の交よりと云ふものは、天下の志士たる者は且らく措く、百姓は其皈趣を知らずと云ふ次第であるから、夙に勤王の志厚き元綱翁は項背佐幕の眞正中に在りながら何をかして世の人に大義名分を知らしめたい、それには眠れるが如き人心を喚起すには、縱ひ人が狂と呼ばうが愚と嘲けらうが、非常なる擧に出でなければ世人の迷夢を覺破する事は出來ないと云ふので、意を決して藩を脱し、窃かに同志を糾合して京師に上り、四條磧に於て足利尊氏の木像の首を刎ね、而して天下の人に嚮ふ所を知らしめられたのである。

今日から見れば此擧は聊か奇矯を衒うに近いやうにも考へらるゝが、當時の措置としては頗る機宜を得られた事と推服するの外は無い。

斯くして元綱翁は再び自己の藩に還る事を得ない。否、歸れば四面敵であるから、好んで蛾虫が火中に投ずるものであると云ふので、惜くもあらぬ生命ながら、尚は暫し長らへて大君の爲に酬ひ奉らんと、乃で諸所を漂泊し近藩大洲に來り暫らく驥足を縮めて居られたのである、その頃予は僅に四五才であつたが、屢次元綱翁の膝に抱かれ、或は手を曳かれて城外の調練場等へ伴はれた事もあるので、今尚は眼底に朧ろながら其風丰を留むるのであるが、殊に予が腦裏に深く刻まれて居る事は、翁は性來酒を嗜まるゝので、予が父は數々愛瓢に容れて之を贈ると翁は飲了るときは最早瓢には用は無いといふ風で、此方から注意をしなければ戻さるゝと云ふ事は無い斯ゝ云ふ質性恬淡な方であるが、兒童等に對するときは全で慈母のやうで、一日郊外に伴はれた時などは自ら予が手を執りて小さき丸木の橫たはれるを渡らせらるゝと云ふ温情の濃かなる方であつた、併し一朝事に當るに方りては猛虎の千里を走るが如く、少しも躊躇せらるゝ事無くして邁往敢行せらると云ふ剛直の士であるから、既に往政復古の大業が成就して、明治四年五月廢藩置縣の後、翁は擢んでられて外務の大丞まで進まれたが、それは毫も異數とするには足らない、何故なれば、翁は前陳の如く四面佐幕の裏に在りながらも、身を挺して克く大義名分を明らかにして人心の嚮ふ所を知らしめられたのみならず、軀自ら幾度か死生の間に出入して、而して明治の大業を翼成せられたのであるから、その當時の同志中には既に華族の班に列し或は贈位の御沙汰まで蒙つて居らるゝ方々のやうに、何か恩典があつて然るべきではあるまいか、否、それは上御一人の思召に由るのであるから我等が嘴を挾む餘地は無いのであるが、併し社會は何とか翁の偉功に酬いて地下の靈に感謝を拂はなくてはならぬものではある

まいか。

予は未だ三輪田眞佐子刀自の謦咳に接した事は無い、去れば其温容の如何を審らかにしないのであるけれども刀自が嫁がれた元綱翁には幼少の折ながらも斯く親炙して、爾來殊に欽仰して居ると云ふものは、翁の志操が堅牢不拔であると同時に、能く予が父と共に勤王の意氣が投合して終始死に至るまで渝らなかつたからである、予は此くまで翁を崇拜して居るので、曾て松山の師範に在學中、一日畑寺村の神職の家にて右の辭世の扇面に書せるものを乞ひ受けて今に珍藏して居るが、その未亡人たる眞佐子刀自なれば、志操の堅固なる事は予が贅辯を竢つまでゞはあるまいと考へる、殊に刀自は勤王家なる故梁川星巖翁の配紅蘭女史の薫陶を受けられたる方と聞くのみならず、その良人も亦斯く勤王家中の錚々たる方であるから、不幸にして伉儷長へに濃かなる能はずして鄕里松山に還り、婢僕を置かず單身家塾を開きて鄕黨の子弟を導かるゝ傍ら、良人の遺れ紀念たる元道氏を鞠育せられ、薪水の勞を自らせられし、次で東京に出でも依然家塾を設け、尙ほ時間の許す限り粉骨碎身して實に辛酸具さに嘗め、初めて今日の成功を得られたものと考へる。

是に由つて予は思ふのである、眞佐子刀自が成功せらるゝと云ふものは、畢竟刀自が意志の強固であつた賜物で、たとひ其幾分は故人や紅蘭女史の感化に基くとは云ひながら、刀自にして若し現時の女性の如く虛榮に飾られ浮華に眩するものであつたならば、到底今日の成功を見る事は出來なかつたらうと思ふ、それに附けても今日府下には幾多の女學校があるけれども、その根底に於て克く精神教育の目的を透徹するものは、この三輪田高等女學校を措いて他に求むる事は出來まいと私かに考へる、之は予が諂諛の爲に言ふのでは無い、坐ろに憲法發布二十年祭に接して故元綱翁および其兄弟の偉業を偲ぶの餘り一言玆に及んだのである。

磯邊に立ちて

小森松風

（一）

涼しき由井ヶ濱風に
袖をまかせて筆とれば
蜑の少女子集ひ來て
何をば書かせ給ふと云ふ

（二）

歌よ文よと答ふれば
貝掘り來りひたすらに
歌を書きてと乞ひ迫る
みやびの心ゆかしさに

（三）

いざ言問はむ蜑少女
霞める彼方は何處ぞや
森戸の浦か、はた逗子か
薄墨なせる島かげは

（四）

面はゆげに答ふなる
鎌倉なまりのをかしさよ
頰には笑みをたゝへつゝ
袖に夕陽の影とめて

鴨の夕

湖畔子

日かげも西に傾きて
柳のいとも打ちかすむ
加茂の河邊の黄昏に
手桶さげつゝいで來る
一人の乙女草わけて
水を汲みてぞ歸りゆく
見送る影もそよ〳〵と
吹きくる風に消ゆきて
四鄰淋しく靜まりぬ
聲かしましき蛙でも
如何に爲しゝかさてはあの
汲れたりけん乙女子に

女子教育の方針

法學博士　浮田和民

凡そ物の必要といふものは其目的にあるのであるが、一般の社會が女子教育に對する觀念が一致しない間は、如何しても其結果が善くあるまいと思はれる、成程目下我國に於ける男女教育の進歩發達は實に前代未聞である、而して十九世紀の百年間の進歩は、其前の千年間に於けるものより、一般は言ふに及ばず、その內容に於ても普及し進歩し發達して居るが、一たび飜つて其結果は如何に完備したかと對比して見ると疑なき能はずである、我國に於ても維新以前の教育といふものは頗る不完全のものであつたが、併し善良なる人、健全なる人、偉大なる人等が輩出したので、現に維新の元勳などゝ言はる人々は左樣いふ教育を受けたのである。

而して現今教育の制度は略東西同じくして、智識や器械等も完備して居るにも拘はらず、偉大なる人物どころか、その功績さへも擧らず、十八世紀の前半に於て豫期せし事が後半に於て出來ないのである

第一罪人が減らない

一體教育が進歩發達すれば犯罪人が減なければならぬのであるに、而かも今日の現狀では之が減らないので、一部の論者の中には、教育は犯罪を減却せしめ得るや否と云ふ說さへも唱へて居る、また或人は到底今日の生活狀態では之を減退せしむる事は出來ない、同じ教育でも普通だけでは充らぬから、高等の教育まで授けねば不可ぬと英國の學者中には稱へて居るものもあるが、併し一般の人々が何處の國でも高等の教育まで受けると云ふ事が出來るものでは無い、そこで予は普通教育だけでも其の功績を擧げる事が出來るものであると云ふ根本主義は有つて居るもの丶、今日のやうな目的主義では不可ない、何故といふに、

十九世紀の工業教育

をして居るからである、元來工業教育といふものは、

器械仕掛で品物を一度期に澤山拵へて安く賣ると云ふのが目的であるから、ツマリ平凡な品物が澤山出來る事になる、故に茶碗なら茶碗にしても、各人の家庭の趣味とか、又は特殊の趣味に適應する事は出來ない、それと同じく今日の教育では其が出來ない、十九世紀の教育は即ち其である、謂ゆる頭數で扱す佛國も獨逸等も同樣で、毫も生徒の氣質も健康も嗜好も希望も、または之が家計の貧富等にも關はず謂ゆる十把一束の教育を施して行く、尙ほ恐るべきは將來犯罪の傾向ある生徒までも混じて居る、斯ういふ風であるから、身心共に健全なる者は成功するが虛弱なるものは不成功に終るのである、犯罪の傾向ある生徒などの事に就て、西洋では感化院等の設備が出來て居るから宜いとしても、我國には未だ充分之に關する設備が整つて居らない、先づ其事は暫らく置くとして、普通のものは校舍も完備し機械も整頓して居る、その割合には功績が顯はれない、それは何故かと云ふに、畢竟教授法が宜しきを得ないからである、昔し孔子や釋迦または基督などゝ云ふ方々は、同じ多くの門弟子に教へらるゝにも、一々其者其者の性質や氣風等に由つて其の導かれ方が差うので、孰れも個人的の關係を以て教授せらしのみならず其師弟の間の親しきこと等は實に千歲後の模範である、實に教師と子弟とは斯くあらねばならぬので、我國に於ても遠き昔と言はず、即ち明治維新前などは、今日に比ぶれば最も不完全なる教育を施したものであるけれども、併し人物は輩出して居る、それは方今のやうに教師も一人で無く數人共同、生徒は團體で教育を受ける、全で教室内が公開の演說場と同樣で、從つて師弟の情誼などゝ云ふものゝ見るべきものゝ無のは當然である、假りに男子の教育は是で可いとしても、殊に女子教育の方針は是では不可ない、よく〳〵女子の家計の程度、又は健康その他前述の如き種々なる點を微細に調査して掛らねばならぬのである。

それから世には女子を收容すべき盛大宏壯な學校

あるやうだが、予は其を望まない、何故かなれば、生徒の數が多ければ、自然前に云つたやうな弊に流るのであるから、予は寧ろ小さな建築の生徒の數が少ない方が理想に近いので、そこで學校の數の多いのを悅ぶが、單に盛大宏壯なるものを望まない、併し學校の側から言つたならば、生徒の數が少なければ從つて收入が少ない、即ち學校の經濟に關係するので多數の生徒を吸收しないと云ふのは無理からぬ注文のやうであるが、併し學校商賣といふ事を離れて、眞誠に人物を養成すると云ふのならば、何も左程校



舍を大きくして生徒を澤山に收容せねばならぬと云ふ道理もあるまいと考へる、たゞ相當の校舍と適度の生徒を收容さへすれば敢て學校經濟といふ事に左までの影響はあるまい、假りに有りたりとしても、眞誠に教育に從事さへして居たならば、必ずや世には具眼の士もある事であるから、その者をして失敗に了らしむるやうな事のあるものでは無い。

予は何故に斯くの如き言を爲すかと言ふに、孰れの學校を見ても、初めの中には良い人物が出たのは事實であるからである、帝國大學なども今より二十年も以前は實に不完全極まるものであつたが、その不完全なる當時には人物が輩出したのであるが、夫より段々に校舍の設備、學科が整理すると共に能力や品性などの修養が出來なくなるものから、比較的人物が出ない、維新以來物質的の進歩といふものは非常なものであるが、舊幕時代と比較して國民としての品性は如何といふに、どうも過去に優つて居るとは云はれぬ、と云つたとて何も墮落した衰弱した

と云ふのでは無い、今日の現狀を有ち得るのは祖先のお蔭であるから、祖先に對しては感謝こそせねばならぬが、誇だけの價値は無いといふのである。

慶應年度から明治の初年に掛けては、隨分女子にしても國事に奔走した者も尠なからぬが、現今の女子は其と比較して、決して進取の氣象が增して居ると云ふ事は出來ない、そこで今より祖先に勝る成績を擧げやうと云ふには、それは男子の教育のみでは不可ない、最も維新以前の我國の教育と云へは、全國の各藩に設けられてあつた謂ゆる藩黌なるもので男子のみが教育せられたので、女子の教育場と云ふものは別に無かつたのであるけれども、隨分女子にも偉い人物も出た、男子は固よりの事であるが、夫故に今後男子と女子と並行して教育を施して行つたならば、必らず偉大なる人物が輩出する事で有うそれには國民全體が奮勵して、個人として將國民として偉大なる特性を發揮して行かねばならぬ、成程我國は世界の五大洲の機運に對しては其の進歩の速

力が早い、即ち西洋で既往四百年間に進歩發達せしめたものを僅か維新の前後約五十年程の間に悉皆と受入れたのであるから、速いと云へば速いものゝ、

それは模範が在つたからである、概して進歩といふものは教育程度の低い、例へば、小學時代の四年乃至六年、それから中學時代、女子なれば高等女學校時代等で、孰れも在學中は年一年と、進歩の度が見えるのであるが、それは總て手本があるからである、然るに學校を卒業してからは其の割合に進歩の度が見えない、けれども實際に學術が進み品性の高まるのは卒業後にあるので、この卒業後のものが眞の實力で進歩するのであるが、其の以前のものは凡て他力である、乃ち模範が在つたからである、故に畢竟我國に於ける過去五十年の進歩といふものは他力である、もと〳〵進歩といふものは無智識から智識に進み、小智識から大智識に進むのであるが、是迄のやうに手本ばかりを擬にして居て、萬一大地震でもあつて歐米の國家が潰滅したと假定したならば如何であらう、それと同時に我國の文明は芽を絶たれて仕舞はねばならぬ事となる次第ではあるまいか、其樣な事で進歩と云ふものが出來る筈のものでは無い。

去れば今後わが日本國民が尙ほ一層此上に進まんと云ふには、餘程の決心が無くてはならぬ、今や我國の狀態は其の彼岸に到達しやうと云ふには、男子の教育すら充分でない、女子は尙更である、故に何とか之に對する方策を講じなければならぬ、その講ぜられたる方策が宜しきを得ると共に、今後の進歩發達の程度に由りては確かに日本の學問として獨立したものになる事は疑を容れぬのであるが、併し其は國民的に發達せしめなければ不可ぬ、それには男子のみに偏してはならぬ、

男子の性格は女子に在り

と云ふが如く、歐米に劣らぬやうに我國に於ける女子の實力や智識を充實せねばならぬ、即ち女子の天職が家庭に在ると云ふ事は千古の規則であるのみな

らず理想であるから、女子の天性を破壊せざる限りに於て實力及び智識を充實して、謂ゆる妻たり母たらしむると同時に、即ち第二の社會を建設すべき國民として養成しなければならぬ、約言すれば、教育ある人格を備へた賢妻良母たらしむると共に國民としての任務を竭すに足るべき樣に教育を施さねばならぬのである。

凡て人は境遇と教育とに由りて發展するものであるから、個人々々が左樣云ふ風に發達すれば、自然國民性が一般に發達する事になる、去れば教育者からは男女を平等に視なければ不可ない、單に時間さへ塞げば自分の任務は畢へたやうに教育者が想ふならば、却つて其は人格を破壊する事となり、犯罪の萠芽を胚胎せしむる事となる、元來道徳仁義を離れたる教育は淫靡者を造り出すので、決して喜ぶべき教育ではない、そこで國民全體の品性を進むるには女子教育が目下の急務として深く自ら信じて掛らねばならぬ、之が教育家の任務で、即ち教育者は建國

の第二の基礎を造るのであつて、其の任務は總理大臣よりも重いのである、全體國民の發達といふものは一年や二年乃至十年や二十年で出來るものでは無い、けれども之が一日後るれば十年の停滯を來すので實に焦眉の急であるが、併し國家で女子教育を完備すると云ふ事は經濟上の關係等から困難であるから、有志家は意を此に致し、教育家と共に目的の直打ある事を知つて掛らねばならぬ、それを爲すに方りては人格を基礎として掛らねば不可ぬ、併しながら男子と同じやうにする必要は無い、けれども何處までも共同して遣らねばならぬ、而して如何なる境遇に立つても强固なる意志を持續せしむる樣にするのが國家百年の大計と云ふものである。

事新らしく言ふまでも無く、今日は男女共に世界的の競爭をせねばならぬ、從來の女子は隨分安氣で例へば、或片田舍に生れた者は矢張其の同郷の者と結婚して一生を送れば濟んだものであるが、今後の女子は左樣は行かない、言はゞ生れた場處は解つて

居ても、その死場處は支那か朝鮮か、はた英國か米國か豫め知る事は出來ない、斯ういふ工合で、昔の女子と方今の女子では頗る境遇が違う、殊に何日何時如何なる處へ行かぬとも限らない、去れば境遇が如何に變らうとも、女子は女子自ら保護するだけの決心が無くてはならぬ、即ち男子にも劣らざる品性を持するは勿論、之に次ぐに德義の心が敦くなくてはならぬ、併し斯ういふ風に健固なる意志、健固なる品性、健固なる道義心を有たしむるやうにすると云ふ事は、到底一朝一夕に出來る筈のものではないから、前にも云へる如く女子教育者は、その目的の直打ある事を自覺して掛らねばならぬのであるが、之が教育を受くる女子の側にも亦それだけの心得を忘れてはならぬ。



（文責在記者）

敬語と風俗

文學士　藤岡勝二

世界何れの國に到るも敬語を遣はぬといふ事は無いが、併し敬意の排方が差ふもので、それは自ら其國の風俗と比例して居る、尙ほ別言すれば、言葉の上に特徵といふものは其國の文野と正しく比例して居るものである、それ故に今之を對照して見やう。

抑も言葉の上で尊敬する、その仕方が二樣に出來て居る、即ち其一は

　相手を上げる事

で、例へば、食事にしても、お上りなさい、召し上がれと云ひ、また何か語られた事を、有仰ッた、おッしやると云ふやうな工合に、向ふの相手を上げてかゝるのである、尙ほ此外にも特別の或形式で顯はすものもある、その二は

　自分の方を下げる

ので、同じ食事の例で云へば、折角ですから頂きま

す、または遠慮なく頂戴いたします抔と云ひ、たとひ自分の事を云にしても小生、愚生又は迂生其他また種々に自分の事を卑下して稱ふる言葉もあるが、皆何れも相手を崇めてかゝるので、誰も自分の机に一人凭り掛つて居ながら、小生の迂生のと言つて居る者は無い、若し有つたとすれば實に其は滑稽で、或は人が呼んで狂人となすに違い無い、また狂人に非ざる限りは其樣な獨語をする氣遣はない、必ず他人に對して遣うのである、所が、之を遣うにしても注意しなければならぬ、と云ふ譯は、若しも斯の敬語なるものも適度が過ぎると其が却つて諂諛となるそれ故に凡て適當に用ゐなければならぬ、若しも自分の友人に對して、君は飯を召上るか、或は君は今日何處其處へいらッしやるかと云ふやうな言葉を遣つたならば、之を適當といふ事は出來ない、既に君といふ語を遣うならば、君食べないかとか、又は君明日は何處其處へ行かないかと云ふ方が至當なのである、如何しても之を適當に遣うと云ふ事を忘れてはならぬ。

若しも紳士とも云はるべき人が、餘り存在の言葉を遣うと、それは誠に品位を下るのみならず、非常に下卑て見えるもので、例へば、食事を致しますとか、或は戴きますと云へば適當であるのに、やッつけますとか又はぱくついてまゐります抔と云つたら何うであらう、實に聞苦しい言葉ではあるまいか、去れば紳士は紳士、令嬢は令嬢といふ風に、自ら地位や階級等に適當した敬語を、縱ひ自分の事に致せ遣はねばならぬものである。

殊に斯の二つの言葉、即ち相手に遣うべき語と自分に遣うべき語とが反對になつた時は實に妙なものとなる、

その尊敬すべき場合

例へば、暫らく先生の伜にはお目に掛りません抔と云つたら如何でせう、それは如何なる溫厚篤實の先生でも、急度腹を立たれるに相違ない、左樣かと云つて、自分の方を持上げて、一向私は其を御存じあ

りませんと云つたならば如何かと云ふに、是また人の不興を招がない迄も、必ず人の物笑ひとなるのである、彼の落語家なるものは斯う云ふ語を巧みに用ゐる、例へば、此方がたは云々抔といふの類である、そこで人の頤を解のである、爾ういふ風に自分を尊んだのは大抵笑はれて濟むけれども、若しも之を逆に用ゐると必ず怒られる、それは畢竟人間といふものは男女に限らず



凡て自分の事になれば眞面目になるからである、乃で社會に於て言葉の方では必ず相手を上げる方が相場となつて居る、といふものは、一歩適切に手元へ切込んで見ると、

れも己惚が強いからで、その證據には、左程の家庭で無くとも、出入の八百屋や魚屋などが、奥さん今

日は如何でと振込んで來ると、ズット奥さん氣取りをする、男子の側でも、まだ自分が學ばなければならぬやうな位置になつても、人から先生今日はと聲を掛けられると、直樣反身になるのであるから、斯く人間といふものは己惚の強いものであるから、先生と呼び或は奥さんと人が云つたからとて、何も敬ひ過ぎたと云つて腹を立つものは一人も無い、それに斯う云ふ言葉は路傍の乞食が旨く利用して居る、ツイそれ故にお旦那樣やとか、又は奥樣方やと云ふ言葉に釣込まれて幾分の施しを爲るといふ事は決して珍らしく無い。

右に述べたるが如く、相手方に對する敬語は隨分我國には發達して居るので、それに三種ある、その一種は前陳のやうな言葉であるが、それは自分の方なれば自宅、娘、息子或は忰、愚妻抔と云ひ、相手方に對してはお邸、令孃、御令息、御夫人、令閨抔と夫々階級等に依つて稱呼を異にするのであるが、如何に間違へばとて、今は中流以下又は同輩抔の間

に於て、先方の内儀を呼んで妻君と云ふ事が敬語になつて居るが、實は細君に通じたので、本來は細君と書いたもので、家の細々した事を取捌きをすると云ふの意味なのである、而かも其が今は位置を轉倒して仕舞つて居る、けれども今更喧しく云つて改めるでもあるまい、矢張通俗に從つて置くが良い、併し或階級のものは餘り自分を卑下する爲に、往々自分の妻を呼ぶに、内の奴、嬶、甚しきは山の神抔と稱ふる徒もあるが、一體この山の神といふ語は奥といふ事の異稱で、昔諸大名などでも、自分の妻を奥と呼んだのであるから、奥といふ分には差支ない、けれども山の神と聞いては頗る下劣に感ぜられる、とは云ひながら、山の神なる語はもと〱神樣と云ふものは奥山にましますものであると云ふ、その奥といふ字を略したものであると聞いては敢て異樣の感もしないのであるが、併し斯く同じ妻を呼ぶにも多稱類あるといふ事は、之が風俗としては甚だ宜しくない、現時の世の中には婦人教育會とか、或は婦

人優待會など稱する會が設けられてあると聞傳へて居る、どうか左樣いふ會から、斯く妻に對する名稱、を社會に持出して、一日も早く奴などゝ云ふ聞惡い言葉を排斥して欲しいのである。

それから不見識なことには、相手の人を上げるには漢語を用ゐ、自分の事を云ふには日本語を用ゐる者がある、して見ると日本語の直打は廉くて、舶來の言葉は高いと云ふ事になるのである、尤も當今でも總て舶來が巾を利す時代であるから據ないかも知れないけれども、一體どうして左樣なつたのであるかと云ふに、往時支那から文物が渡來して謂ゆる唐樣に總てが化すると共に、言葉も唐樣でなければハイカラで無いと云ふやうな事で、國語は普通家庭で用うる言葉となし、漢語は人に接する場合に多く用ゐらるゝと云ふ風で、過去に於て日本語が卑しめられた結果であらうと考へる、併し是まで述べ來つた敬語は、凡て直接に人と人と對しての言葉であるが、茲に其と異つて、言はゞ間接に

遠廻しに遣う敬語

がある、彼の樣といふ事は方即ち方角の事で、殿といふのはやゝゝしきと云ふ事である、これと同例で殿下または閣下、御邊、御前などは皆それで、乃ち遠廻しの言葉で、實はその方などゝ云ふ語も今は大部に下落したけれども、ソッチノハウといふので御邊などゝ少しも擇ぶ所は無いのである、また彼方といふ語も方角をいふので、是等は總て間接即ち遠廻しに云ふ所の敬語である、併し先方に對しては斯く遠廻しに尊敬の語を用うるものゝ、自分は直接に何の誰と云ふやうに直接に云ふのである、尚ほ面白い事には、人に對して相接に誰某といふ風に落しめた事になるのであるが、之が自分になると卑下した事となつて居る、そして

斯の遠廻しの敬語は複數に遣つて居るのが多い、例へば、あなたで濟むものをあなたがた、公だちで宜いものを公達と云ふが如くである、西洋の歷史などを見ても左樣である、凡

て複數が敬語になつて居るが、昔は爾うで無かつたのである、また自分の事を云ふにも大部日本でも之が發達して來て、我輩、我々などゝ云ひ、殊に商人は、何々が有りますかと尋ねると、生憎手前共には持合せが御座いませんと答へる、この共だけは餘計でツマリ複數を示して居る、併し昔だからとて複數を遣はないかと云ふに、身共などゝ大部穩に遣つて居る、その反對に落しめて遣ふのは下落であるものゝ其方共、女房共、車夫共などゝつて居る、此外に尙だ一つつれ即ち仙臺萩の文句の中に夫婦連と云ふ語があるが、槪して我も人も複數にすれば敬語となるのであるけれども、併し之が餘り一般になると下落するのである。

近頃よく君だの大將だのと云ふ語を遣うが、昔は君と云ひ大將といふ語は却々貴いので、例へば、一天萬乘の君とか、又は平家の御大將とか云へば凡て尊稱で、今でも東郷大將と云へば偉く聞えるのである、けれども謂ゆる熊公や八公が出合頭に、イヤ大將などゝ來ては頗る下落したものと云はねばならぬ併し大將なる語は英語でジエネラルであるから、イヤ何々ジエネラルと云へば大層結構だが、熊公や八公に濫用されては價値が無い、彼の先生なる語も、支那邊では今尙ほ貴いのであるが、我國などでは諺にもある如く、先生と云はるゝ程の馬鹿で無い抔と今日では大いに先生なる語も直打が下つて、或一面に於ては奴さんの代名詞とまで下落したのである、之と等しく貴樣だのお前だのといふ敬語も、方今の如く一般となつては毫も直打が無い、彼の外國に於ける獨逸のフロラインの語の如きも、昔し封建時代に在りては頗る貴い敬語であつたものが、昨今は下女に至るまでフラロインになつて仕舞つた、

斯樣な下落は歷史の發達と共に下落するのである、所が我國に於ては維新後その下落が最も急激であつた、それは階級の除れたからであらうと考へるが、併し又一方には公人私人抔といふ區別が出來た爲に、本官とか本職とかいふやうな代名

詞も殖て來た事は能く歴史と並行して居る。
尚ほ動詞で云つて見れば、行くを行かせ玉ふ、書くを書かせ玉ふ、立つを立たせ玉ふ抔と敬語を遣つて居るが、これは約め言へば使せる事で、至極日本の思想に適つて居る、と云ふは何故かなれば、我國では總て人を遣ふ事を豪いとして居る、それが遂に言葉まで浸入つて來たものであらう、そこで言葉は容易に消えるものでないから致方が無いとしても、我々は各自に改善を遣るやうにせねば不可ぬ。

それから言廻しの言葉に相手と自分との區別がある、私は上方ですが、上方ではお出でやす、東京では入らッしやいと云ふが、お出でやすは相手の邸の方を指し、入らッしやいは自分の家の事を言ふので、此くの兩者の間には區別がある、そこで手紙の文でも、我國では、お出で下さいますかと自分の方から相手の機嫌を訊いてかゝる、然るに西洋では、イフ、ユー、プリーズとは云ふものゝ、平たく云へば御勝手にといふ事になるのであるけれども、日本では何處までも相對の間に於て先方のお蔭を蒙むると云ふ事が風俗となつて居る、換言すれば、先方に重味を附けるやうに言廻すのを以て尊敬として居る尚ほ別言すれば、相手の意氣を迎へるのを主眼としてある。

殊に婦人の言葉を檢べると、是まで女子の三從と云ふ事の薫陶を受け來つた餘習かも知らないが、兎角御といふ字の附く言葉が多い、是で幾分女子の地位も知らるゝ、例へば、お足で宜かるべきをオミアシ、お箸で濟むものをオミオハシとまで、御の字を重ねて言ふものさへあるやうになつたのでも解かる西洋には決して斯樣な事は無い、併し適當な敬語は何處までも遣ふが宜いが餘り重複したのは聞苦しいのみならず卑屈に見える、

何か同じ會の催しに付て案内狀を出すにも、我國の風では先方の意志を尋ねるでは無く、何處までも西洋とは違つて頂く方である、然るに近頃は輙もすれば御參集下さるやう致し度と西洋流のも見えるや

うになつた、先づ其は其として、どうも近頃は婦人の思想が亂雜になつて、殊に東京に於ける女子の間には最も甚しいやうに感ずる、一例を云へば、私が關係ある某學校に於て、多數の女學生から、先生何か話してくれませんかと云はれた事がある、私は斯の語を聞かせられて不愉快で堪らなかつたのであるが、その後文部省の命で靜岡縣へ出張した時分に、此の縣下の學生の言葉の惡いには驚いた、關東諸國も左様である、繰返すまでも無く左様いふやうな言葉は浮薄に聞えるものである、それに斯ういふ言葉を遣うに從つて、必ず一方には無作法が増して來るものである、否、既に増して來て居るのであるから是等は風俗の整理上に甚だ害を及ぼすものなれば、一日も速く改良したいと考へる。

二十二

僕は何故妻を離別したか

法學士　桐　溪　仙

厭妻主義ではない

僕は妻を離別して既に一年餘を經過するが未だに獨身である。下宿住居も飽きたけれど仕方がない。其妻を離別すると同時に母は郷里(長野)の親類に預けて了つたが、何も僕だつて罪咎もないものに疵を附けて離別問題を持出した譯ぢやアない。近頃は厭妻主義などと云ふのが流行するそうだが、僕は那麼渦中に捲き込まれたと思はれては困る。この話をするには少し耻を云はねばならぬ、だが他山の石を以て世人を警戒するに足らば、僕は素ッ破拔かれても滿足だ。

女學校出は生意氣で困る

僕の妻は僕自身が見立たものではない。何でも僕

が高等學校時代に、郷里の親族共が寄つて集つて極めて了つたのである。僕の家は死んだ父が村長をしたこともあつて、郷里へ歸れば今でも相當の顔でゐられやう、母は昔氣質の先づごちらかと云へば嚴格な方で、色々僕の妻に就ては氣骨も折つてくれたが餘り教育のある者より結句小學校卒業位の學力で、裁縫とか、茶の湯とか、琴とか云ふやうな遊藝の道に明るいものゝ方がよいとなつて、僕にも碌々相談せずして極めて了つた。母は今日の女學校の生徒なぞは生意氣で、到底一家を修めるやうな者はないものと思つてゐたらしい。

不在中のことは解らぬ

僕も厄介になつた身で抗議も持込めず、妻なぞはどうせ自分の理想通りのものは貰へないことと諦めて、卒業後母と一所に引取つて、青山百人町へ一戸を構へた、僕は會社勤だから、毎朝宅を出て夕刻歸る家の方は萬事母が監督したので、果して兩人の間が圓滑に行つてゐたか、何うか其處迄も僕は氣が附かぬ。僕は元來理性に捉つた質だから、他人のやうに感情に支配さるゝと云ふことは稀な積りで。一問題が起つてもなるべく冷靜に冷靜にと心懸けてゐるのだ。

東京の新空氣に觸れた妻

凡そ三月が程は家庭に風波もなかつたらしい。然し田舎にゐた者が俄に東京の新空氣に觸れたのだ、母の服裝態度は別として、妻が非常に修飾たがる。それも都馴れた人がするなら、體裁もよく行くが、まだ田園趣味の垢拔けぬ癖に、島田髷を庇髮に代へたり、紅の造花を戴くと云ふ有様。母は頻りと止めたのだが、本人は入つては郷に從ふの意見を堅く持つて、母の言葉は一向に用ゐない。サア恁うなると白粉はこつてり附けるし、湯に行つても一時間以上に渉る。其度毎に母が小言を僕に聞かせる。

逐に妻と母の衝突

僕が晝の疲れから歸つて火鉢の前へ座るゝ、すぐ母が當こすりのことを云ふ。母の不在の折は妻が母の

ことを何くれとなく云ひたがる。『ヤレ〳〵又聞かされるのか』と思ひ想ひ歸つてくることは度々あつた。モウかうなると以前の平和を家庭が保つことが出來なくなつて、三人が物も云はないで夕餉の膳に對することは珍らしくはない。僕も勢ひ面白くないから會社の歸りを友達の許に暮して夜更けて歸る。歸れば二人の間の衝突を遠慮なく僕の前へ提供する、恰で裁判所の檢事のやうな役目に代らねばならない。何故こんな不愉快な家庭を僕は組織せねばならぬかと思つて、自分ながら呆れたこともあつた。

客の歸る頃に茶が出る

まア這麽ことも可い、妻も母も都馴れたら些しは修るだらうと思ひつゝ、彼是一年餘も立つたらう、然し妻と母は先天的に敵同仕に產れて來たかと思ふ位折合が附かず、益々衝突が激烈になつて來た、今度は母が『家風に合はない』と云ひ出す。妻は『阿母さんが舊弊だから』と云ふ。僕は毎日毎日モウ居ても立つてもたまらない。それに客でも來たとき、二

二十四

階から手を鳴らして呼ぶけれど、誰も返事をせぬ。癇癪を起して下へ來て見ると、妻も母も泣いてゐる。兎も角『話は跡で聞くから茶を持つて來てくれ』と二階へ上る。幾時待てど持つて來ぬ。漸く客が歸り仕度をした頃に、妻が前垂で眼をこすりこすり上つてくると云ふ始末。

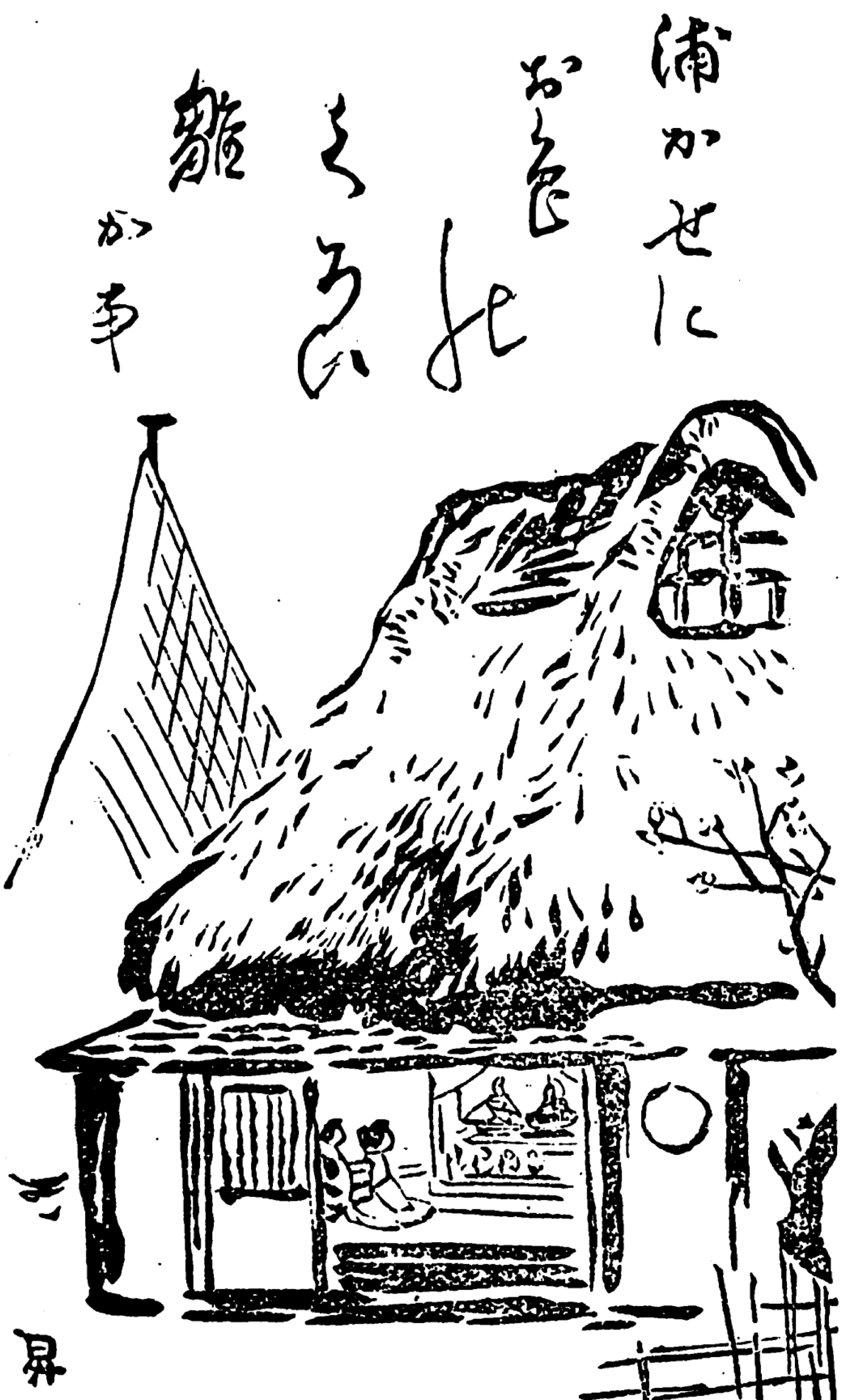
仕方がなくて離別に決す

僕も迷惑で碌々勉强も出來ず、家を持つて却つて不自由をするやうでは甲斐がないと思ひ。斷然この旨を鄉里の親類に云つてやつて、妻だけを引とらすことにした。母は無論大賛成で『一層離緣した方がよい、何うしても私の氣に合ひません』と決心が堅いので、本人にも其譯を懇々云ひ含めて離別したのです。其後今少し勉强をしたいと思ひ、母を又鄉里に送り返して爾來今日迄獨身でゐるのです。

春の野遊

千金樂 喜美子

筧の水は凍りて音も無く隙洩る風は身を切るばかりと思つたのも早や昨日と過ぎて、時候は追々と暖かくなつて來る、天氣は良し、向島や御殿山あたりの摘草は何うであるかと云へば、暑い寒いも彼岸まで、その彼岸の中日即ち春分の日で、宮中では春季皇靈祭を行はせらるゝ二十一日頃は丁度善い、偖その頃になると敢て向島や御殿山あたりに限つた事は無い、新宿方面少し離れては大森邊でも良いので、郊外にはポツ／＼菜の花の咲いて實に氣散じになる、春の野遊は又別格であるが、そゞろあるきの次で路の傍或は堤の上などに春の暖かさを受けて生ふる愛らしの植物は何かと云ふに、今更ら繰返すまでも無く、嫁菜、蒲公英、すみれ、すゞな、土筆、野蒜などで、少し



遅れては餅草も出るが、それらを摘草として半ば樂むと同時に、お總菜といふまでに行かなくとも、チヨツト夫等も調理の仕方で異な風味を食膳に上す事が出來るものであるから、少しく其事を申上げても見やう。

第一　土筆

植物學からお話しても隨分面白い事があるのですけれども、自然長くなりますから其は後日に讓るとして、以下すべて之を畧し、單に風味の事のみを述べて置かう、偖土筆の前身である杉菜といふのは、實に其名の如く能く杉の葉に似て居る草である、併し斯うなつたのを食べるので無いといふ事は皆樣がよく御存じの事で、其如何にも筆に似た形の時に摘み袴を取り、茹て充分に灰汁をだし、細かく刻み、生醤油に極少量の砂糖を加へてカラ〳〵に熬り、熱い御飯にかけて食べるのであるが、ゆでゝ灰汁出しの後、三杯酢にして食べらるゝものである。

第二　嫁菜

嫁菜は摘みて根を去り、尚ほよく塵芥と枯葉とを除き、水にて奇麗に幾回か洗ひ、餘り柔かくならぬやうにゆで、冷水に洒して灰汁をぬき、氣をつけて細かく刻み、之を食鹽と極少量の砂糖にて味を附け、炊き立ての御飯に交ぜて食べる時は、頗る風味よろしきものである。

第三　蒲公英

たんぽゝは摘みて根を切り、枯葉等をよく去り、清水にて洗ひ、ゆでゝ灰汁を出し、ひたしものとして食べるも宜く、また時としては吸物の靑味にも妙なるものである。

第四　田芹

田芹は流れのほとりや池の邊によく生える草で、なか〳〵香氣も强く、ゆでゝ胡麻よごし、おしたしの外白和にしても食べられ、又は吸物にも使用せらるゝものである。

第五　野蒜

この野蒜は食べた後で兎角一種の臭氣が人の鼻を撲

つものであるから、成るべく人中へ出る時などは先づ遠慮した方が可い、尤もゆでたものは生ほどではないが、人に依りては頗る生の方を好かれるが、之は婦人方には最も注意すべき事である、偖ゆでたものは何うするかと云ふに、丁度葱ぬたのやうに酢味噌合にするのが一番好味であるが、分量に應じて剝身を鹽ゆでとなしたるものを多少加へるときは、一層風味を増すものである。

尚ほ此外に無いでもないが、それ程美味といふ品でも無く、たゞ春先野遊びの序でに摘んだもので、それを無汰にせず、チヨツト斯ういふ調理の仕方もあると申して、すぐ塵芥箱へ捨てらるゝものを、その生涯を清うせしめんとて腹の中へ葬る傳授をお教へ申した迄であるが、大抵一度はゆでるので、このゆで工合で色も味も無くなるのであるから、火加減やゆだり加減は齒ごたへのある樣と云ふの外、紙上では別にお傳へやうも無い、けれども色を失はぬやうにする事は、何でも青物をゆでるには、湯の煮えたちたるを見て青物を投れ、そして決して蓋をしてはならぬのである。

輕便日常料理

中島鎮子

偖毎時もながら相も替らず面白味も又お可笑味も無いので御座いますが、當春以來病氣の爲に長らくお休みいたした申し譯に、素人料理の二三を埋草までと申しては濟みせんけれども、最早ソチコチして居ります中に、陽氣も宜くなりまして、そして徐々花盛りになりますので、一ツ時候相當のものをと考へては見ましたものゝ、何うも御覽に入れる程の物は迚も出來ませんが、チヨツト目先が異つて居りはすまいかと思はれますものを取揃へてお笑草に供する事と致します。

○略會席三題咄しの取揃へもの

一 大栗　三ツ

一鳥貝

一オックステール

△大津絵節もどき

「隅田堤人の出盛る賑ひに、押されて花を三囲や、ついいつとなく言問の、名に因みある都鳥、飛んで戻りの参詣は、牛の御前で願いごと、あまたすまして昼御飯、

先づ〳〵こゝらが申上げました、御約束のお笑草で御座います。

一さて膳中の趣向で御座いますが、大粒の栗を能く湯がきて柔らかになりたるものを、照煮にして、猪口に三ツ、これが乃ち三囲で御座います、

一鳥貝を能く洗ひて水を切り、これを酢のものとして山葵をあしらひ、向附に致して、都鳥を見せるので御座います。

一オックステール　これは御存じの牛の尾骨で御座いまして、薄く斜に切りたるものを、スープ仕立の椀の物にいたして、和洋折衷では御座いますが

これで御飯を召上れば、全く牛の御前で尾しまいといふ落になるので御座いますが、擔がれた抔とお叱責は眞平御免を蒙ります。

○次は一品宛古歌俳句に因む趣向料理

一酢のもの

古歌に、櫻咲く、木の下風は寒からで、空に知られぬ雲云々の意に形どり、櫻海老の頭を取り除き、大根おろしに交せて出せば、安直手軽のものにてチヨツト味の可なるもので御座います、

一朧の猪口物

名高き古句に、唐崎の松も春夜の朧にてとあそ、その唐と申す所より、乾きたるものゝ因みのみならず、松に因む松魚節の掻きたるものを朧に煮上げ、そして朧に縁のある月をば、卵の湯がきたるものゝ殻を剝ぎ取り、その儘圓ごと猪口の中へ入れ、右の朧を振り掛けて出す事で御座いますが、また一段と替りまして興味の深いものであります

一椀の物

同じく古句に、梅若菜、まり子の宿のとろゝ汁といふのがある、これはチト時節が過ぎましたが、矢張春のもので御座いますから、取揃へて置く事に致しました、これは普通のとろゝ汁で御座いますけれども、また變つた所で趣向も如何かと考へ附いたので御座います、

〇よせ鍋

一この寄鍋と申せば、別段に改めて申し上げる迄も無く、皆様が御承知の樂しみ鍋で御座いまして、是は御家杯の最も晩餐にお手輕な召上りもので、その材料はと申しますれば、蒲鉾または竹輪蒲鉾或ははんぺん、鶏肉、椎茸、栗、銀杏、簾麩、高野豆腐、木耳の細にたちたるもの、もやし三ッ葉、竹の子その他御隨意に小鍋の中へ投れ、そして煮ながら召しあがれば、その名に違はずお樂しみとなるので御座います、

今回は之で御免を蒙る事と致して、次回には何か時候相應のものを取揃へて、御笑草に入れる事と致しませう。

家庭應用 瓦斯の十德

梶山杳丘

維新前と明治の今日とを比較し來れば、都鄙の別なく暮向萬端が大層に變つて來て居ることは事新らしく云ふまでもないのであるが、殊に都會生活は非常に複雜て居るのみならず、却々困難で、例へば、二三十間乃至一町四面もある邸宅を構えて居らるゝ方も夫相應に出費もするのであるが、併し左様いふ方は亦それ相當の收入があるのであるから、幾分の餘裕もある、從つて然まで日常窮乏を感ぜらるゝと云ふ事は無いが、同じ市中に住んでも僅か二間間口位の店舖を持つて居らるゝ者の中では、場處に依りては雨戸の仕舞所も無いといふ有様、そこで據なく店頭の揚板を上げて藏置といふ始末である、是等

は迚も地方生活に親しんで居らるゝ者の夢想だも及ばないのであるが、併し都會生活の裏面には斯う云ふ世智辛い事が潜んで居るのである。

殊に東京の中心とも云はるゝ京橋や日本橋、又は神田邊と來ては、

謂ゆる土一升に金一升

と云ふ位に土地が貴重であるから、無闇に臺所などを廣く取る事は出來ない、縱んば廣く取つたにしても、在來の竈では非常に薪が損であるのみならず、殊に二ッ竈に銅壺附などゝ來ては場處ばかり塞げて全で勝手は竈のみに占領されて居る、それは良いとしても、何うも薪を焚く竈では煙が全家に遣廻るから、二階も下座敷も隅から隅まで燻ぶッて了う、また夫位なら我慢も出來るが、この薪を遣うに就ては直に燃燒ないから焚附に木片とか何とか云ふ物を要する、それも先づ善いとして、困つた事には若しも中途で火の消えた時には、口で吹くとか又は吹竹などの御厄介を煩はさなければならぬ、それに薪の不

自由な事は火力の加減が思ふやうに出來ない、それのみならず焚附けるにも、また其間にも差しくべるとか、後で餘燼を消さねばならぬとか、餘火を取らねばならぬとか、それは〳〵種々な手數が要る、けれども世人の多くは昔からの習慣で左程不便とも又不經濟とも思つて居られぬやうである、否、中には氣附いて居らるゝ方が無いでもあるまいが、如何せん其地方に之が設備の無い所では致し方が無いのであるが、折角その設備のある東京その他の都市などに住はるゝ方でも、實に輕便で而して經濟なる

文明の賜物たる瓦斯

を使用せらるゝ事をなさらぬ家が澤山にある、それは何故であらうかと云ふに、瓦斯を引用するといふ事は便利であるには相違ないが、

費用の澤山に要る

ものであると云ふ觀念に支配せられて居るからではあるまいか、之は一寸素人の考として無理からぬ事であるが杳丘なども實は其御連中に洩れぬのである

が、先頃東京瓦斯株式會社内に重役福島氏及び營業主任の藤崎氏とを訪ひ、兩氏の懇篤なる説明に依りて從來の疑團を氷釋する事を得たのである。

一口に瓦斯といふが、實際瓦斯には澤山の種類があるので、炭酸瓦斯とか臭素瓦斯とか、又は能く自轉車の燈光用に使はるゝアセチリン瓦斯などゝ云ふやうに澤山あるのであるが、今玆には左樣いふ類を云ふのでは無くして、彼の石炭を燃えて其より生ずるところの石炭瓦斯をいふのである、

之を家庭用および街燈用はた動力用として供給して居るのが即ち東京瓦斯株式會社で、同社は明治十八年十月の創立で、資本金は一千七百萬圓、瓦斯管の延長は實に五百八十九哩の長きに達して居るといふ事だが、之は單に東京市内のみでは無い、周圍に於ける附近町村までも及ぼして居るからである、乃で街燈用とか又は機械の動力用とか云ふ方のお話はお預りとして措いて、

純然たる家庭用として如何に便利で而して經濟的で、強ち中流以上の家庭と云はず、即ち中流以下の家庭でも、凡て之を引用せられたならば、

時間の上に於て將家政經濟の上に於てその他あらゆる方面に於て得る所の利益が何の位であるかを事實の上からお話して見やう。

前にもチヨツト述べた如く、從來の日本式臺所に使用されて居る薪や炭ほど燃料として不適當なものは無い、何故なれば、熱勢の微弱な上に、煤煙を上げ、塵埃を生じ、火花を散らし、灰殻を殘すといふ風で、あらゆる不經濟、不潔、不衛生、不安全等の要素を含んで居るのみならず、夫が爲に婦人の生命とも云ふべき頭髪、皮膚、衣服などは非常に汚損せらるゝ所から、自然婦人をして

婦人の天職たる庖厨の事

に從ふのを厭ふやうな傾向の因となつて居るかゝる不完全な庖厨に於て、我々の生命を養ひ團欒の樂しみに必要なる食膳が調理さるゝのであるかと思へ

ば、實に膽の冷える話ではあるまいか、されば如何なる苦痛困難を排しても、出來得る限り家庭上の費用を犧牲に供しても、燃料の改良は勿論庖厨の改善を謀ると云ふ事は家政整理の第一着歩ではあるまいか、併し改良の改善のと云つたとても、何も大して費用を要するといふのでは無い。

凡て會社などゝ云ふものは營利業で無いものは無いのであるが、彼の瓦斯會社では殆んど市内に於ける專有權を握つて居るのであるから、謂はゞ電車のやうに値上げでもしやうと思へば自由なのであるがそれでは折角公衆の便利を計らうと云ふ主旨に戻るといふので、凡て社會の物價が騰貴したにも拘はらず、同社では矢張從前の通りの安價で需用に應じて居る、即ち普通一千立方呎の瓦斯代が金二圓四十錢の定めであるが、

炊事用及び暖爐用は二割引

といふ大勉強で即ち金一圓九十二錢で使用が出來るのである、この一千立方呎の瓦斯があれば、三升の

御飯なれば約そ六十四、一升の湯なれば三百回に用ゐられるだけの分量があるのであるから、薪や炭の騰貴した今日では瓦斯に越した事は無い。

以前同社では專門の技師が發明して專賣特許を得られた松印竹印梅印といふ三種の竈を、瓦斯を引用せらるゝと同時に、注文主に買求めて貰つたものだが、昨今では何うか一軒でも餘計に瓦斯を使用して頂きたいと云ふので、一升から六升迄の竈の中大小に限らず瓦斯引用家には安價にお貸附をすると云至極便法を講じて居らるゝので、その需用は日に増し盛大に趣くと云ふ事だが、それは人情左樣なくてはならぬ、それに付けても尚ほ引用に多分の費用を要しはせぬかと心配なさる向が無いでもあるまいが普通の家庭で之を取付ける、即ち臺所の柱とか又は床に瓦斯口を出すまでは會社で負擔すると云ふ事なれば、比較的費用は要らない、それ故に夫婦掛向ひ位の家庭などでは、第一手數を省くのみならず、臺所も廣く場所を取らないから之位經濟な事は無いの

である。要するに燃料としての瓦料の價値を概括して見れば、第一瓦斯は火熱が非常に強盛であるから三升の御飯が如何なる寒中でも、僅か二十五分前後、六升で四十五分間位で熟上り、湯なれば四五分間で沸くのであるから、家政上多用の婦人方に取つては此上もない重寶なものである、第二瓦斯の點火は最も輕便で、マッチが一本ありさへすれば子供でも又は老人でも最も容易に點火する事が出來る、第三瓦斯は地中に埋めてある鐵管に依つて、夜晝の差別な



く送られて居るから、薪や炭のやうに納屋の必要も無く　また薪屋炭屋に命するといふ手數も要らない上に、何時でも必要に應じて捻子を開けば使用する事が出來るといふ便利がある、第四瓦斯には煤や烟もなく、また灰燼もないから、室内や衣服を汚損し不潔にするやうな虞が無い、第五瓦斯は捻子をひねりさへすれば、直ちに消えて後に灰燼が殘らないから、火消壺の必要も無く、また火災の原因を作ると云ふやうな必配も要らない、第六瓦斯は點けるも消すも自由自在で、必要に應じて使用する事が出來るのであるから　炭火のやうに平生之を起して置くといふやうな無汰が省ける、第七瓦斯を使用する臺所には何も外のものは要らない、竈と七輪さへあれば充分であるから、是までのやうな廣い臺所は要らない、第八まだ燃さない瓦斯には一種の臭氣があるけれども、之が爲に煮炊した飲食物に臭氣が移るであらうと氣遣はるゝ方が無いとも限らないが、それは決して其樣な心配には及ばない、第九瓦斯は薪や

炭火と違つて、捻子の加減で火熱を強くも弱くも自由にする事が出來る、第十瓦斯は一度點火した以上は、能く風力にも耐へるものであるから薪や炭のやうに半途で消えるの、又は燻るのと云ふやうな事は無い、それ故に、火吹竹に相格を崩して折角の美人が殊更にお多福の眞似を爲るにも及ばずまた澁團扇をバタ〳〵灰や塵埃を煽り立てゝ、貧乏神を追立てるやうな騷ぎにも及ばないのである、この他擧げ來れば數限りも無いのであるが、これを約言すれば

家庭の經濟と衛生

の二點に於て、燃料として炊事用にも又燈火用にも將煖爐用等としても此の石炭瓦斯に及ぶものは無いのであるから、市内の重なる家々では既に之を引用して居らるゝのでも分かる、どうか全國到る處に斯く云ふ設備が出來たならば、家々を利するのみならず、延いて國家を益する事になる、それは左樣として既に之が設備のある土地に住みながら、斯の文明の賜物を利用しないとは如何にも愚の極ではあるま

いか。

市内婦人職業のさま〴〵

紅紫女史

▲世の中の進歩に連れて生活の度が高くなる。米一升二十錢もする今日に中流以下の婦人は宅にノラクラと遊んでも居られぬ。女判任官も出來た當節に、男子一人の瘦腕では所詮世帶も持たれぬ義とあつて始めは小使取りと云ふのが條件で終ひには、男子の方で女子の收入を豫算に組み込んで了う譯になる、

通常敎育のあるものは

小學教員、貯金管理局、鐵道局、銀行、諸會社、

郵便局、市内の重なる商店の家計方。

其外、自宅に『裁縫、生花、編物教授』の看板を出すのもあれば、交換局で『若し若し何番エ』をやるものである、尙印刷局、砲兵工廠、煙草製造所などへ出で、年齡や仕事によりて、區別はあるが大抵日給十二三錢から四五十錢のところ。

▲最もその内で、銀行、會社などへ雇はれるのが、一番實收がある。始めは雇員で日給制度に支配されるが、次第に事務振も覺え込んで、書記補、書記などに任用される、此處まで仕揚げるには一二年はかゝるけれど、年に二度の賞與が渡るので、コートの新らしいのも出來る道理だ、日本橋邊に毎朝電車で下りる、この事務員君は夥しいもので、何處の奧樣、令孃かと思はれる位の目覺しい服裝を著けてゐる、これに引代へて煙草工場や砲兵工廠へ通ふ女の姿はと見ると、慘然なもので、薄汚れた白布を肩から胸に引ツかけたのや、塵埃に塗れて、幾日も梳らぬ髮の麻のやうに亂れたのを廂に固めたるが、煮〆のやうな着物を著て、大きな辨當持參で通る。例の貧民町を夕方通る、と此女達の一團が淫靡な唄を口にしながら歸つてくるのを見かけることがあらう。

▲砲兵工廠や煙草工場へ通ふ女子は云ふまでもなく教育に乏しい。そして一種猜忌に富んで眼を擧げて途上に行き會ふ婦人の品定めをやりたがる。『ちよいとご覧よ、あの女の帶をさ、まアおかめの癖に生意氣な』と云つたやうに嘲笑して喜ぶ。中には約やかな口數も多くない温順しい女子がないでもない。然しその十中八九は百囀りに囀つて對手の者が恐縮して行過ぎるのを以て一時の快とする。かくて我物顏に世間を歩く餘裕ある人々に對し、せめてもの腹癒せをした積りでゐるのだ。其罪は憎むべきだが、其情の哀れむべきは云ふ迄もない、かゝる不幸な境遇に人となつた婦人の行末は頗る寒心すべきものがある。

▲是等職業に從事し、少くとも他人の手を待たずして、自己がふところへ直接幾分か金錢を收め得ると云ふ事實が禍をなして、金錢に對する觀念が世間知らずの娘を多少毒する傾きを生ずる。彼等の樂みと云ふは畢竟眞砂座、三崎座の道樂位であつて、甘んじて誘惑の淵の中に忍び込んで行くと云ふのだ。結果遂に知るべきので、將來救ふ可からざる墮落の底に沈んで行くのである。

▲女子の職業は以上の外に壽司、大福、しるこ屋臺の賣子、團扇張、足袋縫ひ、竹揚枝の植毛、繪ハガキ安繪の色つけ、ホヤの破れ買、賣藥行商など擧げ數ふ可からずである。中には朝から兒供を背負ひ、袋一個を携へて佐久間町邊の新炭のこぼれを拾つてあるく者がある。男の着古した印絆纒を着し、股引、腹掛と云ふ出でたちで土方人足の手傳ひをするものがある。その中にも煉瓦の洗ひ持ち運びとか、砂の麁細を篩ふ仕事は女子でなければならぬそうだ。選屋女達で一番實收のよいのが魚河岸の問屋にゐて料理屋なぞへ魚の持運びをする役目だそうだ、朝の河岸は重に料理屋の主人なぞがゐて『オイ頼むよ』とやると、『よいきた』と請合つて車の上とか、一定の場所へ運んでやる。三錢五錢の處を二十錢。五十錢中には一圓紙幣の氣前を見せる兄さんもあるそうだ

其故月の末には二十圓近くも稼いで今日迄何年と云ふ間續けてゐるのがある。

現代の女性

赤司繁太郎

この問題を詳細に説かうとするには、各派の小説家が描かれたる、例へば、虞美人草に顯はれたる藤尾とか、又はほとゝぎす中の浪子のやうなものを逐一捕へ來つてお噺をすると興味もあり、且つ現代に於ける女性の傾向を如何に表はしてあるか如何か、時代の變遷は如何やうなる經路を有つて來たか、また今後有つて來るであらうか抔と云ふ事が解つて面白からうと思ふのであるが、何分餘暇が無いので左樣いふ事まで調べて居られない、依つて極々手近な一例に付て視察を下して見やうなれば、

彼の田中宮相の結婚問題の事に關しては、兎に角表面は一應落着したやうであるから、今特に私が之を捕へ來つて云爲するの恰かも死屍に鞭つやうな感がある、之に加ふるに、この問題も某新聞紙の言ふ如く、單に田中光顯氏たる一私人の問題であるから決して餘人が之に嘴を挾むべきものでは無いのみならず何も斯の事は毫も時代と或關係を有つて居るものでは無いと云へば、那は何も我々が容喙すべき權利の無いものであるけれども、若しも斯の事が現代に於ける或思潮を顯はし來つたものであるとすれば、多少我々は之に關して注意を拂ふべき直打、否、批評を試みねばならぬ、と云ふものは大に風敎に深き關係を有して居るからである。

一體六十以上のお爺さんが二十歳ばかりの若い婦人を貰うと云ふ事は、どう考へても解せない、第一物には大抵釣合といふものゝあるものだが、これは其の釣合が取れない、況して道徳の上から考がへても眞相が摑めない尤も年寄が若い女子を貰うにしてからが、年齢は戀愛を妨げるものでは無いと云ふ點から見れば何も差支は無い、それ故に彼等兩人の間

に於て、眞誠に男は女を愛し女は亦心底から其の男を慕つて居つたものならば、それは毫も差支は無かつたであらうが、若しも爾うで無かつたとすれば、大に詰責せねばなるまいと思ふ、固より中世紀に在りし如く、武士道の中に養はれたる婦人に對して尊敬を拂はねばならぬのである、けれども或一部人士の如きは今猶ほ婦人を一の機械視して居る、萬一左樣いふ考からしたとすれば、實に惡みても猶ほ餘りありと云ふべきである、翻つて婦人の肚の中を索れば、六十と云へば最早餘命幾何も無いので、長く生きた所で十年か乃至十五年であらう、去れば偕に伉儷を樂しむ事は出來ない迄も、その歿した後は鉅萬の遺産を我物として氣樂に生涯を送る事が出來るのみならず、貴族何々の未亡夫人として一世の尊敬を享けるに足ると云ふやうな心地から婚約をしたとすれば言ふまでも無く之は愛を賣るもので、決して士人の共に伍するを屑とせざる女子と云はねばならぬ、これは餘りに他を忖度し過ぎた說かも知らないけれども、少なくとも私は彼女たる者は現代女性の影を顯はして居るものと認める

明治維新以來の婦人は大層な變遷を來たして居る、その一班を視察するには彼の新聞紙の所謂三面記事なるものを見れば直ぐ解かる、即ち其の三面記事なる物の中で如何なる事が大部分を占めて居るかと云ふに、說明する迄も無く女性に關する事であるから、之に注目すれば其間の傾向および變遷の度を略知る事が出來る、即ち新聞紙なるものが世に出でゝから女性の事を書き立てたのは藝妓の事で、それから娼妓に轉じ、次で女學生となつて居る、斯の變遷から考へて見ると、將來は如何なる女性の事に推し移るだらうかと云ふに、今後は貴婦人謂ゆる交際社會に飛廻る者に遷るに相違ない、今や深い視察を加へて見ると、結論は藝妓樣の者が殖て行く、即ち其の性格に於て、既に斯ふ云ふ者が社會の一階級となつて顯はれて來た所を見れば、何うしても今後は左樣いふ貴婦人に轉ずると私は豫想して居る

茲に現代婦人の性格が顯はれて來ると云ふのは、昨年の初思想界の一問題となつた平塚春子、乃ち某文學士と道行をした女子の事であるが、斯の春子は女學生氣質を現はすもので無い、それは彼女の行動が常識で無い、何故なれば、彼女は妻子ある某文士を慕ふたに相違ない、文士も又彼女を憎からず思つて居たのであるが、坐ろに妻子ある身の此を捨て彼を取ると云ふ事も出來ない、併しまた棄つるに忍びないで、遂には彼女の口から一言貴郎を愛すると云ふ語を聞きたいと迫る事が屢數に及んだが、彼女は死の刹那で無ければ其語を發する事は出來ない、若し貴郎にして眞に春子の口よりして其語を聞くと同時に、妾をして眞に貴郎を愛せしめんとならば、何卒か妾を殺して呉れと男に迫るので、男も遂に其氣になり、そこで兩人手を携へて鹽原へ落延たので、通常の缺落などゝ云ふものでは無く、實は彼女の希望通り殺害せんが爲であつたのである、それ故に例外であると云ふけれども、この平塚春子なるものは女子大學の卒業生で、そして同大學の櫻楓會員である、然るに當時頻りに同會では本會員では無い杯と云つて之を非認しやうとしたが、それは無効であつた、一體女子大學の教育の仕方が前述の如き氣風の女子を造るので、その一斑は斯の平塚春子を見ても知らるゝのである、乃で私は是を以て例外と見る事は出來ない、或半面に於て確に現代の女學生氣質の反映であると信ずる。

女子の事を視察するには異性の男子が爲るよりも、寧ろ女子自身をしてせしめた方が宜い、それには今日以後洋行するものは夫人を携帶して行くが宜いと云ふ説が某新聞紙に見えたが、成程これは一理ある事で、是迄のやうに男子ばかり見て來た事では、急度誤りが無いとは云へないので至極賛成である、而して之は單に洋行者のみの事では無く、現在我々が日々面り見る所の社會に於ても之を適用すべきものであると思ふ、去れば私が云ふ現代の女性觀も或は間違つて居るかも知らないが、兎に角私の觀る所

を忌憚なく申せば、今の女學生の通じての傾向は男子に對して馬鹿にして居る、少し堅い言葉で申したならば、輕蔑といふよりは寧ろ愚弄して居ると考へる、斯うふと無暗に女子を惡くいふやうだが、決して左樣では無い、畢竟それは僅かに女子が目を覺して來た事が原因である、舊時の女子は習慣や道德の爲に束縛を受けて居たが、維新以來ツイ近年まで女權擴張といふ事が叫ばれた、斯の聲を初めの中は男子が女子に同情するものと考へて居たのであるが、漸次に教育が進み、一方世智辛くなると同時に、今度は女子自らが女權擴張といふ事に氣が附いて來た、これ全く教育が其の大原因をなして居る、此の點に於て女子大學は大部分を荷つて居るのである。

維新前の女子は單に感情の教育を受けて、男子のやうに智識の教育は、全くでは無いが概して受けなかつたが、明治以後女子教育の勃興と共に理性の教育を施されるやうになり、從つて女子の智識が増す

と同時に戀愛の度も高まつて來た、とは云ひながら以前は感情のみであつたものが、一二年以來の三面記事を見れば、男子が熱すれば熱する程女子が冷靜になり、言はゞ男子が進みかければ女子が退き、之に反して、女子が進めば男子が退くかと云ふに之は左樣でない、何時も明かなる而して冷かなる理性を以て之を迎ふるのである、元來戀愛といふものは感情が主要であるにも拘はらず、多くは其を冷靜なる理智を以て判斷するやうになつたのである。

右に關しては丁度イブセンの戯曲中に在る人形の家、即ちノラの一齣は能く其の邊の消息を傳へて居るやうに考へる、斯のお話をすると長くなるからお預りとして、畢竟するに現代に於ける女子は、凡て以前と變つて自分本位となつて來た、その自分本位といふものは何に由て導かれたかと云ふに、即ち教育である、その教育といふものは如何なる事を教へたかと云へば、繰返すまでも無く自覺といふ事で、去れば現代の女性は何れも自覺心の上に立つて居る

と云つて然るべきであらう。

（文責在記者）

藏原代議士の家庭

山崎彩紅

記者は所用あつて麻布區本村町方面に趣いたを幸ひ、曩に貧乏を標榜して中原の鹿を爭ひ、然かも熱誠遂に吾が東京市選出の代議士てふ榮譽を擔はれた藏原維郎氏の邸宅を訪ふた。麻布區の奥にして本村町と云へば最も廣く、種々まご附いた果に、某と云へる石門嚴めしき邸の前から左折更に右折、風雨多年塗の褪せた黑板塀見附の門がある、『藏原』とのみの表札を仰いで門をくゞると四邊曠漠と云ふ程でもないが、玄關に達する二三十間が程は樹木もない、唯玄關前に一本面白い松がくねつてゐるばかりであつた。有繋は貧乏で擡ち得た代議士が住居よと感心して刺を通じた。

應接間の趣向

午前八時に垂ん〳〵として主人公未だ床を出でずとの答へ、春眠曉を覺えずと云ふのか。白い前垂掛の下女君に導かれて二階の應接室に通る。室は八疊で外の廊下を隔てゝ庭の廣さに氣も爽々するやうだ。閑靜な土地柄の處へ持つて來て、原ツパのやうな眞ン中に、チヨンと立つた一軒立、内庭は幾分修飾を加へて樹木の枝葉が剪り揃えてあるのも見へる。南向の極めて日當りのよいところで、廻り椽の欄干にもたれてゐると琴の音が聽へる。貧乏もこの位の貧乏なら、まんざらの不平もあるまいと思つた。然し室に閉て切つた障子の紙はところ〴〵破れて風に吟じてゐる體裁から思ふと、聊か對照が妙だ。室に入つて右の床棚を見ると兩親の肖像を收めた額面が二ツ金絲の陣笠が柱に懸つて居る、右の床には古色ある五尺の佛像と朱塗の木魚がある、軸は細川潤次郎氏が認めた『五月三十日、車駕還自西京恭記』と云ふので『宵肝行宮三十旬』から書き出して『萬歲聲隨玉輅塵』と筆を收めてある。

かたへには紅梅一枝の瓶が置かれて我家の春を見せた手際は嬉しかつた。廊下に偏つた隅棚の上には小さな佛像や、由緒の深そうな石片や、其他

髑髏が据へてある

主人待つ間とて下女君の持ち込んだ新聞紙は『萬朝報』『報知新聞』『娯樂新聞』なぞで、中にも『保險銀行時報』なんかは一寸眼先が變つてゐた。主人公は容易に來ぬ。此朝來客と云ふのは記者の外に小坂鑛山の鑛毒陳情委員、碑文を草して貰ひたいと云ふ洋服子。その内に下女君は雜巾懸けを始めて廊下を一周する。應接の座敷の床から片附けて境界の襖を左右に開けるとすぐ其處は六疊の書齋である。此室には珍らしいものが澤山見へて、その中にも達摩と眼につくのは

大きな剝製の動物

である、下女君の説明によれば熊とも附かず、角のある處から見ると羊に似て非なるものなりと。これが正面の光線取りの窓下に置かれて、其前に机が

ある、黄と赤の變つた机懸けの覆彼で、上には法律本の二三冊置かれてある、机の抽出は何れも栓が拔けて親指程の孔がある。左方には朱塗の大きな本箱に『雜書』と太く書いてある。電燈は經濟の上からランプに替へられたと見へて自在釣が眞ン中にたれてゐた。主人の惟郭氏は議會から歸るとすぐこの書齋へ引籠る、而して例のスパルタ式のアゴ髯を撫でゝ讀書を事とするのだそうだ。

人前はつくらぬ

『甚だ失禮しました、どうも忙しくて』と氏は座に就いた、夫々來會者の用向を聽き終つたら直ちに手を叩いて『ヲイ飯を持つて來てくれ』と怒鳴る。畏まつて下女君が黒塗の高足膳を運んでくる、朝菜は味噌汁と鷄卵と漬物位で極めて質素である。常の人が代議士になつたとでも云ふと、矢鱈に見得を飾つたり、人前をつくろひたがるものだが、氏に限つてはそんな僞善な處は微塵もない。そして厭味はなく、言々句々眞情が籠つて、眞摯な態度は如何にも人に

畏敬の念を與へる。

六人の子福者

氏は六人の子福者で、長子は開城中學の生徒、次女は實踐女學校へ通つてゐる、其下は小學校なぞで末子は當年三歳夫人に抱かれて遊んでゐた家庭は至極圓滿で模範的であると云ふ評判である。



家庭と人格

加藤咄堂

人間の直打も茲百年以來大層に下落した、と云ふは外でも無い、彼の進化論といふものが世に出てから、人間の先祖は猿である、イヤ猿らしき獸であるイヤ蛙のやうなものであるの尙ほ進んではアミーバーのやうな單細胞動物であつたと云ふやな工合で如何にも人間の價値が下つたのであるが、先づ其は兎も角として、

人間と獸との區別は如何なる點にあるかと云へば、何も毛の有無いでは出來ない、去れば言語あるが爲かと云ふに爾うで

もない、即ち自由意志あるが爲である、けれども彼の動物なるものは本能のみで別に目的意志といふものが無い、之に反して我々人類は、意志の自由を以て某目的に向つて自分が判斷をして遣る、斯く目的意志あるが爲に道德上の責任といふものが生じて來るのである、併し如何に自由でありとは云ひながらも、先天の必然の理法には支配せられざるを得ないので、その第一ば遺傳である、それ故に種々の氣象の分ちがあるのであるが、

ガーレン、ブント氏は之を四通りに區別せられた、即ち生れつき氣の早い人と遲い人と、氣の強い人と弱い人とがある、之を組合せると

早くて強い人　と　早くて弱い人

遲くて強い人　と　遲くて弱い人

右の如き四種類となる、而して其の早くて弱い人とは多血質で、云はゞ江戸ツ兒のやうにオイソレと、沸え立つのも早いが、又冷るのも早い、謂ゆる藥罐的の氣象のものを云ふのである、次に早くて強い人

といふのは、君は何うも彼の事は善くない、抔と云はれると、さうかナーといふ工合に考込む、謂ゆる神經質の人を云ふのである、第三に遲くて強い人といふのは、一口に云へば鐵瓶的の人で、第四の遲くて弱い人とは、惡く云へば無神經のやうに感じの薄い人を稱するのである、斯樣に遺傳性には四種類あると言はれたが、之は先天的のもので個性や品性と云ふものは外界に動かされて種々に變る、その實例は古來偉人傑士や烈女節婦等が名山大川の下に生れたのでも解かる、併し山岳に生れた者は獨立自由の思想には富んで居るが、どうも頑固である、之に反して平原に生れたものは豁達であるが、その替り輕薄たるを免れない、尙ほ引括めて云つて見れば、關東人は火山的で宵越の錢は遣はないと云ふに反して、東北人は貯蓄心に富んで居る、凡て是等は自然の物質的關係であるが、尙ほ一つは社會の影響を享けるのである。

或學者は、人間は模倣の動物であると言はれたが、

成程これは名言で、言語でも文字でも習慣でも皆模倣で、若しも我々が斯の模倣を離れて、新發明の言葉など〻云ふもので演説をしたら何うでせう、自分は解つたにしてもサッパリ他人には通ずるものでは無い、それは言語ばかりでは無い、文字も習慣も左様である、殊に流行といふものは一の習慣であるがその習慣さへも時流に隨はないで、今時裃を着たり、又はチョン髷を結つたりしたら如何であらう、中には爲る者もあるか知らないが、それでは今時の風俗に似付かないから、裃も着けなければチョン髷は結はないで、袴羽織とか洋服とか、頭は散髪にする、即ち悉く模倣ならざるは無しである、

一體田舎育ちのオットリして居るが、東京育ちの者はセヽコマシイ、之は周圍の境遇にも依るのであらうが、それよりも家庭は尤も個人の格格に影響を及ぼすので、即ち

氏より育ちといふ俚諺

でも立證せらる〻のみならず、實際に於て家庭の貧富貴賤は直ちに個人性の上に影響する、併し我國では昔から貧なる者が貴く、富みたる者が賤められて居つた、即ち公卿と士、士と町人といふ風に比較して見ると直ぐ知れる、その貧富は財産の有無で、貴賤は性格の高下に基いて岐つたもので、縦ひ財産は乏しくとも、その氣品に至りては暗香疎影横斜の裡と云ふ風に育ちに依つて染込んで居るのである。

そこで之は一寸飛離れて居るやうであるが、實は密接の關係を有つて居るのであるから、三十九年度の統計に依つてお咄して見やうと思ふのであるが、その統計に依れば、彼の最も罪の重いのは謀殺および故殺で、それが三十九年度には五百三十九人あつた、この中には親の仇討、金錢の強奪、家庭の不和親族利益上の關係等に基因するもの〻みが二百四十三人の多きに達して居る、それから自殺者の數が八千九百六人で、此の中の半數は精神病者であるが、後の半數の中三千人は家庭の不和に基くとの事である、この年度に於ける監獄の新受刑者は六萬六千人

であるか、その中父母共にある者が一萬八千人、兩親共に無い者の數が二萬三千人、其他は父か母か何れか一方の無い者であるとの事だ、而して此の中金の有る者が六百人、稀有るものが五千人、此の他の六萬人は謂ゆる恒の産なき者は恒の心無しと云ふ徒輩のみであると公表せられてある、是に由つて見るも如何に家庭が個性の上に影響を與へるかといふ事が知悉せらるゝではあるまいか。

昔から成功した人を見れば、家庭が與つて力ある事は、彼の英のグラッドストーン氏が、我富は全く妻の慰安に基くのであると云ひ、獨のビスマークが我今日あるは妻の恩であると言つたのでも知らるゝのである、そこで世には教育と云ひながらも自ら三種に區別せらるゝので、

即ち家庭、學校、社會

の三者となる、而して家庭では情育を主とし、學校では智育を主とし、社會教育は意志の訓練を主とするのである、どうしても世の中は斯の三者が並び行はれて行かねばならぬので、單に實用的のみでは不可ない、春風の如き情の教育を怠つてはならぬ、例へば、藥價等の外、別に世話になつたと云ふので醫者の所へ禮を持つて行くにしても、拾圓札を剝出しで持つて行つて是は先生お禮ですと云つて差出した分には、必ず先方が受取るものでは無い、併し之を紙に包んで、紙に包んだからとて拾圓が二十圓に通用すると云ふでも無く、また中身が縱ひ五圓でも、紙に包んで水引をかけて持つて行けば、其時は先方も快く之を受ける、丁度斯ういふ工合に凡て世の中の事といふものは、

理屈を情の紙で包んで

掛らねばならぬものである。

偖その情の中でも最も極致とすべきものは同情で平たく云へば思遣りの事であるが、この思遣りの心と智とが圓滿に發達した者こそ、始めて完全無缺の人といふのであるものゝ、その同情は何卒我々人類の全體のみでは無く、更に之を擴大して、越佐の

私どもの覺悟

宮川壽美子

私どもの覺悟などゝ大部問題は大きいのでありますが、果して是から述べます事柄の問題に恰當しますか否かは讀者の判斷に一任する事と致して、偖私は我國が世界に對する位置を考へて見たいと思ふので御座います



前年命を承けて彼方へまゐつて居りました節、私の友人即ち英人のミス某孃とは骨肉も啻ならざる間柄であるのみならず、私は斯の友人の名に頗る益を得たのであります、一體この友人は非常な美術好きで、之を研究する爲に態々當り前の大學を卒業して、それから尚ほ美術學校へ入つて研究せらるゝと云ふ熱心で御座いますから、他は御推察で解るだらうと存じます、ある日此の友人の勸めに從つてロンドンの大博物館を觀覽する事を約束いたしました、斯の博物館はロンドンの博物館では無い、即ち世界の博物館であると云ふ位で御座いますから、私も幼少の折杯父母に伴れられて

上野の帝國博物館を屢次觀にまゐりましたが自分で自分の國の物事を悪ざまに申したくは御座いませんが、迚も建築の宏壯雄大と云ひ、陳列品の豐饒富贍なる事と云ひ、どうして〳〵比べものになるものでは御座いません、

そこで約束の期日に至りまして其の友人と伴立つてまゐりましたもの丶、私はもう〳〵美術に對して深き趣味を有つて居らないので、その友人は何角親切に説明して呉れられますから、成程々々と首肯れます其中に、希臘美術に就て波斯戰爭の前後に於ける區別等を詳細に説明して呉れられました次に羅馬美術に移りますと、成程友人の言はる丶如く、凡て人間生寫してはあるが、どうも物質的を脫して居りません、之に反して希臘美術は、同じチョットした線でも何處と無く上品で、謂ゆる素人脫がして居るので御座います、先づ我國で申して見ますれば、敷島の大和心を人問はゞ、朝日に匂ふ山櫻花と云ふ鹽梅で、實に得も言はれぬ趣が備はつて居るので御座います、

一體希臘の歷史は大層能く我國に似て居るのでありまして波斯戰爭後に至りまして希臘人は頗る自覺いたしました、爲に、哲學や美術のやうなものも非常に發達いたしたので、何れの國も必ず一度は黃金時代に到達するものであるから、丁度貴孃の國は日露の戰爭を經て、是から大に發展せねばならぬ機運に向つて來たのである、然るに聞く所に依れば、近頃貴國では何呉と無く泰西の眞似をして、其の極美術までも博物館に在るやうに日本の眞髓を失なはるとする傾があると云ふ事で、實に貴孃方は今や自國の本面目を保つと同時に、東西の文明を融和せねばならぬ大任を目の前に控て居るのであるから、歸朝の上は斯の心を忘れぬやう社會に盡さねばなりませぬぞよと、諄々として私に訓へて與れられられましたので、及ばずながら私も然るべき事であると毎に服膺して居るので御座います。

斯く私共は世界に對して大切な位置に立つて居

るので御座いますが、然らば如何したならば斯の大任を盡すことが出來やうかと云ふに、男女に拘はらず之を遂行するには大凡三大階般があらうかと存じます、即ち

その第一は境遇を支配する事

この境遇を支配するといふ事が却々六ヶ敷いので、順境の時には夫うでも御座いませんが、兎角逆境に立つと支配せられたがるもので御座います、彼の釋迦とか孔子とか基督とか云ふ方々は、凡て順逆共に能く之を支配して行かれたので、彼の名高い舜の如きは、父の瞽叟が後妻を娶られてからといふものは非常な逆境に立たれて、旻天に號泣せられたのであるが、之は自己の不徳を天に訴へたので、何も繼母等を怨んだのでは無い、去れば蒸々として乂めて姦に格らずと云ふやうに遂には父母をも感化したのである、我々は斯の覺悟が無ければならぬので御座います、ツマリ立派な人を手本にするやうにさへすれば到れるのである。

その第二は境遇を利用する、この境遇と云ふも順逆の二境を云ふので、順境に處しては益々向上するやうにし、之に反して逆境に處したならば、自分の膽試しであると云ふ考で、如何に貧賤の境に陥りたりとも、謂ゆる渴しても盜泉の水を飲まずと云ふ如く、その境遇を利用して、單に之に限らず向上發展する事を心掛けねばならぬので御座います。

その第三は理想を高尚に有たねばならぬ、畢竟境遇に支配されず、之を利用して行かうとするには、どうしても理想を高尚に持たなければならぬので御座います、左樣さへすれば否でも私共は向上發達して行くもので御座います、殊に日本の女子が考へねばならぬ事は、女子たるものは將來必ず家庭を有たなければならぬので御座いますが、動もすると西洋の家庭などを夢想する方が無いとも限らないが、それは其由つて來る所を御存じないからで、西洋の家庭は夫婦本位で御座

います、けれども我國は親子本位で、この親子本位なるが爲に大國にも勝つ事を得たので御座います、去れば犧牲的の精神は家族制度が一原因であると云つても差支ないと存じます、尚ほ別言すれば、西洋の家庭は愛の塊で、我國の家庭は義理の塊である、去ればこそ子は親に從へ、婦は夫に從へ、幼は長に從ふといふ風に、この從ふといふ事が即ち義理で御座います、之あればこそ和氣藹々として家庭が圓滿に行くのみならず、我國家庭の美點は、女子自らが裁縫もし、育兒もする、又掃除や洗濯もする、此點抔は西洋の婦人の遠く及ばない所で御座いますが、併し我國の婦人が西洋婦人に及ばない點は學問の不足で御座います、之は何うか一層奮勵して欲しいと存じます。

何事も出來ないと云へば出來ませんが、今は墨其古の公使となられた荒川さんが未だ彼地の總領事を勤めてお在での時分に、何うして我國は斯くも連戰連勝の報が傳へらるゝので御座いませうか、とお尋ね申すと、其原因を申して見よとの仰せで御座いますから、彼れの此のと申し上げて見ましたが、何れも左樣で無いと有仰つた末、死であるとお聞かせになりました、之に就て思ひ浮べましたのは、徳川三代將軍の御代に、時の名執政板倉伊賀守は最早老年で勤めが出來かねますと云ふので、御役御免を願い出まするが、後替を擇べよとの仰せゆえ、どうも外の人の事は解りませんが、悴なれば確かであると存じますと申して自分の子息を推薦いたしますと、將軍樣はじめ有司の者より板倉伊賀守の子息に御命を下されますと、迚も若年で務め兼ますと御辭退申し上げて役に付かうと致しません、それから二三日を置きまして、ある一人の年寄役の者が何とも付かず其の子息の許を訪づれまして、たゞ四方八方と世間話抔ばかり致して居られまするので、その子息さんは年寄役が來られた時から、急度使命を帶びてまゐられたと腹の中で思ひながらも、最早夕刻にもなるのに、更に其樣な話が出ないから、ツイ焦かしく思

つて彼の事は如何なりましたかと尋ねると、年寄役は透さず、足下は卑怯であると言ひますと、昔し武士が卑怯であると云はるれば腹切問題で御座いますから、板倉伊賀守の子息も卑怯と云はれては最早後へ退くことは出來ませんので、その翌日匆々御前へ出てお承をいたし、そして後日美名を揚げられたとの事で御座いますが、私共も女子だからと申して、矢張何事を致しますにも斯の倉板伊賀守の子息さんのやうに死を決して掛りさへすれば、必ず事の成就しない筈のあるものでは御座いません。

化學的貯蓄法

佐治實然

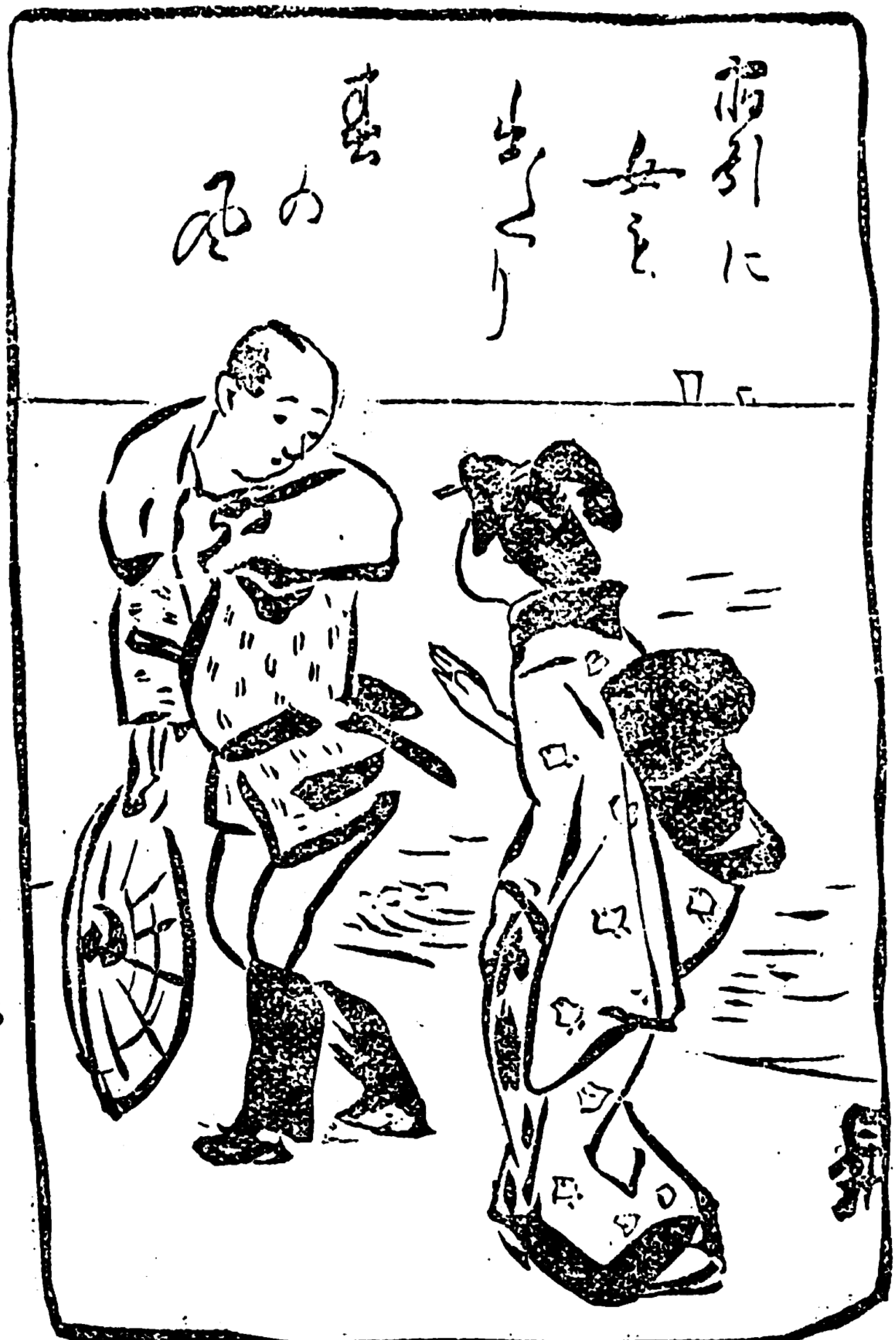
私は近來化學的貯蓄法といふことを唱導するのであるが、或は其名稱が甚だ奇異の感を與へるかも知れぬ、否、或者は是を以て私が奇矯の言を弄するのでは無いかと云ふやうな疑を抱かない限りでもあるまい、けれども私は決して左樣で無い、この名稱は至極穩當なものであると考へる、それは如何いふ風な貯蓄法であるかと云ふに、玆に田舎に於て世帶を仕舞ひ、何か東京で一稼を仕樣と夫婦相談の上、若干の旅費を懷にして遙々東京に來りたる時は、最早餘す所の金が五圓となつた、此の僅かに五圓といふ薄い資本があるとして、此の資本の有る間に何とか工夫を附けねばならぬと云ふので、夫婦は協議の上一日兩人の生活費を五拾錢と定めたと假定して、五圓では十日間兩人で暮すだけの金錢はあるが、僭越えて十一日目になると一厘一毛も無くなるのであるから、何うしても今の中に何か取附かねばならぬといふので、諸所奔走の結果或勞働仕事を見附けて其に從事して、兩人で一日八拾錢の賃銀を得る事となつた、之は餘りに想像に過ぐるやうだが、此の東京に於て兩人で稼いで一日に八拾錢の勞銀を得るといふ事は決して不可能ではない、動もすれば其以上の收入を得る事も難くはあるまいが、先づ其中を執つ

て八拾錢と見積つて置いたならば左まで困難の事ではあるまいと思ふので、標準を此所に置いて、借元の資本金五圓を悉皆遣つて了ふまでには八圓を獲られる、今度は此の八圓を資本に矢張前のやうに一日に十錢で暮すとすれば丁度十六日を支へられる、その十六日の中には幾何稼ぎ儲るかと云へば、言ふまでも無く拾二圓八十錢だけ貯るので、この十二圓八十錢あれば二十五日間を支へて尚ほ三十錢の餘裕が出來る、尚も進んで二十五日間働けば二千圓の所得となるから、今度は四十日間の生活を二人で續けられる、而して其の四十日間には積つて三拾二圓を得らるゝのであるが、假りに兩人で二十五日間働いて二十圓を得た時に、不幸にして一人の仕事が無くなつたとしても、他の一人は依然として稼ぎ續けて居るから五圓の餘裕が出て來る、それ故に斯くして働いて五十日若くは六十日と進んで行けば、必ず多少の貯蓄を得ることは出來ない相談では無い、如何にも之は架空の説であるやうだが、決して其樣な事のあるものでは無い、何故と云ふまでも無く之は數理上に於ける可能性である。

併し左樣云つても、之を爲る人に斷乎たる決心が無くては出來るものでは無い、この斷乎たる決心、換言すれば、强固なる意志の有ると無いとは其の結果の顯はれ方に大層な差のあるもので、例へば、或畫家の描いた繪が一枚此所に在ると假定し、その畫にして充分描いた人の氣が乘つて居なければ、迚も賞讃を博することは出來ない、之に反して、その之を描く當時に於て充分畫家其人の意氣が充ち滿ちて居るとすれば、その出來上つた畫が謂ゆる神韻縹渺と云ふ風であれば必ず他の賞讃を博するのである、また彫刻家の手に成れるものでも、その人の意氣が亢進して居た時の物なれば、急度其物の上に精神が活躍して居るものであると等しく、凡て意志が强固で無ければ此貯蓄とても出來るもので無い。

動もすれば世の人は節儉といふ事を考へ過して、何でも或物を終へまで遣うことのやうに思つて居る

傾があるが、夫も節儉で無いとは言はない、けれども其は儉約の半面で、尤も穩健なる思想から云へば約儉は無いから爲るのでは無い假りに金錢を以てすれば、その溜た金錢も貴とく無いではないが、それよりも前の如くして、之を貯蓄する手段が尊いのである、世の諺に、灰吹と金持は溜る程汚ないといふが、併し之も能く々々味へば一部の眞理を含んで居るのである、何故なれば、之を惡く云ふ方からは



其人が最初一萬圓の身代の時も、今日十萬圓の財産に成つた時も、毎時も同じく歳暮は一圓の遣物で濟すといふやうな事から善く言はないのであるが、併し一萬圓から十萬圓の身代に築き上るには却々意志が薄弱で出來るのでは無い、然るに世間には往々五圓札の二枚か三枚も持てば直ぐ氣の換ると云ふ者があるさうだが、夫等は自ら意志が強固で無いと云ふ事を表はして居るので、人間と

して大に耻づべき次第と云はねばなるまい、之は雨宮敬二郎翁の言はれた事と思ふが、人間は謂ゆる小心翼々で始終くよ〳〵してばかり居ては、生涯に二萬圓の財産を造るのが關の山であるから、其よりは今少し心持を大きく持たねば不可ぬと喝破せられたが、是も亦一部の眞理があると考へる。

男女に關はらず、大國民の態度としては餘りくよ〳〵してもならぬが、去迚他の半面に於て道德といふもの丶存する事を忘れてはならぬ、若しも一攫千金などゝ云ふ事を夢みる時になると、知らず〳〵暴利を貪るとか又は投機に耽ると云ふやうになつてたとへ鉅萬の富を積んでも、その極却つて自分で自分の身を賊ふやうになる、例へば、糟糠の妻を逐ふて名も無き婦人を正室に座せしむるとか、或は細民の膏血を絞りて怨を買うとか、その他放僻邪侈至らざる莫しといふやうな害毒を醸すの原因となるものであるから、不義の富二十萬を積まうよりは、正當に尊き手段を以て三萬を貯へ、而して世人の信用を失はぬやう、且つは有益に之を使用して行くのが儉約の要旨を得たる者といふのである。

姑と嫁の心得

棚橋絢子

嫁の執る可き最大條件

昔は嫁入の時に、父はよく良人に侍へよ、家に歸るなとか、母は姑に仕へる心得を説いて、色々家庭上の注意を與へることは小學と云ふ本にも書いてあると思ひました、私は別に改めて兩親から誡をうけぬが、世間通常一旦嫁に入つたからにはどんな事があつても戻つて來る事は出來ぬ、女は三界に家のないものとしてあるのです、既に嫁となつた則ち一家の主婦となつたもの丶心得て置くのは、第一極力良人を慰めて、日々の苦をいたはる大責任を持つことの自覺である、心して嫉妬を避け、常に良人に對して『家庭といふものは樂しいものだ』との強い感じ

を與へることです、これが最も大切な條件で、これを忘れては嫁の道ではない、

良人の不平を轉ぜよ

連添ふ長の月日の間には、不平も有り、一家の經濟が旨く治まらねば自然物事が面白くないに違ひないしかし夫が面白くないと云つて我儘を出しては困る良人はこの世智辛い浮世の波にもまれ苛まれ、激烈な一日の戰鬪から綿のやうに疲れて歸つてくる、外面には不平もあらう、自分の妻にでも云ふに云はれぬ苦痛を抑へる場合もあつたとすれば、自然家に歸つても樂しい表情は出來ぬのは無理もない、恁ういふ時には一層嫁の腕前を要するのであるが、當今の女學生上りの若い女達は、『良人は何に不足があるのか』此方は樂しくして待つてゐるのに口數も碌々きかず、いまいましいと云つて、嫁の方から却つて怒つて見せる、良人は唯さへ不平がある處へこの面白くない態度を見せられて益々面白くない、遂に我家を飛出して了ふなどの事が有る。

我家の凱旋した武士

況してや良人が慰められやうと思つて樂しく歸つて來たのに、燻ぶり返つて嫁としての慰安の方法を講ぜずに居るなどは到底間違つた話で、良人は兎も角一日を一家の犧牲にさゝげて來た、云はゞ我家の爲に戰い捷ちて凱旋した武士である、戻つた時には如何に切ないことがあつても顏色にも出さず、『定めしお寒かつたらう』と先づ勞つてごらんなさい、どんな不平のある良人でもこの慰めの暖い同情のある言葉に對して感謝の意を洩らさずにいられやうか、外へ出る男に不平がらすのは、昔から女子の最も拙いものとなつてゐる、まして良人は放蕩に身を打込んだ場合でも、正面に嫉妬をしてはいかぬ實意を以つて充分良人に敬意を拂ひながら諫めなさい、あゝ可愛想だ、俺が放蕩をして居る爲に妻はあゝまでして諫めて呉るかと云ふ心はきつと出る、飜然良人の自覺するのを待つ方が得策であると考へます。

良人の大切な人は舅姑

今の若い女達は什うしても舅姑のある家を厭がるのは譯が分らぬ、今日親を大切に思はぬ子は世間にないでせう、親の有難味を知つた子が成長して其の大恩ある親を邪魔者扱ひして死んでくれたらなど云ふ子が世間にあるか知ら、もし有るとすれば大に理屈にあはぬ話で、たとへ我家の財産に目をつけてゐても親が死んだら財産は我手に這入る位の考へは持つて居るだろうか、早く死んでくれとは願はぬ筈です、嫁の大切な人は良人だ、その良人の大切な親が生きてゐるのだもの、嫁自身にとつては余程の幸福ぞ、良人の幸福を我身の幸福とせねばならぬ、夫を願はぬやうな氣儘な嫁は、到底一家を完全に齊めて行くことはできません、

姑は金錢上に關係する勿れ

さて前申したやうな嫁の心得方に對する姑の態度は什うしたら良いか、母が一家を切廻して居る間は別として、既に我身を樂にさせて呉る、其代りに嫁が充分に主婦としての働きを見せたいに違ひない、

嫁が姑に相談をするのは當然だが、それに就いて一々指圖がましくするのは甚だ嫁を見くびつた談で殊に金錢上などに關しては餘り細かい世話を燒かぬ方がよい、成程自分の經驗の目からは生若い嫁のする事なす事、不經濟であるかも知れぬ、一寸の注意を與へる位は差支へる譯でもないが、これを根に持つて箸の上下げにも干渉するのは面白くない、なるべく姑は中立の態度でありたい。

慾を出すのは姑の疵

それには慾を出してはいけぬ、金持になりたいと思ふと心窄しからずで、いらざる世話も燒きたがるのです、姑になつたら金は出來ぬ者と諦め、一錢も自由にならぬと云ふ心持で居たらよいのです、素より人間は此世へ裸で生れたもの故女子としての責任も果した自分には、裸で歸ると思へばよい、この心懸で居たら嫁も氣が附いて衣服も着せてくれようし小使錢もくれらるだろう、私などはさう思つて安心してゐるので、心に少しの苦勞もない家の事は一切

嫁に任せてあるしと、云つて何も壽命のある身體を自ら縮める必要もないから、自分はまだ此世に對して勤める義務が殘つてゐると心得て、出來る丈の働をして居ります、然し家の事に關してはこればかりも申せません。

貰つた菓子は孫にやる

私に嫁が心配して『お祖母さん、何か好きなものはありませんか、御馳走しませう』といふのですが、私はまへ申した通り何でも喰べるし、彼が好きだ、是が嫌だといふやうな勝手なことは申しませぬ餘りおごるといふことは早く死ぬ原因で人は食物の中庸を得ることが最も大切です、わけて老人などは心得べきことでございます、お祖母さんが好きだと申してお菓子を私にくれますが、私は孫にやるのです、ですから一つ二つは喰べても、それは孫のものになるのです、嫁も私には小供にやる分を預る積りで澤山くれるのでせう、此お菓子を子供にやることについては不圖感じたことがありますそれはいつぞや心易い方のお宅へ參つたをりです

我子にやれぬ大切な菓子

私にお菓子を出して下さいましたのですが、其處へ其お宅の子供衆が見えたので、お母さんは其座においでにならず、私の心で一つ挾んで上やうとしたら、お母さんが私にお向ひになつて『このお菓子は大切なもので、御隱居さんより外に差上られぬものです、それにこれが頂いてはいけないのです』と申されたのです、我子にやれぬ程の大切なお菓子があるでせうか、私に對しての待遇は恐入つた次第ですが、我子は實際誰よりも可愛いものとなつてゐる、否可愛いものに違ひないのにと遺憾に思つたのです

私の座右銘

最後に私の毎朝銘としてゐる蔡中郎の女訓といふのを諸孃方の御參考までに申上ませう、私は毎朝床を離れるとすぐ髮を結ふことに極めて居ります、髮を結ふことは手もなく心の緒を締めるので、其すが〳〵とした心持で其一日の勤めに從ふのでございま

す、其髪を結ふ時どんな心持でゐたらよいか、女訓の章句は『心猶首面の如くあり、是を以て甚だ飾を致す、面一旦修らざれば則ち塵垢之を穢す、心一朝善を思はざれば則ち邪悪之に入る、みな其面を飾るを知つて其心を修めず、惑へる哉、夫れ面これを飾らざれば愚者之を醜と云ふ、猶賢者之を悪と云ふが如し、將に何ぞ容れざるや、故に鏡を攬つて面を拭へ、面宜しく潔淨なるべし、則ち其心の潔を思ふ也粉を傅ふ、粉は宜しく調和すべし、則ち其心の和を思ふなり、粉を加ふ、則ち宜しく鮮明なるべし、其心の鮮を思ふ也、髮を梳る、髮は宜しく潤澤なるべし、則ち其の潤を思ふ也、櫛を用ゆる、櫛は以て亂髮を理む、則ち其心の理を思ふ也、髻を立つ、髻は宜しく端正なるべし、則ち其心の正しきを思ふ也、鬢を攝する、鬢は宜しく整齊す可し、則ち其心の整を思ふ也』と申すので、女子の心懸は斯くありたいものです。

五十八

獨身教師の女生徒に及ぼす感化

元關西高等女學校教諭　竹村仲太郎

私は多年女子教育に從事して居たが、不圖感じたことがあつて止めた、今では實業の人で、教育上のことに關してお話する資格を缺いてゐる、然し女子を養成するといふことは最も趣味の深いもので、他日の良妻賢母を作り出すと云ふ、つまり自分の教へ導いた生徒が夫々母校を出て他家へ嫁ぐ、それで家庭が圓滿に運んで居たのが、紀念式や同窓會などで出會つたりすると大變樂しい者です、教育者の興味を持つ處はこゝなのでせう。

高師校に志願する人

私の就職中感じたことに種々ありますが、男子は別として、殊に女子教育の獨身者が生徒に及ぼす感化と云ふものに就いて、當局者の一考を煩し度と

思ふのですざんな風に感化を及ぼすかと云ふに、高師出身の敎員の中には往々にして變生男子のやうなのがある、世間では女子高等師範を目して、姥捨山だと云つて居るが、志願者の中には實際容貌が惡いからとか、家庭の事情が結婚を許さぬからとか、自己の或る要求を充さぬ爲め一生獨身を立通す生活策とするか、女子が通有性たる虚榮心を滿足する爲めとか云ふのが隨分少くない、かゝる不幸な人々が母校を辭していざ敎職に就いた結果は如何か。

女子の缺點を發揮する

私は決して一概に爾うだとばかりは斷定しないし亦斷言出來なからうと思ふが、地方の女子敎員中家庭に良緣を持たぬ薄倖な人々は成べく多いやうである、女子身體が相當の報酬を得て、優に家長權を實行し得るから、一家の稼人を要さぬと云ふやうな說から出たのか、眞に女子が求めて良緣を得ないかは輕々しく茲に揣摩する限りではないが、私はこの現に獨身的生涯を繼續しつゝある女敎員諸君の生徒に及ぼす感化を認めて遺憾に堪へないのです、圓滿な動機から敎職に入つたと云ふ者は隨つて高師卒業後も圓滿で、嫉妬━猜忌も激烈に發揮をしないが、以上の者と來ると實にお話意外の行爲であるのです。

女の生徒でも位が貰へる

一例を云ふと依估贔負をやる、女子に有勝な偏狹を示して間接に生徒を迫害する、夫が兎角獨身生活の敎員に多いのは頗る注意すべき現象であらうと思ふ、私の知つて居る某校で、女敎諭の一人が年功によつて正八位を授けられた、この事實を生徒一般に發表した方が可いか、一層默つて置いた方が敎育上得策かといふやうな話もあつたが結句披露することにした、すると生徒の多くは「女の先生でも位が貰へるのね」と云つて驚いてゐた、其爲め爾後其敎師に對し特に敬意を拂ふやうになつたは可として、中には校長さんだつて從七位だわ、私のお父さんは、モット上の何位だわ」などゝ朋友に威張つて見せた者さへ出て、校長の威信を保つ上に於て甚だ面白くな

い言葉を弄した者さへあつた。

賢母良妻主義の皷吹に相應はず

私はどうしても敎員丈には普通の位階より、功勞に對してはなるべく藍綬褒章のやうなものを與へるやうにしたら良い樣に考へられる、位階は尊いものに相違ないが、殊に女子などを敎育する者には實際不利な場合が甚だ多い、話は他岐に渉つたが、女敎員の小學時代は生徒が幼稚丈によいけれど、物心の附いた女子に對し賢母良妻主義を皷吹しやうと云ふのには獨身者では結果が面白くない、獨身の眞似たがると云ふ譯でなく、敎員自身が自然女子の缺點を發揮する場合が少くないからです。

文責在記者

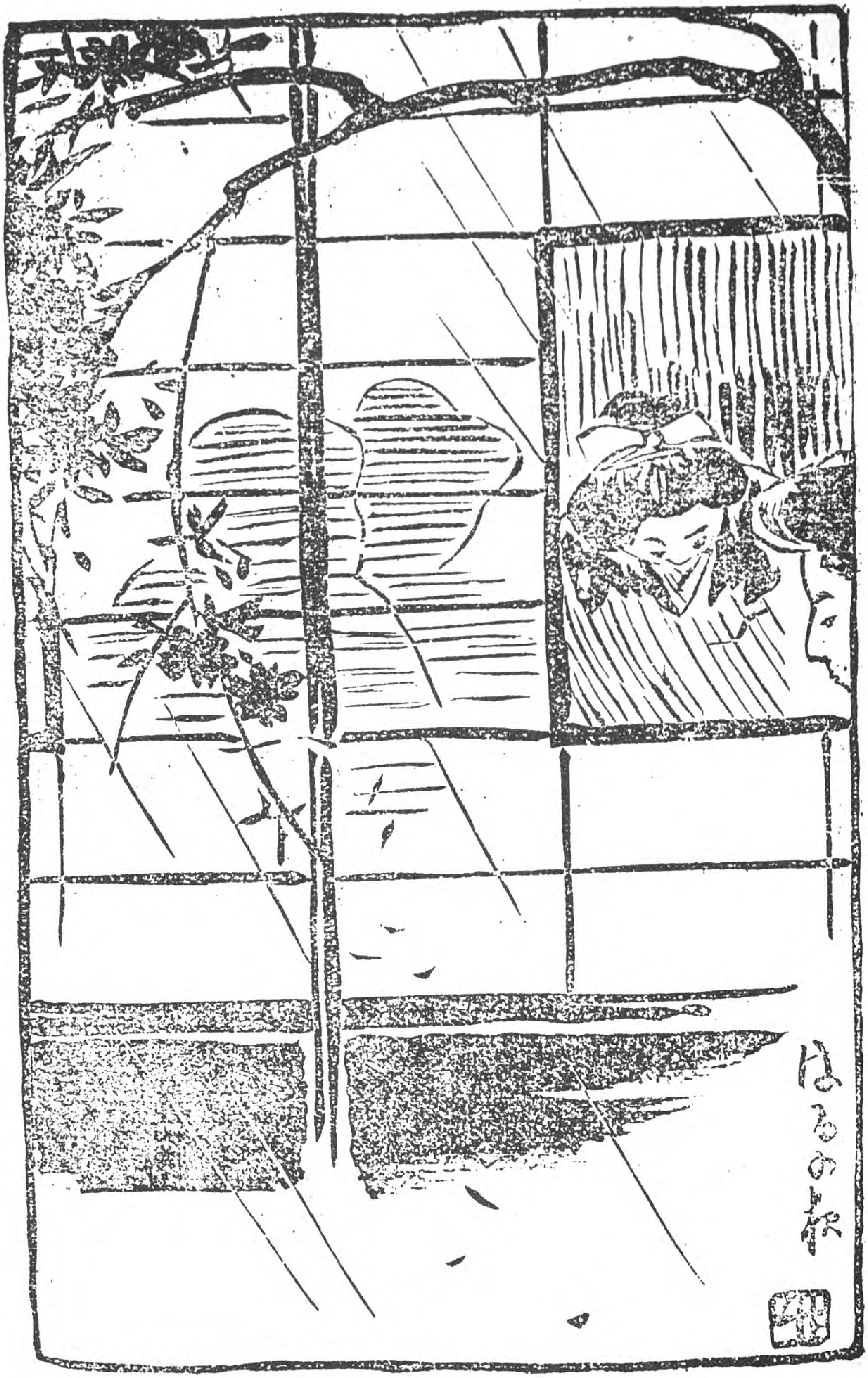
平民的女子教育

東京實用女學校長　上村直次郎

私は曾て女子の敎育に從事すること多年、今尙ほ之に一身を委ねて居るのであるが、惟ふに女子の敎育に關しては今日行はるゝものより一層適切であらねばなるまいと考へる、成程當今は孰れの山村水角に到るまで校舍の設備が無い所は殆んど無いといふ有樣であるから、一面から見たならば實に敎育隆盛の時代と云はねばなるまい、けれども退いて女子敎育は如何と顧みれば、私は遺憾ながら危機の時代にあると斷言せねばならぬのである。

世人は嚢に電車値上問題とか、又は田中宮相の結婚問題とか云ふ事に關しては隨分八ヶ間敷い批難等もあつたのであるが、未だ斯の女子敎育に反對の聲を揚げる者は甚だ尠なくして、僅に社會の或一部に其の聲を聞くのみのやうであるが、私は尙ほ一層斯の聲を大ならしめて欲しいのである。

一體今日の女子敎育は貴族的であつて平民的で無い、尤も斯の貴族的又は平民的といふのは抽象的の語であるが、通俗に云へば、今日學校出の女子は凡て男子の片相手となるの資格が無い、故に結婚した後男子に好かれない、併し女子は男子と結婚するの



要は無いものであるとすれば、其は最早何も言ふ事は無いが、苟も異性の男子と結合して家庭を成し、妻となり母となるべきが女子の天分であるとすれば大に考慮を費さねばなるまいと考へる、私は先頃兵庫縣の方へ旅行したが、到る處に學校出の女子に對する不滿の聲の高いことを耳にしたが、これは一體何故であるかと云ふに、その原因は言ふ迄も無く方今の學校で、中流および其れ以下の家庭に適應するやうな教育を充分に施して居らぬに基くので、謂ゆる貴族的に傾て居るからである。

凡そ方今我國に於ける女子教育の機關は、之を大別して二種に分つ事が出來やうと思ふ、即ち高等と普通で、その高等に屬するものは謂ゆる女子高等師範學校や女子大學杯で、その普通に屬するものは高等女學校および其と同等なる、又は各種の技藝學校等である、而して以上二者の中、その高等教育に屬するものに就ても多少意見を有つて居るのであるけれども、素より夫等は師範といふ事に重を措いて賢妻良母といふ事は除いて居るから、且らく斯の事はお預りとして、彼の普通なる學校に就て見るときは何れも大體に於て貴族的である、手近い所が諸種の學科の配當時間數に就て見れば直ぐ解かる、併し是等の事を委しく言ふときになると、自然學制の事に渉るから其を避るとして、一言にして之を蔽へば、虛飾教育である、迂遠教育であると云つて差支ないと考へる、何となれば今日の女子教育即ち高等女學校なるものゝ學科の配當は、總て男子の中學校程度に則りたるもので、それに裁縫や家事等を加へたのみである、少し話が横道へ這入るが、現今の男子に於ける中學の教育にも世間幾多の批評があるので、其は外でも無い、乃ち中學を卒業して更に高等の教育を受けやうとする者の爲には之が豫備門として適當であらうが、併し世間には左まで進んで高等の教育を受けさせやうと云ふ者のみでは無い、その多くは中學だけで家庭へ退く者が大部を占めて居るのであるが、偖その中學のみで退いて家庭の人と爲つた

男子が如何程役に立つかと云ふに、殆んど役に立たない、その批難の聲は之が爲である、とは云ふものの其原因は何處に在るかと云へば、今日授くる所の國語讀本にせよ、又は政治經濟の書にせよ、何れも今日現在の活社會に適用しない事のみである、此の外理化と云ひ、數學または地理や歷史に至る迄皆然らざるは無しと云ふ風である、それ故社會の實用に適せぬので、之は單に男子の方面のみでは無い、殊に女子に授くる家事科の如きも、概して社會多數の家庭に不釣合の事のみで、例へば、技藝、裁縫、美術のやうなものでも、恐く今日授くる所は中流以上の家庭には適用するであらうが、社會を成せる大部分の中流並にそれ以下の家庭には適しないのである、言ふまでも無く女子の普通教育と云ふものは賢妻良母を主とせねばならぬのである、若し女子の普通教育の目的が左樣で無いとしたならば、この激しき生存競爭場裏に立つて自己の發展を計らうとする男子は助からぬ事となる。

元來社會といふものは男子のみで經營の出來るものでは無い、左樣かと云つて女子の一方でも不可ぬ、如何しても男女で經營せねばならぬ、その經營するに方つては男子に外勤させなければならぬので、ある、若し其を男子に爲せないとすれば、男子は自己の發展を謀る事は出來なくなる、男子をして社會に出でて自己の發展を謀らしむる事が出來ないとすれば、女子は女子たるの本務を盡したものと云ふ事は出來ない、一體學校出の男子といふものは、云はゞ夫は未成品である、此の未成品をして完全なる物に仕上げるのは妻たる者の天分であるが、若し妻たる者が其を全うする事が出來ないとすれば、よく世の諺に妻の妻たる天職を竭す事の出來ない者を六十年の飢饉といふが、私は是を以て百年の不作と云ふのである、否、私は今日の女子教育を以て百年の不作と云ふに憚らない、どうも我國の人は西洋人に比較すると早く老いる氣味がある、併し三十や四十で左樣早く人の成功すべき筈のものでは無い、必ず

五十六十の齡に達してからのものである、そこで男子の未成品を五十乃至六十年の後に完成せしむる者は誰かと云ふに、繰返すまでも無く賢妻たる者の内助に待たねばならぬ事は火を睹るよりも明らかな事であらうと考へる、此の點から見ると今日の女子教育は實に危機に瀕して居るものであると私は悲觀して居る、斯う云へば男子に都合の宜い教育のみを女子に施せと云ふ事になつて、甚だ勝手な説のやうであるが決して左樣で無い、と云ふものは、前にも云へるが如く、男子は外に働き女子は内に稼いで、そして初めて社會の經營が出來るものとすれば、どうしても左樣いふ工合にせねばならぬのは必然の理であらうと想ふ、否、左樣無ければならぬのである。

然るに今日女子の學校で教へて居る料理の一つに就て見るも、頓と經濟關係などは顧みられないのみならず、時間を要する事も亦多大で、毫も簡易で卑近な謂ゆる日常の惣菜といふやうな物の料理は少しも出來ない、それに紙も繼げなければ障子も張れぬ

糊は如何して煮るものやら一向知らない、そこで糊は自分で煮るよりは其所邊で買て間に合せ、小兒が出來れば里兒に遣る、障子は經師屋に張らせる、紙は繼いだ物を買つて來る、成程是は中流以上の家庭では宜からうが、普通の家庭で是では甚だ迷惑の次第と云はねばならぬ、斯の如き妻女は換言すれば

男子の爲にバチルス

である、斯ういふ工合に今日の女子教育が青年の子女を教養するのであるから、隨分世の中には不平を抱く父兄も尠なからぬのであるが、何故か之に對する世の中の輿論が出ないのであらうか、私は實に怪訝の至りに堪へない。

先づ其は其として、然らば今日以後普通女子に施すべき教育の内容は如何なる方針を執らねばならぬかと云ふに、智識に於ても將技藝に於ても、共に今日現在に適切ならしむれば宜いのである、例へば、國語にしても古代の文や又は擬古文などは讀めなくとも、日々活きた社會の事を映し出す新聞紙が讀め

れば宜い、而かも今日は反對である、また習字にしても殊更に曲りくねつた萬葉假名が書けなくとも、普通日用の文字が書ければ宜い、文章にしても何も奈良平安朝流に書けなくとも、普通葉書文がスラスラと書ける程度で宜い、誰やらが言ひし如く、

　高等の下女を作るのである

のである、下女と云へば稍語弊があるけれども、換言すれば斯の高等なる下女とは、やがて精神的に立派な主婦を指すのである。

　多くの女子の中には泰西流にヴアイオリンやピアノ、またはオルガンを据えて置きたい抔といふ希望を懐いて居らる〻方が少なからぬやうに見聞するがそれも中流以上はイザ知らず、普通の家庭殊に農家や商人の家などでは、家庭生活の狀態と比較して見なければならぬ事と思ふ、積つても御覽なさい、農家や商人の家で、家業の傍らヴアイオリンやピヤノでもあるまい、のみならず普通の家では迚も千圓も二千圓もするやうなヴアイオリンなどを購める事の出來るものでは無い、而かも或女子は其を求めやうと望む、けれども資力が足らない、そこで煩悶するその煩悶の結果男子に迫る、即ち男子を苦しめる事になる、斯う云ふ事は大に女子たる者に反省を促さねばならぬのである。

　要するに貴族的と平民的では、母として將又妻としては自ら其間に區別があるので、之を混同しては不可ない、そこで我國目下焦眉の急務としての女子教育は、如何しても平民的のものであらねばならぬので、その平民的とは階級で云へば社會の中流幷にそれ以下の家庭を總稱するのであるが、現下は夫等の家庭に適應すべき女子を作るのが最大急務と考へる、換言すれば實用的、之は虛飾に對しての語であるが、智識に於ても將技藝に於ても、且は人格の上に於ても實用的の女子を作らねばならぬ、若しも之を教育上の語で云へば、謂ゆる形式的の教育を避けねばならぬと同時に、道德的實利主義の女子を養成せねばならぬので、之に關しては單に我々のみでは

ない、即ち問題の主たる天下の女子方も、現在は勿論、よく我國の將來をも慮り、併せて諸姉の立脚地に付ても熟考を煩はしたいのである。　文責在記者

雛の話

武田櫻桃

雛の話と申して、私自身に是ぞといふ說があると云ふのでは無い、ツマリ田中淸風翁や久保田米齋畫伯および其他先輩諸氏の說を綜合して御話するに過ぎないのである。

雛の種類

は幾何くらゐ在るであらうかと云ふに、隨分それは澤山にあるけれども、先づ之を大別して見れば、內裏雛、親王雛、けし雛、深草雛、吉野雛、伏見雛、紙雛、糸雛、八丈雛等であるが、さて其起源は何時頃であるかと云ふに、どうも其時代は判然と分らない、世俗に人形天皇の頃とか云ひますけれども、これはホンの一場の笑柄にしか過ぎないのである、併しズツト古くから人形を飾つたといふ事は、彼の源氏物語の中に夫等の事が散見して居るのでも知らるゝが、その飾り方等は現今のものとは別のやうに思はれる、何に致せ今日のやうな形式になつたのは餘り古くはない、極新らしいとの先輩諸氏の說である。淸水正風翁の說に依れば、古來我國の風習として男女に限らず、小兒が生るれば天兒と云つて、心に綿を入れ、上は布片を以て覆へたる人形を作りて三月に之を川へ流したもので、その主意は如何かと云ふに、この天兒に其小兒の災厄を負はしめて、そして吾子の幸長かれと祈つたものゝやうに考へる、故に一面から見るに御禊らしくも思はれるのであるそれから女子の嫁入る時には、必ずお伽這兒と犬張子とを一緒に持たせて遣る事になつて居つた、このお伽這兒といふのは、當時世の中に這人形と稱するその人形が矢張綿を心として布片で造つたもので、之は是非とも女子が嫁入の時には持つて行かなけれ

ばならぬ風習と成て居たのである、是等を考合せると、今日の雛祭なるものは前の天兒と後のお伽這兒との習慣を一緒にしたものではあるまいか、それに此のお伽這兒も三月三日に流したと云ふ一説もある所を見れば、是また女子の幸長かれと祈ると同時に、良人と共に家政整理の觀念を養成したものであらう、これは私の臆說だが、古來三月三日を桃の節句と云ふが、丁度舊の三月は桃の花の盛りで、詩經などにも、桃の夭々たる其葉蓁々たりとあるが如く、昔から桃の花は佳人に擬らへて歌はれて居る所から、そこで、桃を主題としたものではあるまいかと、私かに考へて居る。



前述の如く此の雛祭の起源は明了しないが、最近之が流行したのは何時頃かと云へば、幕府の末即ち享保以降のやうに想はれる、徳川十一代將軍の御代に、直衣雛といふものが出來、それから天保時代には稚兒雛、尉と姥の雛等が新たに製作し出されて來た事は明らかで、兎に角享保元祿の頃から精巧となつて、それが進んで今樣の物に變遷を經て來たのであるが、今それらに就て古代と現時とを比較

して見るのも興味ある事であらうと思ふから、聊か左に此事をお咄して見やう。

享保時代のものは芋雛と稱して、大率顔が扁平たかつたものであるが、それが稍時代を經て元祿から天保の頃になるに從つて、その顔の形が稍長く而して圓味を持つて居るものとなつて、ツマリ今日となつたのである、これは顔の格好であるが、

眉とか目とか

云ふものは何れも昔は墨で畫いたものである、それが新らしくなるに從つて玉眼を入れたものになつたのであるが、併し墨で畫いたものが無いでもない、けれども昔と異つて鳳眼と云つて細くなつた、それが又今では稍少しく丸味を帶びて來て居る、概して形の上に於ても細工の上に於ても、凡て幾度かの變遷を經て來て居る事は明らかで、その中でも

技術の精巧なるは京都が一番

で、之に次ぐものは伏見および深草等である、是等の地方のものは何れも古風で、博物館へ行つて見ると能る分かる。

右に擧げたるもの丶外、單に竹筒に色糸を卷附けて衣裳に擬し、而して木果などを頭として雛に見立てたものもある、又單に紙を折つたもの等もあるが畢竟是等は昔し交通不便の爲に完全なるものを得る事が出來ないから、そこで其土地々々で左樣いふものが作られたのではあるまいか、前陳の竹筒で拵へたものは土佐の糸雛といふので、これは細い竹筒に段々に色糸を卷き、それに木果などの頭を附けたるものを小さき木の臺の上に立て、その後にタトウ紙やうなものを廻らして屛風として飾り附けるのである、また鴻の巣雛といふものは、昔し京都の雛人形師が流浪して來て拵へたものだと云ふ傳説がある、また越ヶ谷雛といふ土造のものもあるが、是等は何れも粗末なもので、左まで注意を拂ふ程の價値のあるものでは無い。それよりも昔しの物で

お土産人形又は木目込人形

などゝいふものがある、この木目込人形といふのは

柳の木を彫つて種々の布片を箝め込んだものであるから、柳人形あるひは賀茂人形などの異名もある、而してお土產人形といふのは、舊幕時代に諸國の大名が參勤交代の節、公卿方に何程かの包物を呈すると、その返禮として此の人形を下されたので、それで此の名稱があるのであるさうなが、時としては江戸邊でも造らせられた事があるといふ事を傳へられて居る。

尙ほ斯様の事を述べ來れば殆んご盡くる所を知らずと云ふ有様であるが、此れ以上は專門に涉つて却つて厭倦を催すの恐れがあるから、此位で止めて置いて、因みに口繪の雛の事に就て一言述べて置きませう、即ち口繪下段のものは京都製の內裏雛で、大部由緒正しき邊から出たものだと云ふ事で、却々美事なものである、その下段のものは京都の織物業淸水半兵衛氏の出品で、總體では二百番の能樂が揃つて居るのであるが、これはユヤの一部分を示したもので、實はその二百番の能樂は半兵衛氏の先々代が商賈人の手を藉らず、且つ自宅にある布巾類で、前後三十六年間掛つて仕上げたものであると云ふ事でその精巧は驚くばかりで、黑人も三舍を避けねばならぬ程に出來て居る、それ故に、先帝の叡覽までも忝ふした事もあると云ふ事であるが、尙ほ今上陛下の皇后にまします御方が、また一條家に在しましゝ時、御懇望に從つて劉覽に供した所が、非常に御心に適つたといふので御歌一章を賜はられたから、同家では今尙ほ之を珍藏して置かるゝとの事である殊に此雛に就てゝ珍話は、明治以前甲子の年、京都の市街は悉く兵燹に罹りて、淸水氏の家も亦その災厄の渦中に投せられたのであるが、是より先、故有栖川宮熾仁親王家よりの御所望に從つてお邸へ差出して置いた爲に、此雛ばかりは今に同家に保存する事が出來るのであると云ふ事だが、日本美術の爲に祝すべき事である。 文責在記者

彌生の流行（一名訪問服）

三越呉服店營業部主任　飯野三一

流行の色氣と云へば一二年前まではお納戸が非常に持囃されて、若い方でも又はお年を召した方でも斯の色で無ければならぬ事になつて居つたものであるが、それが昨年の春頃からは段々に衰へて、最早冬となつてはスッカリ廢つて仕舞つて、之に代つて出て來たものは

藤色と鼠色

とであつて、その藤色にいたせ又は鼠色にいたせ、總て濃いものよりは淡い色氣の方に嗜好が傾いて來たので、何時ぞやもお話せし如く、半衿は流行の先驅をすると申しましたが、昨今は益々その半衿の色が薄くなつて、例へば、オレンヂ、淡緑、草柳色、クリームと云つたやうな淡い色を好まるゝと云ふ風で、それが事實と成つて顯はれて來て居るので、之は論より證據で爭はれない。

春の盛衰すなはち紋附類の事に就ては、既に昨冬から屢次本誌で御紹介をしたから御承知の事と思ふ。それに當今は其紋附類の季節で無いから、それよりは寧ろ彌生の季節に因みて

訪問服又の名は洒落着

と云ふべき縞の衣服に就て少しく御紹介する事と致さう。

去れば昨今は何んなものが一番多く出來たかと云へば、無地の御召は少し衰へ氣味で、その代用として流行を擅にして居るものは

縞にして縞にあらず

無地かと云へば無地でもなく、假令ば其の縞でも、織方で鐵氣を浮織にして、而して縞らしく無い物が持囃さるゝので、之は縞、小紋、或は無地等の代用をするのであつて、その拵へ方は裾に洒落た模樣を施すのであるけれども、盛裝の縮緬物のやうに明了とはせず、成るべく沈み勝に目立たぬやうに施すので、何處となく落付が良い謂ゆる澁味のある粋なも

のを好かるゝのであるから、その模樣も從つて花々しいものよりは趣味あるもの、即ち花なり景色なりを其の儘に施すといふ事は無く、

總て夫等を巧みに模樣化させたもの、例へば、或は上前と下前とを對照させるとか、又は地質の縞柄を應用して其の模樣を施す事もある、即ちそれには單に卯の花を施す事もあるが、或は霞縞に梅といふやうな工合にして地質を應用する事もある、左樣いふやうな中で當節は挿圖にもある如く、川邊に舟を扱ひ、そして一羽の白鷺が水に映じて居る模樣を、地質に似寄つた絲で繡つたと云ふやうなものが歡迎せらるゝのである、小紋類は殆んど勢力を失つて、先づ昨今は前陳の如きものが最も流行を逞しくして居て、之に次ぐものは、地質を無地に染めて、そして其上に成るべく目立たぬやうに繡模樣を施したものである。上着は先づ此の位の所で止めて、

さてその下着は如何にするか

と云へば、實は上下共に對な衣裳を用ゐらるゝのであるが、模樣は對照したものを好まれるのである、一體縮緬物の模樣は、上下を揃へらるゝのが通例であるけれども、この粋な訪問服になると對照は勿論、必ず聯絡は取らるゝので、裾廻しは芝色の縮緬などを用ゐて上着と同質にせらるゝ向もあるが、粋なものになると縞羽二重または絞りの羽二重といふやうな變つたものを用ゐらるゝ方もある。

次に帶はといふに

之は餘りピカ〳〵したもの即ち盛服の時に用うる絲錦といふやうなものは喜ばれない、先づ當時の流行と云へば高浪織、つゞれ縮緬、都華織、ゴブラン縮緬等で、それに極古代の唐草風を置いたものと、或は廣東縞、霞縞、または縞と模樣とを交ぜて織つたものなどが頗る流行する、そして其の地質は餘り厚くなくして柔らかなるもの、一見衣服地のやうなものが持囃さるゝので、畢竟之は腹合帶の代りとして用ゐらるゝに基くのである。最後に

　長襦袢の流行は如何
と云ふに、極上品向としては友禪類に越すことは無いのであるが、謂ゆる粋向の洒落着には紋類には及ばない、而して何れも花模樣、光琳風の水、七寶崩麻の葉等を染出して長襦袢に仕立てるのであるが、その地質は縮緬、羽二重、或は小波羽二重などが主なるものである。

女子の体育と服裝問題

女子高等師範校教諭　井口あぐり

我國の女子の體育が劣つて居ると云ふ非難は、今更私が云ふ迄もないことぢやが、是一つは遺傳に依ることは勿論として、元來我邦の家庭が女子をして運動を行る場合を與へぬからかとも思はれます、爾うかと申して徳川時代の武家に生れたものは、薙刀術とか、ヤレ何々とか體育と精神の修養を兼ねたもので、隨分と女子で體格の立派なものもあつた、然

し概して我國では、女子の運動をお轉婆と混同して了ふ弊があるので、其結果こんな事に成たのでせう、

　我國の男子と女子

未だ統計を取つたと申す譯でもありませんが、外國でも女子は男子より背も低くければ、亦體格も劣つてゐるやうですが、我國の男子に對する女子程の不整等の差はないやうに思はれます、女子體育の奬勵と云ふことも近年其聲を高めたと云ふのでなく、ズット十年以前から世間に八釜しいので十年以前の女子の體格に比べると當時の方々の方が遙かによいと思はれます、こんな工合に漸次好良を加へて行つたら、將來は有望な女子を養成するかとも思はれますが、何を申しても我國の習慣が許しませんので勢ひ遲々として不進歩のでせう。

　米國の家庭と子女

これには學校でばかりヤキモキしても仕方が無い萬事家庭と連絡を遂げて、戸外の一寸した散歩にも體育上の心懸を持ち、規則正しく學理的にやつて行

くやうでなくては困ると思ひます、米國は運動の盛んな國で、男子は云ふまでもなく、女子自身が活潑な運動をやるし、家庭でも頻りに奬勵することになつて居るので、見るべき効果が有る、一は亦雜居の家庭などでは勢ひ室內で滿足な運動を遂げさせることが出來ない爲、自然外出の機會を多く與へる、兒童は得たりかしこしで家を外にするからでもあると思ひます、兎も角我國の家庭の比ではない。

兒童に運動を與へよ

最も我國殊に東京市街などに住む者は、別に運動場と云ふものが無い爲に、うつかり幼い者に外出をさせて自動車や電車で怪我などあつてはと云ふ心懸から外出をさせぬし、實際亦我國のやうに道幅も狹いし、日々新聞紙上が危險を續出した記事を載せて居る位ですから、家庭に注文するのは酷かも知れませんが、眞の運動は決して女子にしてもお轉婆ではない、規則正しくやつて行くやうにしたら、此後とも充分の余地を與へたいものです、米國市街の兒童殊に勞働者などのものは敎會等の寄附によつて保存さるゝ公園に行くのです、此處には運動の機械も有るし、兒童達が嬉々として刎廻つて居る間に自然衛生的に出來上るのです。

歐米の婦人服は輕便

體格を八釜しく云つた處で、第一住居から衣服迄改良してかゝらねば遺憾ながら發達を遂る事は出來なからうと思はれます、女子從來の服裝を改良すると云ふ事は多年の宿題になつて居るが、一朝一夕に改めることは出來ぬ、前にも云つたやうに、我邦には我國の習慣が有る、習慣を打破すると云ふことは急激に行かないもので自然機會を見て漸次改良して行くやうなことにでもしたら良い、歐米の婦人服は極めて輕便に出來て居るから、起居動作も蝶の舞ふやうに外から見ても氣持がよい、隨つて運動の注意を貫徹することが易い道理です。

服裝改良の急務

我國の婦人の服裝は如何にも優美です、殊に長い

袂、裾模樣の襲着でもして居ると、夫れは如何にも美しいものです、隨つて雛壇にでも飾つて置くやうに出來上つて居る爲に、動作が重々しい、深閨に人となつたお姫樣の服裝から申せば結構であるが、今日のやうに女子が男子を助けて一家の經濟を裕にしやうといふのには少しく袂や裾が邪魔になる。私は女子の着物に就いて色々研究をしますし、學校でも家政科や裁縫科の教師が集つて考へても居りますが、よしよい服ができた處でそを改めると云ふことは、前申した理由から急には行兼ねます。

・彼我婦人服の得失

西洋の婦人服も一概に良いとまをされませ、別の話ですが、コルセットをやるなどに大に衞生上體格の發達をさまたげると、隨分よくない個所も見えます、されぱと云つて我國の服裝などは裾が捌けて脛も見えやうと云ふ不體裁があるし、無論運動服にして不合格ですが、平生の着物としても完全ではない、學校生徒が袴をつけたのは良いが、筒袖にしても手の上げ下げに脇が窮屈で自由にならぬ、普通運動服と稱するのが、先づ學校などで用ゆるに適當だらうと思ひますが、これを家庭に採用するには物足らぬやうに考へられます。

女子の運動は優美であれ

前に運動とお轉婆と混合するとお話申しましたが洋行から歸つた二三年ごした、よく女生徒のテニスのマッチなどを見ますと、髮は蓬々と振り亂してまるで優美といふものは少しもない、それに靴は泥だらけですし、裾を捌いて脛をチラ／＼させて其見惡いことゝ云つたらお話になりませんでした、成程これでは世間からお轉婆と見られるのは不思議はない外國の婦人の運動は決してそんなダラシのない不規律なものではありません、女子の運動法もあんな風で了むとすれば男子の化もの同然でさつぱり利益も何もありませんと思ひます、ツマリ學理にかなつた法則によつて、女子特性の美容を損なはぬ範圍內で飽くまで體育の發達を企圖したいと思ひます。

予が敎育に從事せる動機と主義

日本女子美術學校々主　福島甲子三

私は殆んど敎育の事を語るなどゝいふ資格のある者では無いが、兎に角私の父は舊藩で多少子弟達の敎鞭を執つた、事もあるので、幾らか其感化を受けた傾のある爲か、又は物故せられた島田蕃根翁に親炙した爲か、或は常に先輩諸氏に薫陶せられた爲か、言はゞ私が敎育に從事する動機といふものは捕捉すべからざるやうなものであるが、二十何年來私は東京瓦斯株式會社に勤めて居る所が、何分多くの人を使役する事とて、毎月その中で良人を失つたとか、又は親に先だゝれたとか云ふ不幸な女子が、何うしても二人や三人はあるのであるが、その良人に別れ親に先立れた所の女子達が、是ぞと云つて別に手に附いた職業も無いので、見すく\悲慘な境遇に沈淪して居るのを實際目擊するに附け、また廣い世の中には其と同じ運命に捕へられて居る多くの女子を見るに附けても、何とか之を救濟するの途は無いものであらうか、と實は窃に心を傷めて居つたのである。

然るに今より三年前、名古屋市の有志が同地に瓦斯會社を新設するに就ては、世間の氣受もあるから是非東京の會社の重役十一名に、一名に付五百株宛を持つて貰ひたいと申込んで來ましたので、此事を先輩なる澁澤男に相談すると、同男は一人で二百株づゝ引受ける事にしたら可からうとの裁決ゆゑ、まづ其方は夫で一段落附いたものゝ、殘り三千餘株といふものゝ所分に窮したのであるが、何とか之を所置して遣らねばなるまいと考へたものゝ、別に良策も無いので知人間等を奔走して、幸と悉皆の處分

を濟ますと、頓て世の中は戰後の景氣で、そのお世話した株券が大層に騰貴した爲に、皆樣も存外に利益を得られたと云ふので、頻りに金品等を寄せらるゝ向もあつた、其に以前より私は未だ曾て投機業といふ事はしないが、幸に先輩諸氏の提撕で稍衣食に事を缺かないやうになつたので、乃で何とか其寄せられたる金品に足して有益な事に使用したならば、と心の裡で竊かに考へて居る其矢先、谷中の美術院が五浦へ移轉するに就ては、その校舍の跡を下宿屋や貸家にするのは惜いと云ふので、チヨツト或人から相談を持込まれましたから、豫て私の腦裏に胚胎して居た不幸の女子を救濟したい、その豫備を與へて遣りたいといふ萌芽が發生して、直ちに相談が一決して其跡を讓受ける事となつたので、之が抑も私が教育に從事する動機と經過で、即ち物質的から精神的事業に移つた初歩である。

併しながら私はもと〳〵教育といふ事には經驗も無いものであるから、同じ教育に從事するなら完全の事にしたい、それには先輩有識の士の智恵を籍りるに如くは無いと考附いたから、日を期して諸氏を弊宅に請じた所が、六十餘通の案内狀に對して來臨を辱ふせられた方が四十有餘名あつたので、時の東京市學務委員長たる肥塚龍氏を座長に推し、他の諸氏列席の上で愼重なる態度を以て審議を盡くされたので、是は今以て私が深く腦底に感銘して終生忘るべからざる紀念である。

斯くして私は學校を經營すべき重任を負ふ事となつたので、着々之に向つて歩を進めつゝあると、不幸寸前尺魔とも申しませうか、偶々病に侵されて臥褥すること約四ケ月の久しきに渉るのみならず、一時は危篤の報さへも傳へられた位であるから、それが爲に何から何まで計畫が齟齬したのみならず、殆んど機會を失したのは餘儀ないとしても、世の經濟界が萎微振はなくなつたので、嚢に學校の爲に一臂の力を籍さるゝ事を快諾せられし諸氏に對しても今更金品等の事は口外が出來ず、その中幸にして病

氣は快癒したものゝ實に光陰は矢の如くにして、先に譲受けたる學舍の支拂期日が迫つて來たので、止むなく西片町の住居を手離し一時校舍内に假寓するといふ窮境に陷つたのである、けれども私は其が爲に少しも悲觀もしなければ氣も沮まない、何故と云ふに内には美術に達識を有せらるゝ秋元子爵と教育に實歷を有せらるゝ小山氏とが、克く教授諸氏と戮力協同せられて生徒を薫陶



せらるゝものから、父兄は其子女が頗る實用に適應するを喜ぶ聲を聞くのと、外には商議員たる朝野の紳縉諸士が、厚き同情を以て有力なる援助を與へらるゝとがあるからである、之あるが爲に私は今尚ほ毎月出來得る限り衣食の費を節してまでも悦んで之を經營しつゝあるのであるが、教育の事は何處迄も營利などゝ云ふ觀念が毫も加味しては出來る物では無い。

斯う云ふと如何にも負惜みが強く痩我慢を張るやうに當るが、一つの學校を經營して行くに付ては、必ず夫相當の經費を要するもので、それが無くては成立つものでは無い、去れば私とても夫位の勘定は立て居るが、それが爲に無暗に澤山の生徒を收容すると云ふ事だけは避けて居る、通常から云へば澤山の生徒を收容した方が得策に相違ないけれども、何うも生徒の數が殖えれば。

謂ゆる數でこなす、、、、と云ふやうになるから、從つて教授も親切に行かなくなる、故に私の學校では生徒の定員を三百九十名と限つて居る、そして美術部、技藝部、豫科、選科といふ風に分けて、選科は一ケ年以上三ケ年の修業年限だけれども、その他は凡て三ケ年としてあるが、之は高等小學を卒業した女子が、謂ゆる嫁入前に於ける間の年を見計つて斯う定めたのであるが、別に年齡に制限があると云ふ譯では無い、と云ふものは前述の如き不幸の女子もあるからである、そして兎

角世間の技藝學校では、同じ技藝を授くるにしても、

多くは形式に流れて實用に遠ざかるの傾があるやうに思はれる、そこで本校では左樣いふ弊に陷らないやうに、努めて實用に適するのみならず、各自が修めた技藝は

如何なる方面に向つても應用の利く事を專らとして居るのであるから、從つて教師方も精選に精選を加へて居る、一例を云へば、先年京都で名高い刺繍の教師を聘して來た所が、成程技術の點に於ては精巧であつたが、何分粉本に粉本を繰返すといふやうであるから、何うも出來上つた物に活氣が無い、そこで當時は日本畫の方では荒木寛畝先生の高足荒木秋畝先生に其下繪までを願つて居ると云ふ風にして居る所が、凡て其出來上つたものに生氣がある、そして其繡糸でも成るべく各自に染めさせると云ふ工合にして居るから、彼れにも此れにも融通が利くのである。

本校は依然日本女子美術學校の名を踏襲して居る

が、實は技藝學校とも云ふべきが至當である、といふ理由は、單に日本女子美術學校といふ名を聞くと稍もすれば我等の生活に縁遠い美術の事のみを授けるのではあるまいかと云ふやうな感想が伴はぬとも限らない、けれども本校の教育主義は決して左様いふ迴遠い事を目的とするものでは無い、また彼の謂ゆる殿様藝や、お孃様風の技術を授ければ宜いといふのでは無く、何處までも女子に適切なる藝術を授け而して其天性なる美的靈能を發揮するは勿論、兼て優美高雅の徳を具ふると共に、有用生產の材を成さしめ、之を小にしては一身一家の幸福を增進せしめ之を大にしては國家社會の福利に貢献するを得せしめたい、約言すれば女子も亦社會の一員であれば出來得る限り實用的の材としたいと云ふのが本校の主義である。(文責在記者)



雨中花

阿井飛洋

糸よりほそき
はる雨に
靡くともなく靡くなり
袖はぬるとも
立よりて
一枝をらん稚子ざくら

齲齒は如何なる階級の人に最も多き乎

ドクトル　志村誠磨

齒にも種々の病氣があるのであるが、その中で最も多く我々が患ふるのは何であるかと云ふに即ち齲齒、俗に蟲齒といふのであるが、併し世人は此の蟲

齲歯は如何なる階級の人に最も多き乎

歯なるものが他の身體の諸部に如何なる害を及ぼすものであるやと云ふ事に就ては、比較的注意を拂はれて居らぬやうである、去れば尙更如何なる階級の人々に最も斯の齲歯が多いか抔と云ふ事に關しては毫も意を注がれない、依つて予は聊か自已の立場よりして研究した事柄の一端をお咄して見やう。

一體文明といふものは凡ての事物が向上發展すべきものであるといふ事は今更予が繰返すまでも無いのであるが、獨り歯の衛生に至つては之と正反對の現象があるとは實に怪しむべきではあるまいか、予が嘗て米國に居た時に撿べた所に依れば、文明を以て誇る所の米人の歯は漸次惡くなつて來るにも拘はらず、ニグロー人の歯を見れば却々良い、また亞米利加の印度人と云へば恰かも我國に於ける蝦夷人といふ工合で、即ち亞米利加の古い土人で、この土人の歯が亦頗る良い、其の上に顎骨なども良く發育して居る、それから去つて歐洲大陸の中では、スコットランド人の歯が最も善いのである。

それら歐米人は措置き、近來予は清國留學生の歯料一般を同國の公使から托せられて居るので始終診察もし、又療治をする事も多年であるが、是等も概して歯の性質は善い。

併し其樣な遠方の事は暫ら措き、この手近き東京に於て上流社會と下流社會との子弟の歯を比較して見ると、餘程妙な現象を示すのである、即ち東京で下流と云へば下谷の萬年町、四ッ谷の鮫ケ橋、芝の新網などで、謂ゆる東京の貧民窟と稱する所である是等貧民窟の子弟の歯と、彼の社會の上流に於ける華族の子弟ばかりでは無いが、兎に角それらと肩を並ぶべき富豪の子弟等が敎育を受けて居る學習院の生徒の歯とを比較研究して見た事がある、然に事實は世人の意への外で、之は空想や臆斷ではない、明治三十八年の春期に於ける學習院の生徒五百五十四名の身体撿査を爲したる時の報告によれば、その五百五十四名の生徒中で、齲歯の數が二千三百五十四枚あると記されてあるのを見れば、丁度一人に付四

枚と二分五厘餘に當るのである、然るに彼の貧民窟中の芝區新網の學校の生徒三百九十名に就て撿べて見た所が、その中齲齒のある生徒は百五十名で、全く無い者が二百七十五名であつた、して見ると一人が僅か〇、六二となる、即ち二人以上で一個となる割合である、それも此の貧民窟に於ける子弟のものは乳齒も永久齒も含んで居るのである、即ち乳齒とは俗に乳呑齒と稱するもので、永久齒とは其の乳呑齒の既に拔換つた齒をいふのである、然るに學習院の生徒は永久齒に就てのみ撿査したので、乳齒は其の中に拔換ると云ふので數に加へないのか何うか其邊は判明して居らないのであるが、その報告の末に、乳齒は殆んど齲齒ならざるは無しと附記してあるのを見ても驚かざるを得ない、前述の如く學習院の生徒は貴族および其と比儔すべき者の子弟のみであるから最上流である、即ち一身の周圍が凡て最高等に位して居るので、迚も新網邊の生徒が比べものになるものでは無い、予が新網學校の校長や職員の言ふ所を聞くに、此の學校の生徒は、概して顔を洗つたり又は齒を磨いたりする者は一人も無い位であると話されたが、それで此の位齒が良くて齲齒が無いとしたならば、齒の衛生などゝ云ふ事は、上流社會の者の爲にこそ説かねばならぬので、下流の者の爲には全く不必要と云つて宜いのであるが、併し其には何か原因のある事ではあるまいかと種々研究して見た所が、全く是のみと云ふではあるまいが、予は此に二つの原因を見出したのである、即ちその

第一は比較的硬き食物を取ること

第二は運動の充分なる事

以上二つの理由なる事を發見したのである、謂ゆる貧民窟に住する者は、マッチの箱などを貼て一日に僅か七錢か八錢の賃銀を取つて暮して居るのであるから、迚も食物とても上等の物どころか、云はゞ中等の物すら口にする事は出來ないのであるから、如何いふ物を食べて居るかと尋ねて見たれば、朝は大抵御飯に味噌汁であるさうだが、その味噌汁の實は

何かといふに、是また概して切干大根とか又は若布の類で、御飯と云つても自分の家で炊くのではなく謂ゆる殘飯と云つて、各兵營で兵士達が食べ殘したものと、それに炊事場で焦げ付かせたものなどが混つて居るので、これは日々に得る所の賃銀が少ないから止むを得ないのである、而して平常の副食物は如何なるものかと云へば、先づ上等の所でしやこ目指又はごまめ抔で、その他海草類を多く食するとの事で、菓子の類とても駄菓子と云つてパン、そのパンも米利堅粉で拵へたものでは無く、米の糠を原料としたもの、胡麻捻と稱して黑や白の胡麻を煎り、それを黑砂糖にて練り固めたるもの、豆捻といふ、大豆や黑豆などを煎りて割りたるものを、矢張黑砂糖にて固めたるもの等を食するのみである。

右に就て衞生試驗所の表に依れば、胡麻捻や若布の中には多量の石灰分を含んで居るのみならず、味噌汁にも亦石灰分を含んで居るとの事であるが殊に若布と切干大根の如きは十プロセント、しやこ目指

の類は五プロセントの石灰分を含んで居るとの報告である、この石灰分は單に齒にのみ有益であるのみでは無くして、骨や髮の毛等の爲にも有效なのである、是の故に貧民窟の子弟には割合に齒の惡い者が尠ない次第となる、之に反して貴族の食物は如何と云ふに、魚で云へば鯛とか鯉とかいふやうな結構な種類のみを食して居らるゝ、而して副食物として味噌汁を召上がられないでも無いが、下層の者のやうに斯う毎朝用ゐらるゝと云ふ事は無い、約言すれば、齒の爲になる食物を平素取られない、之が齒の良くない原因と考へらるゝ、即ち新網の子弟三百九十人の中僅か百十五人なるに對し、學習院の生徒が一期に一人に付四、二五以上あるのを見れば、如何しても齒の衞生といふ事に就ては一層上流の家庭に於て注意を拂つて欲しい、切干や若布などゝ云ふものは齒の爲にも有效で、そして消化も善い物であるから、何も貧民窟の者のやうに味噌汁の實にするばかりで無く、料理の仕方では隨分美味く食べられやう、否

口に適ふものである、次に運動の充分不充分といふ事は言ふまでも有るまいから之を略すとして、

齲歯が身体の諸部に及ぼす影響

齲歯が身体の諸部に及ぼす影響の中で、尤も直接に影響を受ける部分は何處かと云ふに腸胃である、一体凡ての食物は、第一歯で克く嚙むと同時に唾液を交ぜ、化學的の變化を起して後嚥下すべきである、然るに齲歯のあるものは克く嚙むことが出來ないから、胃腸の働きを過度に要するのみならず、その食物が途中で腐敗して仕舞う、その爲にアンモニヤ瓦斯を起す、この瓦斯が自然血の中に混ずるから良くない、よく世間で口が臭い抔と云はるゝ人は、多くは此の瓦斯が鼻や口から洩れるが爲である。それから

歯と咽喉との關係

歯と咽喉との關係は如何かと云へば、齲歯の黴菌が偏挑腺に宿ると、それが遂には慢性の炎を起す、時としては鼻陰腔が腫れるので鼻で呼吸が出來なくなる、左樣すると其が爲に口でばかり呼吸をする所から出歯となる、次に

鼻との關係

鼻との關係を云へば、齲歯の爲に鼻の上端に種々なる機能的障害が發生して鼻から膿の出る事がある、蓄膿腫といふのは其類であるが、併し時としては鼻の病氣の爲に歯痛を生ずる事もある、先頃或一婦人が頬を抱へて這入つて來たから診て遣ると、何やら鼻の奥に綿のやうなものが見えるので、貴女は何か鼻の病を煩つては居られぬかと尋ねると、仰せの通りと言はれましたから、早速その積で治療を加へると、最早皈りには忘れたやうに喜んで行かれたがと之は耳より歯に及ぼした一例であるが、斯ういふ事もある。

歯と耳との關係

歯と耳との關係に就ては、是も却々深い關係を有つて居るので、エウスカキースや耳炎などは其である、また耳から膿が出て、遂には其が爲に聾になる事もある、是も先頃の事で、患者は地方の人であつたが、最早暫らく右の耳が聾になつて居て、そして始終耳の奥底の方で轟々といふ響がすると云ふから、若しやと思つて

一應診療を施しす見ると、果せるかな年來の聾が癒えと同時に、奥底の鳴りも止んで仕舞つたので大層悦んで皈鄕されたが、これも其の原因は全く齒に基いたと云ふ事を證するのである、この外或場合には視神經に及ぼす事も往々實驗する、更に進むと生命をも殞す事がある。

併し世人の多くは齒痛の爲に生命まで及ぼす事はあるまい、單に一時の疲勞を覺える位であらう抔と輕々しく考へて居らるゝ方も少なくないのであるが決して左樣ものでは無い、餘程注意しなければならぬのである、それから痛まないと云ふので齲齒の根の殘つて居るのを其儘に放任つて置く者もあるが、是も實に危險千万の事で、早く專門家に診て貰うに限る。次に

齒と精神病との關係

に就ては、末だ深く研究した事は無いが、米國のヘンリー、アットン氏抔は確かに關係があると云つて居らるゝ、此の事に關して私は田端の腦病院長ドクトル後藤省吾君とは心易い間柄である所から、種々なる便宜を得たのみならず、聊か之が硏究もして見たが、之が關係のあると云ふ事だけは疑ないのである、此の事だけは私のみでは無い、後藤ドクトルも同意見で、實は多少實驗のお話もあつたのであるが、今は且らくお預りとして置いて、最後に

齲齒の豫防法

を一言して置かう、別に豫防と云つて手段方法のある譯では無い、ツマリ齒の抵抗力を強くするので、その方法は齒を克く掃除するのであるが、世人は齒の掃除と云へばブラシ樣の楊枝で磨く事と思ふが、それは掃除では無い、ドクトル、オットヒー氏も、世人がブラシ樣の楊枝に齒磨粉なるものを附けて爲るのは、齒を掃除するのでは無くして、齒を磨耗するので、從つて薙刀形にして仕舞うと言はれたが、實に左樣である、そこで齒を掃除すると云ふのは如何するかと云ふに、それは餘り硬くない毛のブラシ樣の楊枝で、丁度箒で座敷を掃くやうな工合に、橫

眼鏡は如何なる階級の人に最も多き乎



に上歯は斜めに下の方へ、下歯は上の方へ、歯の根から克く掃除するのである、一体西洋などでは、土曜日に専門家を招いで學校に於て夫々講話があるのであるが、我國には未だ左樣いふ準備が無い、どうか一日も早く左樣云ふ準備をして、第二の國民たるべき兒女をして齲歯抔を患ふる者が一人も無いやうにしたい、若し左樣なれば、私は今の專門を抛つて鋤鍬を取るの考である。(文責在記者)

世間の親達に相談する一條

府立女子師範學校長　瀧澤菊太郎

東京市内の空氣は恐ろしく不潔だ、其の塵埃と煤烟で溷濁した中に百何十萬と云ふ人間が生息して、光線の透さぬ家庭に居る。御覽なさい、途上で逢ふどの人もどの人も血色はなく、生氣の無い事夥しい、かう云ふ家庭に育つ兒童こそ不幸の極だ、夫に一寸紙鳶でも揚げたいと云つて、往來では巡査が八釜しい、兒童は苦しがつて物干臺や屋根の上に登るが、矢張電線などに搦むので巡査が八釜しく云ふ、さりとて中以下の家庭には三坪程の庭さへむづかしいので到底兒童の運動に差支へる、公園の數は少いし電車や自働車は通る、勢ひ親の注意で引つ込思案となる。

いぢけて口の健者な兒女

こんな運動不足な子が成長して弱い父母となる、此弱い父母が產んだ子も同じやうな運命に會つて弱い、弱いのが遺傳となつて人間は段々退步して行く殊更女の兒などでは、女親が綺麗々々と心掛けて、早くから臙脂白粉を塗つてやる、これが習慣となつて子女は益々羞恥の念を増してお修飾をする、亦親は子女の手にひゞやあかぎれが切れたと云つては大怪我でもしたやうに大事がつて、雜巾懸けはさて置いて庭掃除さへせぬ家庭がある、子女は愈々いぢけて了つて火鉢にかぢり附いて小切れ抔を刻んで居る

と云ふ姿だ、故に運動は不足で口ばかり健者になつて何も出來ぬ、將來何の役にも立たぬ、子女は小學時代から、余り白粉や臙脂に浮身をやつさせるのは殊に惡い。

天然の美を發揮せよ

夫故早く子女は成人びて了ひ、長い袂を引づッて一寸の事をいやがる、今日の子女が飯焚の稽古より白粉を塗つて居たがつたり、祖母の肩を叩くより、琴を彈いて居たがるなんかは前途甚だ面白くない、運動すれば身體が丈夫になる、こんな不潔な空氣の彌憎した東京の内でも、働く事に趣味を持つたら、子女の體育は今日より更に發達もしやう、天然美は先天的美で、人工によつてごまかされた美容術は眞の價値に乏しいと云ふ事を思はねばならぬ。

高等女學校の生徒と雜巾掛

富豪の子弟ならば進んで、郊外にテニスでも持出す位でなければ駄目だ、東京のやうな不潔な空氣を呼吸して居る者には郊外の運動が最も大切で、閑さへあつたら寒中の富士登山もよからう、親から亦進めてかゝるのが兒に對する思ひやりだ、と云つて常に家に引込ましてばかり居て、偶々學校の運動會に出しても徒歩競爭をやらせた所でこれが運動には決してならぬ、兒童は疲勞して途中で倒るさへよくある例だ、これは一般の親に對しての話だが、我子が高等女學校にでも通ひ出すと、本人は無論の事、鬼の首でもとつた積りで居るから、子女は益々横着になつて縱のものを横にもせぬやうになる、親も亦高等女學校の生徒に雜巾懸けをさせたら罰でも當ると思ふかして、余りに思ひやりを仕過ぎる、まさか嫁づいた後夫婦で下宿住居をして辨當を取るやうな家庭もあるまいし、少しは完全に料理の法とか、老人を勞る道とか、家庭上必要な經濟を敎へて置くことにしたい、白粉や臙脂も程過ぎたのは非常に醜い。

女子は遊離感情に富む

女子は感情に脆くてすぐ涙が出る、そんな涙を出す程なら何事も着々實行するとか云ふに爾うでない

唯泣てばかり居たのでは仕方がないものだ、これを遊離感情と云つて、實行に遊離した感情で何の効用もなさぬ、遊離智識、遊離感情は絶對に排斥すべきもので、唯泣きたがるのも困つたものだと思ふ、女子の欠點は則ち是である、女子を教育するのは余程困難なもので、加納久宜子などは兒童に對しても戸外運動を奬勵する、平生自身も綿服で、毎朝寒拭法と云つて、冷水摩擦をする、鹿兒島に七年知事を續けた人だが、衛生上の注意が行屆いて居るから今でも身體は頑健で居られる、亦令孃達も體質の天然美を保つて居る。

冷水摩擦を待つ六歳の兒

私の家庭の冷水浴の模樣を新聞が書いたが毎朝お茶の水附屬の中學へ行つて居る十九の悴と、私が冷水浴をやる、跡は獨逸協會へ行く弟と六才を頭に皆冷水を運んで行くと、喜んで裸になる、母が一寸遲くでもするとヤイ〳〵とせがむ、過日の寒氣には水道の栓が凍るので仕方がないから井戸の水を注る、先づバケツに凡そ五六杯、息をも繼がず引つかぶると、跡の心持のよいことお話にならぬ、お蔭でこの五六年少しも身體に故障がない。

「水は天の賜なりと」みよ

冷いと云つて水だもの、湯風呂へ這入つた樣に暖くはない、然し丁度あの寒垢離を取る寒參りが、あの薄つぺらな着物を着て、寒威の嚴しい盛りを、神佛の加護によると觀念して居ると同じ理屈で、「水は天の賜也」と、思つて居れば別に恐しくもない、そこは氣の持ちやう一つで、跡で氣のすが〳〵するなんかは到底實行しない者に語れない話だ、隨分世間には冷水摩擦の功能を認めてやつて見る、風邪を引いたと云つて夫れなりに止めるがあれは意志が弱い熱がとれたら復續けてやつたらよいのだ、私が群馬の師範に居た頃は毎朝寒中利根川へ飛び込んだものだが、冷たいと思へば冷めたい、暖いと思へば暖かい、夫れで私は麥七分に米三分の引割飯を喰べてゐ、自分は學校に迄辨當にして行くが、そのお蔭で

身體は此通りだ。

冷水浴の實例

十九の悴なんか此寒さに綿の這入つた着物は着ず足袋も履ず、夏服を着て登校すると云ふ有様だが、余り殘酷だから學校丈にでも冬服を着て行けと云ふが、寒くないと云つて着ない、然しこんなことを家庭に奬勵しても困るが引割飯を喰ふのと水浴丈は一般の家庭に普及させたい、死んだ根本翁（通明氏）は精神を洗ふ積りで八十四迄水浴を續けた、井上侯は七十四才だが冷水を風呂桶に滿して全身を坐浴してゐる、松方侯もやられたそうだが、今は病氣をしてから止めてゐられる、重野博士は鹽一合に水三合の冷水磨擦をやつて、淡水で跡を拭ふ、ツマリ三度磨擦するので、三十分間時間を費すといふ話だ、これが爲當年八十二才の高齢であるが、未だ目鏡はかけないさうだ、私は世間の家庭に冷水浴をお勸めする。

おでんを賣りて成功せし實例

麻溪山人

市内淺草區福井町一ノ一二小林勝左衛門氏（六十五）は山梨縣東八代郡一宮村の產、今を去る二十七年前出京、苦心經營、おでんを賣りて資產は當時五萬に達す、此處に於てかおでん屋大盡の名現はる一夕全家を尋ね、數十年一日の如く良人を助けて成功せしめたる妻女乗子の談をきく。（一記者）

良人のふところに金五十錢

私は當年七十才になりますが、良人は郷里で金貸をしましたが惡者の爲に散々な目に逢つて、今から二十余年前、良人は四十才の折、僅に夫婦で七圓の金を持つて來つたのです、そこで郷里の者がこの福井町に住んでゐるのを便つてやつと探しあてたのですが、其晩はそこで泊めて貰つたお禮として殘金五圓五十錢の內から、特に五十錢丈を封金にして差出したのです、すると私達の金の有るのを見て無情にも家主が金を貸せと云ふ、仕方がないから五十錢を殘して跡は皆差出して終つたが、イッ返してくれ

る當もない、愈々懷中には五十錢しかないのですし良人は閉口してその五十錢を路銀として郷里へ歸つたのです。

夫婦でおでんを賣る

郷里で貯へあつた玄米二俵を七圓五十錢に賣つて親戚の止めるのも聞かずに再び東京へ來た、そして其家の隣を一圓七十錢の家賃で借受け、二圓五十錢を出して古屋臺を買ひ込んで、愈々おでんの露店を出すことにしました、其頃下谷の佐竹原（今の下谷竹町）は却々繁昌するし、毎日五六十錢の儲があつた、其内に淺草橋が開通したので、其方面へ新に屋臺を持ち出したのですが、一日二三圓宛も賣れるので、良人も私も大働きに働いて、良人はおでん、私は大福餅、車を挽き廻つてやつと二十圓のお金を貯へました。

家作屋臺荷車收入

この二十圓の資本で、おでん屋臺を作つて、損料貸を始めましたが、運の向く時はよいもので、追々

店も繁昌するので、儲つた金では側から側から新に屋臺を買つてこの損料貸で今日までやつて來つたのです、今では有難いお蔭には家作（數十個の由）も出來、おでん屋臺、荷車（百十余臺と稱す）を買ひまして、月々（數百圓に登ると云ふ）少しの金も這入りますので、一臺につき一ヶ月三錢宛の税金を納めて、まアどうやらかうやら命が繋げて行けるのです、私達が始めて東京へ出て來つた當時、勝右エ門の苦心も一通りではなかつたでしたらうが、私の心配もお話にならぬ位でした。

貧困中の食事

お恥しい事ですが、お芋の屑を買つて來て、肉のある處丈を削つて煮て三度の腹を塞いだこともございます、炭を買ひましても炭俵は何より大切なもので、此俵を薪代りにしたり、鉋屑でも固くネジッて束にして焚木にするのです、此束が七つ八つもあれば立派に御飯が出來るのです、亦鋸の挽屑は竈の下へ入れるやうに致しますが、誰も貧乏は同じ故、こ

の屑は自分の家で使つても、良い方を焚木に人樣に、差上げるやうに致しました、三度三度のお茶でもなるべく煮返しものを喰べるやうにして、衣類は女のたしなみですから余りボロ〳〵のものは着ませんでしたが、随分繼ぎハギしたものでした

儲ける時勢に今昔はない

髮なんか十年も結つたことはありません、朝は夜の疲れで早く起きられませんでしたが、夜は大底十二時から一時すぎまでも店を出してゐました、よく私の處へ來る方が、おまへの儲けたのは時勢がよかつたからだと云ひますが、私の子供の時分は八日もかゝらねば一分と云ふ金が手に入りません、人間一日の手間がたつた二錢、その替り米は一升八厘か一錢迄でしたから、何もかも安かつたのです、今は大工でさへ一日一兩儲けるのは易い、時勢は今も昔も少しも變つてゐない、今の人は働かず、座つてお金を儲けやうなんて全く間違つてゐます。

夜商人の働きがちがふ

十年十五年前の夜商人は火事があつたと云つて直ぐ屋台をかついで馳けつけたものです、火事も随分大きなものがあつたからとはいへ、その位の意氣込でなくてはお金は儲けたくても儲からぬ、今の若い方は火事があつても寢床で『三鐘がなつてゐるよ』なんかと澄してござるのですから儲る理屈はありません、運と云ふものは手にあるもので、稼いでさへ居ればきつと金は貯るものです、今は便利になつたと云つて、一寸其處迄用達に行くにさへ電車に乘る、私達は今でも二錢三錢のお金を集めてゐる身ですから云ふ譯でもありませんが、輪代を取りに廻るのに東京の隅々ら隅までテクテクと歩いたものです、こんなとに迄お金を捨る今の女達は實際贅澤なものです

衣類の繼は恥でない

一寸風呂へ行く、ヤレ八百屋へ行くと云つてはショールとかを首に捲きつけて出るやうですが、私は跡にも先にも頭巾さへ冠つたことはない、それで風邪は引かず、寒いと思つたこともない、今日の若い

奥様達は、近所となりへ行くにさへあんな風だし、雨の降る時なんか、わざ〳〵蛇の目傘を持ち出すのです、第一傘で見得を飾る、良い着物を着た時にはどんな傘をさすのか、贅澤も程のあつたものです、着物にしても今の方は、銘仙でなくてははゞが利ぬやうに心得て、綿服を嫌がる、私は継ぎを當てたものは恥にならぬ、たゞ女子としては、着物に垢をつけて置くのを恥とすると思つてゐる、今も此通り家では継の當つたものを着てゐます、何も困ると云ふ譯ではなし、着物の一枚や二枚何でもないのですが、人は度と云ふものを起してはならぬ。

髪を結ふ暇に内職をやれ

子供の内は五尺か八尺の切で出來た着物も、一丈となり、半反要るやうになると貧乏人の子供は『竹の子育ち』と云つて追々剝がねばならぬものです、今の若い女は美くしい着物に見得を飾つても、余程内幕が苦しいなどはよく見ることとです、これも東京であるからこそよいが、田舎には所詮やつては行けますまい、それに髪を毎日々々結つて、白粉や臙脂に時間を潰してゐるのですもの、私達の目から見ると、あゝ『あの暇に内職でもやつたらば』と、いつも歯がゆく思ふのでございます。

來らんとする寶石時代

東京寶石株式會社支配人　松岡順吉

我國も既に純金時代は去つて將に寶石時代が來らんとしつゝあるが、予が茲に云ふは、單に一の想像ではない、輸入額が巳に數字の上に於て示して居るので、日露戰爭以前には輸入税の表示されたものが四十二萬位であつたが、日露戰爭後は一躍して九十萬圓であつた、一昨年の春は三百萬圓以上になつて居るが、今年の如きは四百萬圓になつて居るであらう、而して昨年の表示された内にはダイヤモンドに輸入税の科してあるを見ないが、これらは多く中流以上の人が使用するものであるから、百五六十萬圓

は下らぬと思ふのである、この昨年のダイヤモンドは脱税である、斯くの如く寶石の輸入が日増に多くなるのは、已に純金時代と云ふものが去つて、寶石時代が來らんとするのである、我會社で採收する寶石も日日増加して居る、其寶石が注文の多き爲めに應じ切れぬと云ふ目今では結果である、我會社の採收する寶石と輸入石とを合すれば、相半するのである、其内我社が近年海外に輸出する高も又多くなつて來て、これまでは寶石といへば海外から輸入されてゐるが、現今では反比例に之れを日本から輸出するのである、海外より輸入する石があるに、我社はこれを海外の產地として重きを置く、歐米各國へ日本の寶石が輸出すると云ふ、喜ぶべき現象を來たしたのである。

寶石と純金の趣味

寶石の趣味と純金の趣味とを比較すれば、遙かに寶石の方が多大なのである、凡て寶石と純金との比較のみでない、人の向上心の發達し交際場裡に立つて活動せんとする人は、裝飾品に付いての趣味に重きを置ねばならぬ趣味と云ふものは、對人的にして又自己本位のものである、即ち純金の指輪を箝めて居る人があれば、男子でも六匁以上のものは到底重くて箝められぬ、謂んや婦人の如きは四匁以上のものは到底重くて箝められんのである、而して四匁の指輪を箝めて居る人があつても、直ちに一匁五圓とすれば四匁にて二十圓と云ふ額が推知することが出來るのである、これ裝飾品と云ふ眞價がない裝飾品と云ふものゝ趣味は對人として自己本位、即ち人が一目して其評價に苦しむものが裝飾品の趣味であるこれ人が一目して其評價に苦しむと云ふは、獨り純金に付て云ふのではない、予は趣味自體と云ふものが對人にして其評價、即ち價値を容易に推知することの出來ぬ處にあると思ふのである、英國の如きは已に國法を以て裝飾品には十五金以上のものを禁じてある、外國は中流以上の人は大底九金十金に寶石を箝入して使用して居る、我國に於ても現今では十

八金より以下の金に寶石を入れたもの丶注文が日々多くなつて來たのである、これ裝飾品に對する趣味が一般に知れて來た結果であらうと思ふのである、

寶石の流行と鑑識の急務

寶石の流行に伴ひ、一の急務とする所は鑑識である、我會社に於ては特に、創業以來これらの普及に腐心して居るので裝飾品としては寶石は他の金屬と異り容易に其流行が去るものでない、況んや將來に流行の域に入りたる今日に於て尙更である、何故寶石は他の金屬と異り無限であるかと云ふに、他のものと異り裝飾品としては尤も當を得たる華美なるものである又凡てのものに使用しても決して卑しいことはない、一の特長とする處がある、近頃卷煙草入簪 櫛 笄 羽織の紐に至るまで、寶石を箝用して我社の如きも目下多數の注文品の製作に忙しいのである、金銀屬類の色揚せしもの丶如く他物に接するとも、長年月間保存するも光澤が失せる等の憂がない、我會社で採收する寶石の如きも輸入石よりも內地產

は輸入稅丈でも安いのである、而して我會社創業當時より其鑑識の普及を輸入稅丈でも安いので一般學者の參考に寄する爲、寶石の原石を一袋一圓で賣つて居る、勿論之は余程の損であるが一般に寶石の鑑識を普及する爲である、この寶石と云ふものは金銀屬の如く、石に摺つて藥をつければ其性を知ると云ふ如き容易なものでない、予が友人がオランダの硝子を高く買つて居たのを知つたが、素人方には一寸鑑識が出來ぬのである、例令ダイヤの如きオーパル、サファヤ等の寶石は高價である、故にそれが鑑識を得んとする人も、この高價の寶石を玩味してこれ等を以て研究すると云ふ斗は上流社會は知らず、中流以下では出來ぬことである。

これらの寶石の知識を養成したいと思つて多くの損も省ずして販賣して居る、幸に現今華族社會を初め中流社會等には、寶石の原品が非常に流行し、某侯爵を始め、五六伯子は我も及ばぬ位に鑑識力を有せらる丶やうになられたので、我會社の素志を貫く

時代となつたのを喜んで居る。
これ我國の寳石に關する知識を有せらるゝ人が多くなつて來たときは、或は趣味と云ふ點に於て如何と云ふ人もあらうが、愛用者が多くなつて其眞僞を一見して知らるゝと云ふことは我々が外國に對して誇ることができると云ふ新現象があるのである。

女子と柔術

天心眞揚流
体育舘主　八木寅次郎

柔術と云へば如何にも荒くれ男がやるものと思ひ女子などは必要がないやうに思ふ人もあるが決して爾うでない、近來は悪書生が各所に出沒して、手弱い女子と見れば亂暴を働いて快とするものがある、柔術の形でも知つて居れば此時にはキット役に立つものだ、むざ／＼敵の爲に辱を受けるやうな不幸を免るゝことが出來やう。

陸軍大尉の亡夫人

私は二三十年來兩度の大戰に從軍した間を除いて道場を開いて居るが、時々妙齢の女學生達が見えて稽古をしてくれと云ふ、然し男子の門人が多い中に二三人にしろ女子が交つて居ることは、監督上余程の手數がかゝるので斷つて居ます、唯陸軍大尉の未亡人で安田きん子と云ふ人が見えて、娘は有し無論再縁の心もないから柔術でも修めて道場でも開いて見度と云ふ希望、殊に薙刀術は例の小松崎古登子さんに習つて皆傳の免許もあるしと云ふので、稽古をつけて柔術は形の投げ捨て中段まで教へました、半途で私が從軍したゝめ加納塾で修業を積んで一通の免許を得たそうです、私が女子に對する柔術傳授の經驗と申すと甚だ淺く其他の二三人に手を附けて見ましたが、どうもランドリまでになると殺風景で、女子としての美性を傷くるかと思ふ位心配します、矢張形までゞ止めた方がよいと思ふ。

ランドリは女子の爲にとらぬ

然しランドリは余りに専門的で、ホンのたしなみ

として覺え込むだけには形で澤山です、つまり當て身と云つて相手の氣合を量つて突くなどするので、一面膽力の修養ともなり、萬一の場合に處しても悠々敵を倒すことが出來ます、いつぞや交換局長の夫人が惡者の爲めに殺されたことがありましたが、かゝる場合にも形さへ覺えてゐれば安心なもので、よし組討となつて力屈し負けたと云ふても所謂「身を捨てゝこそ浮む瀬もあれ」です、最も男女の術者が組討の段となると、矢張女子は男子の敵ではない、そこは眞實の腕力の爭ひとなる譯ですから、先づ形だけ覺え込むやうにして置たら可いと思ひます、

掏摸の咽喉を締め上げる

妻もすこしランドリを稽古したが儘頃白晝亂暴にも一人の掏摸が妻の懷中へ手を入れて紙入を拔き出したのです、そこで妻も氣が附いたと見え矢庭に曲者の胸倉を執つて締め上げた、すると驚いて紙入を出したので其まゝ放して行つたそうです。こんな工合ですから女子が覺えて置て損にはならぬ事で、いつか加納塾で下田歌子さんが門下生を連れて來て稽古をして貰つたそうですが、女子がランドリをやるのは余り面白くない、變性男子を作ると云ふのが目的でないから、形だけの修業でよい。

八歳の柔術家

私の流義では形が百二十四手、ランドリが左右十五手都合三十手になります、然し重にやるのが形では三十手位で其中幾分覺えてもよいでせう、柔術の眞に體育に適せる時期は十二三から始めて二十一二歳位です、此時期にミツシリやれば體育の非常な助けになるのは受合です、今私の門人の幼年部では葉原醫師令息の一郎さんが八歳で見えます私は十二三歳位かと申しましたが是非ともやらして貰ひたいと云ふので入門をさせました、成績は良好です、私の悴豪は當年十四歳ですが、「大きな人とやつても、下手な人は投げにくいが、上手な人は倒れ方がうまいから投げるに骨が折れない」と云ひ、「野球よりも面白い」と申して一生懸命にやつて居ります。

高野博士と糸左近氏

私の道場には去る二十六年高野法學博士殿も入門されました、今では糸左近さんも四十二歳ですが、糸氏も始められて相當に成績を舉げて居られます、糸氏も非常に柔術が女子の體育の爲に有益である意見を持つて居られるさうです。

我日記に映じたる辻占賣

薄命女史

二月十二日、梅の蕾が綻びかゝつたとか、綻びたとかの新聞記事をお父樣から聽いた、されど春とは名のみにて寒さが嚴しくて、諏訪湖の氷滑さへ今月一杯あるとのことなれば無理もない、天氣は頗るよく、暖い日ざしが椽の上にまであるので、解きものなど持出し、お祖母さんが郷里のお話を聽ながら、午頃になつた、お父樣はいつものお酒を召食つて、唄など歌ひながら美代聽け々々と仰る、お母樣は、

「貴郎、子供のまへで見つともない、お止しなさいよ」と仰ると、お父樣は赤いお顏をして

「お前のお母樣は野幕天だよ」と、繰り返し遊ばさる、私は默つて居ると、遠くの方から

「辻占……通ふ千鳥の……」と、聽へる

お父樣は「いつもの辻占屋だ買つてやれ」と有仰る、窓から辻占屋と呼ぶと、十三四の女の子で、私より少し脊が低い、「辻占を下さい」と云つたら、「有難うございます」と羞恥だ物の云ひ振、私は屹度以前はよい處の子供に違ひない、今は零落れて居るのであらうと、思ひ思ひ買てやつた、二三軒程行つた邊で

「戀の……つぢ——うら……」と呼んだ風が頻りに吹くので聲が途絶えた、此夜お母樣から孝行な蜆賣の話をして頂いた、就床。

十六日、雪がチラ〳〵降り出したが、やがて雨となつてうすら寒い日だ、お祖父樣は炬燵に煖りながら、老眼鏡で漢字ばかりの御本を讀んで居られる、お母樣と自分とはお裁縫をして火鉢の側に居た、すこし

草臥れたので、何の積りもなく火鉢の抽斗を開けると、何やらいゝ匂のする藥袋があつた。

「これはナァニ」

とお母様に聞くと、お祖父様は眼鏡の上から、

「お新、美代やが抽斗を開けて、掻き廻すやうだよ」

と、注意遊ばさる、お母様は『大丈夫でございますよ』と、云つて

「お前、風邪の藥ぢやないか」と、お笑ひなさる、袋の下にお札のやうな紙片の開いた一枚があつた、何やら文字が書いてあるので、お母様に渡すと、讀んでクス〳〵お笑ひになる、何のことか自分には更に分らぬ。

「何だい」

とお祖父様が聞く、お母様は猶もお笑ひ遊ばされて、

「いつかの辻占ですよそれあの晩の」

と、云ふと『成程』とお祖父様も首肯き遊ばさる。

二十日、櫻も咲きさうな暖い日だツた、お隣の鶯が籠の中で囀つてゐる、一寸お郷里へ歸つてゐたお祖母様も居られる、日當りのよい庭先に半日遊んで了つた、午後からお母様の側でお裁縫を教はつて人形様の衣類を二つ拵へた、夜になると亦お父様はお酒を飲される、自分は復辻占を買つて欲しいと思ふ。

此晩に限つて辻占屋が來ない、私は何だか胸一杯になつた、若しや病氣にでもかゝつたのではないかしらん、私はお父様もお母様もあるけれど、あの子にもあるだらうかと、氣にかゝつて仕方がない。

遠慮は損慮

秋間ため子

さらでだに消極主義の婦人を捕へて、内輪ひかへ目の習慣を養ひ、之を其美徳とした時代は、思ふにもう過ぎ去つたと思ふ、謙遜、會釋、遠慮、成程此等は美徳であるが、過ぎたるは猶及ばざるが如しで、畢竟程度問題、而も其程度なるものが時代に依つて變る事も決して忘れてはならぬ、昔は三度の辭儀も

ちと粗略であつたものが、今ではもう丁寧な方になつた、是はほんの一例に過ないが、其他の事でも昔と今とは大いに處世法を變へねば何らぬ事がある、然るに今の人を律するに猶昔の法を以てするものは、決して當を得たものとはいへまい。

婦人の差出すぎるのは、素より感服せぬことであるが、さりとて遠慮すぎるのも餘り褒めた話でない、却つて大いに損がある、甚しきに至つては意外の禍を醸さぬとも限らぬ、

彼姑と嫁との不和、繼母と繼子の不折合は、隨分世間にありそうな話だが、此原因の多くは双方意地惡の衝突よりも却つて互ひの遠慮にある様だ、之が他人の寄合だけについ物事に遠慮が出る、遠慮が出と水臭く成る水臭くなると不平が起る、すると其不平が正面から訴へられないで動もすれば裏面側面、即ち當人の相手より赤の他人に洩れ夫からまた當人に聞える、すると聞た當人達はこれを直接に耳にしたより更に氣まづくなる、癪に障る於是遂に互に不和と成り不折合と成つて了ふ、これが概して順序らしい。



家庭に於ける清潔法

醫學博士　中濱東一郎

家庭衛生に就て述ぶべき事は澤山に御座いまする即ち飲食から衣服、家具ナカ〳〵區域の廣いものでありますが、併し清潔法も亦家庭衛生の中で最も大切なる一つに數へられて居ります、で一口に申しまするど清潔法と云へば、極簡易な事であるやうではありますが、實際に清潔法を普及させるといふ事はナカ〳〵困難の事でございます、口では清潔を専らにしやうと斯う云ひました所で、實際口で述べる通りに行けるや否やといふ事は、餘程監督にも注意しなければならず、又監督者が自ら進んで清潔法を實行せねばならぬ場合が多いのでございます、之をば人の手に委せて置いて、婢僕の澤山ある人は其者達に一任して置きますると、ナカ〳〵思つた半分にも往きませぬ、自ら進んで行らなければ其目的を遂する事が出來ない位實施が困難のものであります、隨つて又清潔といふ事は極卑近の事のやうであるけれども、實行の困難なるばかりで無く、よく考へて見ると隨分誤解も多い、清潔法を施す爲に却つて不潔を招ぐと云ふ事が無い事もありませぬ、夫故に實行に困難でもあり、又誤解が屢次あり易いものであるから、之を搔摘んで述べるは最も肝要な事と思ふ。

清潔といふ事は俗に之を綺麗にすると云ふ事であるから、清潔法とは即ち綺麗にする方法であります併し日本の俗語で綺麗といふ事は、美麗即ち美しいと云ふ事にも遣つて居るが、玆で云ふ綺麗といふ事は美しいといふ方で無く、謂ゆる清潔であります、美しいと云ふ事と清潔といふ事は或場合に於ては一致する事もあるが、清潔は必ずしも美麗では無い、美麗必ずしも清潔では無い場合がある、例へば、花瓶に插した花は美麗には相違ないが、若しも之に塵がたまるか、或は枯葉が交つて居る時は不潔である、又極卑近な他の一例を取つて見ると、爰に破れた木綿の繼だらけの衣服があるとして、一寸見ると美麗

では無い、けれども極能く洗濯して少しも垢の無い物は、美麗では無いが清潔である、また雑巾とても其通り、襤褸を以て拵へた雑巾は美麗では無い、併し極能く洗濯して奇麗にした物を見れば、美麗では無いが矢張清潔であります、それ故に清潔といふ事と美麗といふ事とは、或場合に一致する事はあつても、必ずしも同一では無いといふ事は考へられます
そこで清潔法の中で先づ最初に説くべきものは

空氣の清潔

であるが、清潔なる空氣の人身の健康に必要なる事は、固より云ふ迄でもありませぬけれども、日本の家庭に於ては、往々毎日掃除をする際に、清潔になさんが爲に、却つて不潔を招く場合があります。空氣の清潔を期する目的でありながら、却つて空氣の不潔を招く事があります、これは毎朝掃除をするのに釆配ではたいたり、又は箒で掃く、是は無論必要であるけれども、その遣方によりて非常に相違があります、掃除をする時分には、晴雨に拘はらず必ず廣く戸障子を開放して、そして掃除を仕なければ清潔にする事の出來るものでは無い、けれども時々殊に下婢などの掃除をする所を見ると、障子を廣く開け置かない、甚だしきに至つては雨戸を閉めたなりに室内で釆配を遣つて居ります、斯う云ふのは只或所に蓄積つて居る塵をば他の部分に移すに止まる、例へば、掛物の上にある塵や障子の棧にある塵をはたいて、戸棚の中或は机の上に置替へるに止つて、その實は何の利益も無く、却つて空中の塵をば飛散して、そして掃除前よりは空氣を不潔にする結果を見る譯になります、極安靜なる室内の空氣を、それから掃除をした直ぐ後の室内の空氣とも比較研究するに、縦ひ戸障子を廣く開けて室内を掃除するとした所が、一時空中には非常に澤山の塵埃が舞ひ上つて居ります、是は極精密な試驗がしてあるので、只塵が舞ひ上がる計でなく、疊の間とか家中の器具、又は簞笥とか長持とか本箱の間にある塵埃、或は其間にあるバクテリヤなどが空中に飛上りまして、而

して一定の空中に含む所のバクテリヤの分量が著しく増加する、夫故に掃除の前よりは掃除した後の空氣の塵は著しく増加するからして、之を速かに戸外に排除する事を必要とします、それ故に掃除後も戸障子は悉く開放しなければならぬ、若しも戸障子を分に開く事が出來なければ、寧ろ掃除をしない方が遙かに優ります、亜非利加の極北の方に英吉利の兵とそれから、土着の兵の住つて居る兵營があります、所が英吉利の兵營には肺結核の者が澤山にある、然るに土着の兵營には之に罹つたものと左樣で無い者とが有つたさうであります、そこで肺病の無い兵營に就て調べて見ると、飲食物なり其他の生活の方法は皆同一であるのに、唯一つ異つて居るは采配を用ゐない斗でありました、之は前年獨逸の衛生新聞に出て居りましたが、餘程これは參考になる事と記憶して居りますが、たゞ異つた所は掃除に采配を用ゐない、室内の塵埃は雜巾を以て拭ひ取る事になつて居るさうです、その雜巾で拭ひ取る兵舍に限つて

一人も肺病が無い、その他の歐羅巴人の兵營及び土人の兵舍等には孰れも肺病を發生しました、之を評した人の言ふには、采配を使ふのが肺病の原因となつたのである、采配使用の爲に多量の塵埃と肺結核のバクテリヤとが空中に飛散される爲に、人々が夫を吸入して肺結核を發生し、一方の肺結核の無い所は濕つた布で塵埃を拭ひ取るから空氣が不潔とならず、隨つてバクテリヤを吸入する事も少ないので肺結核を生じないのであると申して居ります、これは普通の新聞で無く、科學的の即ち衛生學上の專門の新聞に出て居たのであるから大に參考になるのであります、現に私の所などでも下婢が代ると掃除に慣れない所から、十分に戸障子を開けないでバタ〳〵やつて居る、誠に是は危險千萬な事であります、で單り是は毎朝の掃除ばかりで無く、寢具の上げ下ろし、即ち床を敷いたり仕舞つたりする時にも注意を要します、朝床を疊む時には一般に掃除をする前に疊むからして、その後では障子を開けて掃除をする

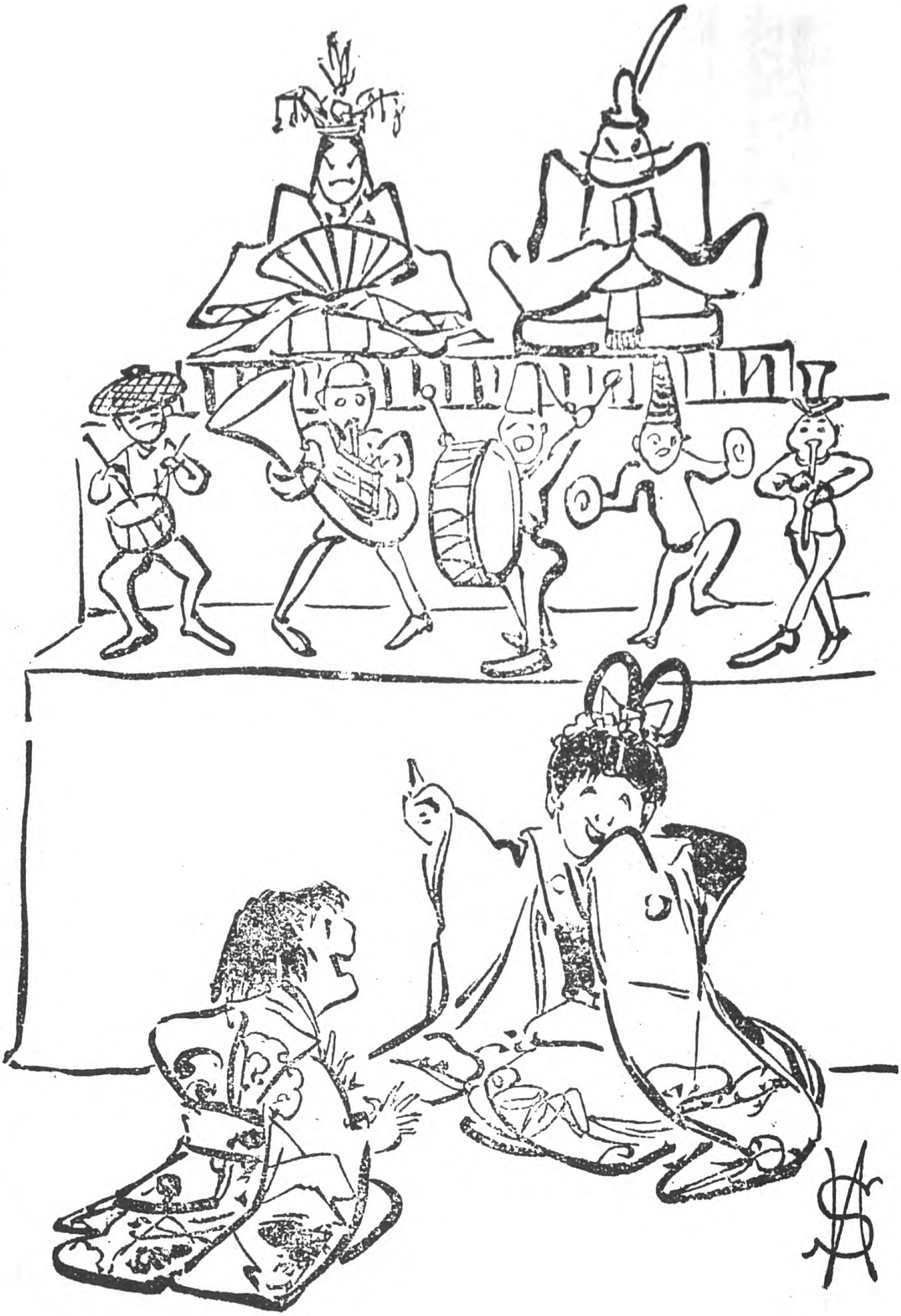
から宜いが、夜は餘程考へものであります、殊に夜ふかしをする家では晩くなるからして、戸を締めてから戸棚より布團を出して敷く、すると布團の中にも疊にも塵埃がある、それへ布團を手で叩き、或は布團を投げたり放つたりパタ〳〵やる、それが僅か一枚か二枚ならまだしも、三人分も四人分のも一時に敷く時は隨分多量の塵埃が出る、それを知らずに寢て居ると、朝まで其不潔の空氣を吸入する事となるので、誠に是は危險であります、それ故に私の家では布團を敷く時には、雨が降りましても、どんなに晩くとも必ず廣く戸を開けさして敷くので、是は夏でも冬でも行ります、隨分冬は寒いから嫌がります、が、戸障子を開けて布團を敷いて、少くとも十分なり十五分なり其儘開放し、戸外の新鮮なる空氣が入換るのを待つて、初めて戸を締めて寢に就くやうにして居ります、隨分是は容易い咄でありますが、家の主人たる者が注意をしないと實行は出來ませぬが併し考へると餘程危險であり、且つナカ〳〵不潔な事であります、是は僅かな注意で此危險を除く事が出來ますけれども、通常之を輕視して顧みる者が少ないのであります。

　右の次第であるからして家の掃除は、成るべく濕つた布片で塵埃を拭ひ取る方法が安全であります、成るべく床の上或は棚の上などは雜巾掛をする、是が必要であります、西洋風の家、例へば學校の教室の如きものもさうであります、掃除の後で直ぐに生徒を入れますと、生徒に塵埃を吸入させる爲に入れると同じ結果になります、夫故に掃除する時は成るべく左樣いふ所は雜巾掛をする、隨分斯ういふ所の雜巾掛は廣くもあり困難でありますが、獨逸邊では凡て拭ひ取る事にして居ります、日本の如く朝起るとパタ〳〵諸方でやかましい位采配を掛ける所は殆んどありませぬ、采配を掛けるが強ち惡いといふのではないが、掛けるなら掛けるだけの注意さへすれば、隨分清潔になり且つ危險を避る事が出來ます、けれども成るべくならば雜巾掛を專らにするやうに

致したい、併し雜巾掛に付ても注意を要する事が澤山にございます、誠に是は極容易な話で誰も知つて居る事でありますが、實際はナカ〳〵思ふやうに行かぬもので、下婢などは動もすると雜巾掛をするのに水を交へる事を厭ふ、水道が遠いとか或は井戸の水を汲むのが嫌だとかいふので汚ない水で雜巾掛をする、何の事はない塵埃を塗つて歩くのであります、是では少しも雜巾掛の効用はない、却つて不潔にするのであります、夫故に若し水が不透明になつて色でも變るやうになつたら、直ぐ新らしい水と換へて雜巾掛をしなければならぬ、殊に冬寒い時分には下婢が冷たい事を嫌ふ爲に湯を沸かして拭掃除をする湯で拭掃除をする場合には最も不潔になり易い、と云ふのは、湯は水ほど澤山に無いから隨つて取換へない、又は通常の水ですら交換を厭ふのであるから少ない湯では尚更交換しない、それ故バケツの底に漸く一升か五合の湯を入れて其中へ雜巾を幾つも入れてドロ〳〵した湯でやる、誠に不潔極まる事でありますが、若も家の主婦たる者が顧みずに居ると飛んだ事になります、成る程嚴寒の際雪の降る時分には、下婢とても冷たいから氣の毒であります、夫故に溫かい湯でやるも宜いが、雜巾掛をするのに炬燵へでも暖る氣でやられては困る、夫故に一杯の湯に十杯の水を入れたものを取換へてやれば宜い、それを初めから手が冷たいといふので火に燰る考で熱い湯を我慢して雜巾掛をする、左樣いふ事では迚も家を清潔に保つ事は出來ないから、是は一度二度三度命じましても行はれませぬ、自分がやつて見て湯と水との分量を加減して見せなければなりませぬ、誠に不便な事であります、是は私は屢々見て居りますから餘程やかましく云ひませぬと、冬などは必ず家が不潔になると認めねばならぬのであります、その次は矢張

空氣の不潔のこと

で、たゞ固形の物體を以て不潔にするばかりで無く、揮發性の即ち瓦斯狀態の物を以て空氣を不潔にする



事が度々あります、中に就て屋家の臭氣であります、例へば、臺所の臭ひ、或はまた便所の臭といふやうな事も之を避けねばなりませぬ、斯の如き不快の臭氣は直接に人の健康を害するかと云へば、決して左樣いふ譯では無い、惡い臭を嗅いだからと云つて、直ぐに其人が病氣になるかと云ふに決して左樣では無いけれども、永い間だ惡い臭を嗅ぐときは段々身體の健康を害すると云ふことは爭ふべからざるは事實であります、夫故に惡臭を去る爲に色々の方法を講じて居ります、例へば、線香或は香の類、若くは香水などを撒布する人があります、けれども是は誤解の甚だしきものであります、惡臭を去る爲に香を焚くとか線香を燻べるとか云ふのは、ツマリ我々の臭を感ずる鼻の感覺を鈍くするだけの作用を持つて居ります、で其臭氣の原因たる物は依然として空中に存在して居ります、たゞ我々は惡い臭を感じないだけであります、惡い臭を感じないだけで宜いならば、香水を鼻の孔へ入れて置いても宜いのでございますが、さうでない惡い臭を感じても感じないでも、惡い臭の物が空中に飛散して居るのが人體に害があるのであるから、却つて我々の嗅覺を鈍くすると云ふのは、空氣の不潔の度合を知る所の感念を減ずる、さうすると室內の空氣が非常に惡くなつても、我々は明らかに之を感覺しませぬから、惡臭の原因を尋ぬると云ふ念慮が少なくなります、丁度モルヒネを飲むと同じであります、モルヒネの人體に害のある事は皆さん御承知の通りであります、さども其が苦いから其苦味を感ずる爲に砂糖を澤山入れて飲む、さうするとモルヒネの味はしない、けれども身體に入つた以上は、モルヒネはモルヒネであるから、體中に入れば其毒を逞くしますから、モルヒネの味を砂糖が蔽つたと云ふても、その毒は依然消失しません、空中の臭も其通りですから、空中の臭を消す爲に香を焚えたり香水を撒いたりするのは面白くならそれよりは早く戸障子を開いて、新鮮なる戸外の空氣を導いて、室內の惡い空氣を出すが經濟でもあり

且つ手短でもあり、健康な仕方であります、甚だ不潔な事で憚かる譯でありますが、止むを得ずして申しますが、便所の臭を消す事であります、是は實に我々困難を致して居ります、随つて又色々な臭氣止だとか何とか申しまして種々の薬品がありますけれども、どれ一つとして完全に惡臭をば去るといふものはありませぬ、如何なる物でも十分に彼れをば無臭にするといふものはありませぬ、丁度今日の日本の有様では家の一部即ち座敷と申しても宜い、座敷の一部分に惡臭を放つ物をば貯へて置く、さうして一方ではあの臭を消さうと云ふて、色々の薬を入れたり又は掛けたりする、けれども惡臭のある汚物をば澤山家の中へ貯へて置いて、その臭氣を除く爲に騒いだとて何の役にも立たぬから、一番の近道は其汚物を除き去るのであります、けれども日本の状態では將來は出來やうと思ひますが、今日では到底行はれないのであります、夫故止むを得ませぬから、臭氣止でも掛けねばなりませぬが、無論これは不完全たるを免れませぬ、で色々の薬がありますが、一番安くて取扱い良く且つ臭氣を止めるものは矢張石灰であります、腸窒扶斯や赤痢の汚物を消毒するのに用ゐまする石灰、是は臭氣を止めるのにも効能があります、化學者の中で石灰は亞爾加里性の物であるから、汚物の溜つた所へ入れると安母尼亞が遊離すると云ふ事を恐れて居ります、汚物の澤山ある所へ石灰を入れますと、石灰の爲に外の物に結付いて居る安母尼亞が遊離する、で安母尼亞と石灰とは孰れも亞爾加里性なれども、安母尼亞よりは石灰の方が外の物と結付く力が多いから、安母尼亞の結付いたのを逐ひ遣つて自分が這入りますから、是までは安母尼亞の臭氣が空中に飛散して居らぬのが、石灰を入れた爲に空中に飛散して安母尼亞の臭氣を來すやうになる、斯ういふ事を云ふ化學者がありますが、それは多少安母尼亞を發生する事もあるが、是は揮發性のものであつて直ぐ無くなつて仕舞うから、あとは稍無臭の物になる、毎日適宜に石灰を撒きます

と、先づ大部分の臭氣を防ぐ事が出來ます、けれども一番困るのは汚物が便所の周圍に附着したり、或は臭氣止をば撒き惡い場所に附着して居る所であります、さういふ所に附いて居る時は、誠に掃除が仕惡い、さういふ所では始終汚物が分解して空氣を不潔にするから、便所の構造など善くしなければならぬ、便所の構造を消毒し易いやうにして臭氣止を入れ、ば大に臭氣を減ずる事が出來ます、通常の日本の便所では其は六ヶしい、で是は是までに致して深くは申しませぬ、が先づ十分に清潔法を致しまするには、汚物をば早く家の外だけで無く、東京なら東京の外に東京中の汚物を追拂つて仕舞うといふ方法を講じなければなりませぬ、それは如何するかと云ふと、是は參考の爲に皆さんに一言致して置く譯でありますが、歐羅巴の市街では、大いなる處は必ず下水が十分に出來て居りまして、下水に十分汚物が流れて行く、通常下水と云ひますと、我々の今日東京市街で目擊して居る溝渠のやうに考へて居りますが、さ

うでは無い、例へば、倫敦のお話をすると一番宜い、倫敦の下水は丁度東京の親規の水道のやうな仕組になつて居る、即ち地の下に鐵管を埋めて、一部分は又煉瓦で造つて居る處もあるが、總ての家から出る汚物が、僅か三十分も經ますと遠く五里も六里も流れて行きます、家々には各々汚物を受ける物が設けてあつて、其所から管を通つて市街の地中に埋沒してある鐵の管に入り、その管の末端はテームス河の畔にあつて、其所で色々な藥を交ぜて水分と固形物とに分けまして、水分は直ちに河水に流放し、固形物は蒸滊船へ積んでテームス河を下つて、海へ持つて行つて捨てる事になつて居ります、餘程これは金も掛り手數も掛つて居りますが、併し空氣と土地とを清潔にするには、斯る裝置をしなければ出來ないから行つて居るのであります、是は伯林でも巴里でも同じ仕組になつて居ります、たゞ市街の汚物をば處置する方法が違ふだけであります、家からして外へ出すだけ。手順は皆同じであります、今の倫敦の

如きは水と固形物と分けて、水は直ぐテームス河に放流します、固形物は船へ積んで太洋へ持つて行つて捨てる、伯林ではさうで無く、蒸氣力を用ゐポンプの働にて、東京で申しますると千住とか砂村とか云ふやうな所に鐵管を經て總ての汚物を導きます、この汚物は多量の水を混じて居りまして、鐵管を出で丶水田のやうな所にズット散らばる、毎日間斷なく晝夜とも汚物をば左様いふ場所へ放流します、さうすると水と交つた所の汚物は土地の面に止つて居りますけれども、水分は雨水の様に段々に土地を徹つて、深く地層にて濾過せられて、遂に流れて河となつてドン／＼流れ出て居ります、その水を見ますると、まるで無臭無色飲んでも宜い位になつて流れて居ります、それからして土地の表面にある汚物は其土地の肥しになる、數年の後には其所に烟草を植付けるとか、或は野菜を栽培して、此頃では大層な收穫があつて下水事業の費用をば補ふ事が出來る、全く償ふ事は出來ませぬが、大部分は補へるのであります、是は伯林に於ける汚物の所置で灌漑式と云ふのであるが、東京の仕組では誠に野蠻的のやり方で、迚もあれでは清潔にし或は無臭にする事は出來ませぬ、隨つて空氣を清潔にするといふ事は出來ない、せめて倫敦や伯林の半分でも、或は十分の一でも宜いから相當の費用を支出して何とか方法を設けたら宜からうと考へて居ります、尤も今日では東京市役所にそれを調査する人が出來て居りまして、調査して居らる丶さうでありますから、早晩着手せらる丶事であらうと思ひます、そして夫が出來上つた曉には市民の幸福は實に測り知るべからざるものとなるのであります、尚ほ之に次で述ぶべき事は澤山にあるのでありますが、餘り長くなりますから、後日機を見てお咄する事に致しませう。



歐米流生花裝飾術

米國生花裝飾師　飯島誠也

何事も處變れば品化ると云ふやうに、我國でさへも浪華の蘆は伊勢の濱荻といふ位であるから、況して千百里も隔つる歐米と我國では、その風俗に於て將習慣に於て凡ての點に於て相違があるのであるが、その相違も大體の事なればチヨツト皮想を見たばかりでも解かるものだが、微細な事になると僅か一年や半年彼地へ行つて居たからとて容易に知らるゝものでは無い、殊に風俗習慣の大部分は妙な所に潜んで居るものであるから、餘程緻密なる觀察を下さなければ知る事は出來ない、彼地に居てさへ左樣であるから、迚も數千百里の遠きを隔てた我國に居ながら全然之を知らうとする事は固より不可能の事に屬するのみならず、動もすれば、往々滑稽な事を演ずる位なら尚だしもであるが、時としては非常に彼等の感情を害し、延いては國際上にも影響を及ぼすやうな事柄を惹起なさいとも限らない、併し之は其樣な大業には爲らなかつたが、早い咄が先頃米國の大西洋艦隊が廻航した時に、東京の某有名なる大商店では之を歡迎する爲に、花環の中に艦隊を包みたる裝飾をしたので、之を見たる水兵等は非常に激昂したのであるが、それも無理からぬ事で、一體花環といふものは葬儀の時に限つて米國では用うるの習慣であるから、それに慣れたる眼から見たならば腹を立つのも尤もだが、併し此方で飾つた方とて別に惡意があつて仕たと云ふ譯では無く、實は大いに喜んで貰はうと思つて仕た事が、その風俗習慣等を知らないが爲に斯ういふ失策を招いだのである、併し其は知らないで仕た事であるから餘儀ないと云へば言ふもの丶、今や萬國交通の頻繁なるに方りて、年々我國に渡來せらるゝ外客の數は、實に萬を以て數ふるやうになつたにも拘はらず、之を歡待するに方りて前陳のやうな失策の無いやうに致したい、と望は屬するもの丶、未だ我國には之を專門に敎ゆる

處が無い、否、教ゆる其人が無い、さういふと高慢らしいが、斯術を米國で專攻して來たものは私のみで外には一人も無い、何うか一日も早く斯術を普及せしめて、而して外人の嗤笑を招がないやうにしたいと思ふので、特に本誌の讀者に向つて聊か玆に其端緒をお話するのである。

　この歐米流生花裝飾術といふのは却々範圍が廣いので、室內の裝飾は勿論、冠婚葬祭は申すに及ばずその他送迎、夜會、或は贈答等に至るまで之を用うるのであつて、その使用の途によりて花籠もあれば花束もあり、若くは花環もある、先づ最初には

　目出度婚禮に用うるもの

を云へば、この時には二品拵へなければならぬ、例へば、薔薇で云つて見れば一方は白薔薇となし、他の一方はピンク即ち淡紅で、俗に櫻色と云つたやうな色氣のものに限る事となつて居る、而してピンクの方は花束とするのであるが、白の方は左樣でない、花梗すなはち蘂の所から約そ一寸五分乃至二寸程の長さに切りたるものを、スパラグラス約そ二尺五六寸の長さのもの、間隔を程好く見計ひて白薔薇を配置し、尙は其間にメーデングヘーヤを添へたるもの凡そ四條程を造り、その上よりヴエールを掛け、下の方は同じ色のリボンにて縛り、その餘三尺ばかりを垂れしむるので、之は左の肱の曲り目に掛けるのである。

　次に夜會の時には

如何なる事を爲るかと云ふに、米國では日本のやうに衣服の着替を澤山持つて居るといふ事よりも、夜會の席に臨むときは、オカッ即ち西洋蘭の花を澤山に着けて出るのを貴ぶの風習となつて居る、大抵の婦人は五箇位づゝ着けて出るが、之が却々高價で一箇が三圓程するのである、そして其拵方はオカッを花の下で縛り、之に尙はメーデングヘーヤを交へて再び下で縛りたる後、その上に厚き銀紙を卷附けたものを左の乳の上の邊へ三寸ばかりの頭に球のあるピンで插すのであるが、その插方にも良人のある者

は上へ向けて挿し、未婚の者は下へ向けて挿す事となつて居る。

次に贈答に用ゐるものは丁度我國で菓子折を持つて行くやうなもので、四季折々の花を箱に詰めて持つてゆくのである。

それから葬儀に用ゐるもの、形はリース即ち眞圓のものもあれば、或はピロ即ち西洋枕の形をしたものもある、その他十字架形や電柱形やハート形等もある、併し海軍の軍人が亡くなつた時にはアンコーア即ち錨形に大抵は限られて居る、そして孰れも夫等を花で飾るのであるが、小供には白色、若い者にはピンク、老人にはブラウン即ち鳶色の花を用ゐねばならぬ定となつて居るから、その花の色を見て直ちに死者の年配が察せらるゝのである。

次て室内装飾は如何といふに、これには重に木の葉やメーデンヘーヤや又は日本の榊のやうな類を使つて、その間の諸所に花を挿入れるのであるが、時としては花環のやうに圓く木の葉にて作り、その下端をリボンにて縛り、その結び餘りたる部分を左右各々上方に向つて絡み更にリボンの結び目の兩方に造花數個づゝを扱らつた拵方もある、これは室内四ヶ所位に下げるのであるが、米國では國旗の色に因みて縛るけれども、我國では白地に日の丸だから、矢張赤と白のリボンが似附くだらうと考へる、この装飾に用ゐる木の葉は、之に藥液を施せば一週間以上二週間も保つものであるが、左様で無くとも三日や四日で容易に枯れるものでは無い。

最後に之はチヨット飛離れたやうだが、凡て歐米では馬の蹄形を喜ぶので、これは幸福が向いて來るといふ説記から、萬一途中で之を拾はうものなら、大切に持返つて軒端に之を打付けて置く程であるから、我國などでも何か商業の開店とか何とか云ふ目出度時に此の形を飾るのも妙であると思ふ。

餘り説明が簡に過ぎて或は要領を得られないかも

知らないが、元より今は其大體に通じてさへ居て貰へば、前に云つたやうな失策を招ぐ事はあるまいと思ふからの婆心に出でたものであれば、尚は各個に就て詳細なる事は機を見て說明を試むる事として今回は之で筆を擱くことゝする。

先づ手の人となれ

大島庄次

昔からの言傳で、云ふ事は三尺の童子も易く、行ふ事は八十の老翁も尙は難しとすとあるが如く、何事も口の頭でならば、孟子では無いが、泰山を片脇に搔込で而して北海を飛超える位は朝食前の仕事であると、雑作なく口では言へるもの丶、偖實際となると轉んだ箸をも起すのは太儀だと云ふ方が世の中には多數を占めて居るのであるが、其樣な事で一等の國民だ、二十世紀の女子であると肩で風を切つて歩かれては、實に顰蹙の至りに堪へぬ次第と云はねばならぬ。

明治以後我國の女子は大に門戸を開放せられて、最早昔時のやうに深窓の底に鎖ざる丶と云ふ事は無くして、東西南北己がまに〳〵濶歩する事が出來るやうになつたのであるから、充分社會の一員として活動して貰はなければならぬので、それが爲には當者は勿論、世の有志識者は之が常識を發達せしめなければならぬと云ふので、即ち盛んに女子の敎育といふ事を唱導した爲に、幸ひ今では山村水角の兒女に至るまで、概ね眼に一丁字も無いものは無いと云ふまでに普及し進歩したのであるが、これ全く聖代の賜物として最も慶ぶべき事であると共に、その半面に於て甚だ憂ふべき濁流が横溢して居る事を認めざるを得ないとは豈と浩歎すべき事では有まいか。

人生字を知る憂患の初と云つたが、固より人として文字を知らなかつたならば此上の不自由はあるまい、けれども憖じ生中之を覺えた爲に不幸を釀した實例も是まで尠なく無

い、斯く云へば文字は頗ぶる我々に害を及ぼすもののやうに考へらるゝが、決して左樣では無い。

文字其物には毫も罪は無いので、之に使はるゝ人が善くないのである、文字は死物ではないか、之に反じて、我々人類は活物では無いか、その活物たる人類が死物たる文字に遣はれるとは、なんと意氣地の無い咄ではあるまいか。

私は往年地方の者が女連で東京見物に出掛けて來た節に、今は無くなつたが京橋の袂に松田といふ安直な料理屋があつた、田舍の人は是非之に登つて見なければ郷里への土產話に不足を感ずるやうに思つて、例の女連は四五人の同志で松田へ入ると、種々料理の品數を記した塗板を女中が運んで來て、御誂へはと聞かれたが、生憎其四五人の連中が謂ゆる明盲で何だか薩張と分らない、併し田舍者と見らるゝの殘念さに蒲燒の丼を注文に及ぶと、松田では出來ませんと斷られた氣量の惡さに、今度は上等の親子と云ふと、是もまた一も二も無く落第したので、最後には煮豆で支度を整へて出て來たと云ふ實話を耳にした事があるが、是等は全く文字を知らなかつた爲の失敗談で、聊か氣の毒の感じが仕ないでも無いが、また多少落語にでもありさうな滑稽趣味を帶びて居つて、寧ろ罪のない方に屬するのであるが、前にも云へるが如く、僅かに文字を知つた爲に、之を惡用したり、或は之に使はれて女子にあられも無い空想を描いて自ら煩悶懊惱して、その極人まで煩はすやうな女子が當時は殖えて來る傾が多いやうに見える。

是の故に初め女子敎育に左袒した有志或は識者と云はるゝ人々も、實は案外の結果を將來した、斯ういふ豫期では無かつたのだがと云ふ風で、衷心頗る戚々たる有樣であるやうに思はるゝが、凡て物の過度時代といふものは、甲に偏しなければ乙に傾きたがるのは止むを得ない趨勢のやうだが、恰かも怯懦な犬に蝮を矢鱈に吳れたやうに、

女子に授けた學科の勢分が强過ぎた

のではあるまいか、乃で一時に氣ばかり強くなつて、親でも姑でゝ或は良人でも先生でも、少し理屈が合はない時は恕するとしても、何か自分の感情に激した事でもあると、殆んど狼のやうに誰彼の差別なく喰つて掛るゝといふ女性が出來たのではあるまいか、假令喰つて掛らないまでも、口頭の達者な事は到底明治以前の婦人に見る事は出來ない、昔からの諺に

口も八丁手も八丁

と云ふ事があるが、それは兎も角兩者が相當して居るのだから宜しいけれども、當時の女子は父兄が貴重の時間と金錢とを多量に費したにも拘はらず、手近い話が、裁縫一つ習つて來ても自家の雜巾一つ刺す役にも立たなければ、料理とても其通り、材料の無駄になる事や時間の潰れる事などは一向お構え無しといふ風で、何一つ家庭の補足になるといふ事は無い、それでも衛生が如何の家事經濟が斯うのと、口頭の講釋だけは兩親も三舍を避ける程なのであるが、如何にも手の方は之が半ばにも及ばない。

そこで近來世上の父兄は稍女子の敎育に對して疑を懷いて來たやうであるが、一體世の父兄たる者が學校に對する望が多過ぎるのと、一は學校そのものが十人十色と云ふが如く、同じ女子でも各自性能等を異にして居る者を用捨も無く畫一主義の鑄型で造り上げやうとすると同時に、我々の生活に緣遠き道中記のみを多量に授ける所から、畢竟手の人とならずして口の人となるのではあるまいか、尤も學校は何うしても口の人にする傾きの多いものであるから、家庭は宜しく之を手の人にするやうに導かねばならぬ、而かも今日のやうに家庭も學校も共に口の人に導く事が多いやうでは、啻に其者の不幸のみでは無い、延いて國家の不幸である、斯く云へばとて靑年の諸孃は決して之れを人事と思ふてはならぬ、今より省みて直ちに手の人とならねばならぬのである。

洋服着用の心得

丁酉女史

一體我國の御婦人方にお話をすることは困難な事である、何故と云ふに、吾が國の事をお話すれば如何にも自慢するやうに當り、又不謙遜なる如く見ゆるのである、又之れに反して、他の國の事をお話するのは大變失禮な樣に思はれる、何故かと云ふに、其國のお方は他國から來たものよりは其國の事情にはよく通じてお在になる譯であるからでございます夫れでございますから、今私が玆に立つて皆樣にお話いたしますのは大變面倒な、且つ困つた位置であると云ふことを御承知願ひ度ふございます。

私は今日本のお國と自分の國と比較を致してお話いたしませうが、私共の國に古い諺があります、それは「比較と云ふことは何時でも見惡い」と云ふ事でございます。

全體私共の國では學校を卒業した先生が此事につ

いて小供達に教ゆべきものとして居ります、又學校で其お稽古をしなかつた人……若い御婦人や婚禮をした所の人達はあとで舞踏學校で其稽古をすることが出來ます、それはあなた方のお國では禮法教場と云ふやうな所でございませう。

日本のお方が私共の衣服を着たり、靴を穿いたりなさる時には始めは何となく心持惡るいやうに感じられる、それはあなた方の衣服を私共が着ると矢張り何となく工合が惡るく思はれると同じことであらうと思ふ、夫れで何故あなた方が洋服を着ると不愉快で且つ不似合であるかと云ふことについてお話したいと思ひます、而して猶其れに一二の他のお話をいたしたいと思ひます、而し此お話は餘り淡白無頓着であるとお思ひになる方もございませうか、どうぞそれはお許しを願ひたい、あなた方が常に多くお出合に成る所の外國人の內過半は、今私が皆樣にお話をしやうとして居る所の稽古をしたことのない人でございます、それ故丁度貴女方がお困りになつて

おいでになると同じ樣な感じを持つて居る人達が多くございます、勿論其着方を知らぬ人達が着ましたならば、心持よくも恰好好くも着られないのは通例でございます。

あなた方はお分りに成りませう、私共があなた方の衣服を着た時、どんな恰好惡く見えませうが、幸ひに私共は着ても家内だけで屋外に出ませぬから分らぬのでございます。

又あなた方も御覧になりませう、毎年新たに入營した計りの新兵が着て居る軍服よりも近衛兵が着て居る軍服の方が似合つて居ると云ふことを、夫れは即ち近衛兵は永く着馴れて居るし、新兵は馴れないからである。

先づ第一に立つ事

についてお話いたしますが、あなた方の立ち方と私共の立ち方とは反對でございます、あなた方のお召物を着て恰好よく見えるには屈まると云ふことでございませうと思ひます、又私共の衣服で着心善く

着て且つ恰好良く歩るくには胸をむかふの方へつき出す樣にすることでございます。

もしもあなた方が外國の着物を着て恰好よく見えて居るのを御覧に成つたら、今私がお話しします處の條件を守つて居ると云ふことを御承知になるでございませう、けれ共男子方は洋服に成らぬ前から起居の樣が御婦人方とは違うから、洋服を着ても變化が困難でないだらうと思ひます、夫れから又男子は洋服になつても立ち方や歩き方が善く分らんから容易でございます、私は此事があなた方によくお分りになるやうにするには淡白に、而うして極く單純にお話する事が第一だらうと思ひますから、凡べて而う云ふ風にお話いたします、それですから失禮の事があるかも知れませぬが夫はお許しを願ひます、而うして私は又自身のからだで説明を致し度と思ひます一寸あなた方が小さい女の子供に洋服を着せて茲に立せるか又は誰れか洋服を着て居る方がテーブルの上に立つて下さるならば此事柄をよくする事が出來

るかと思ひます、第一は立つと云ふ事の稽古、次に歩き方、夫れから呼吸をすることの稽古、それから座る事の稽古でございます、之等の事を一々お話いたしたならばあなた方が吾々の着物を着ました時不愉快と云ふやうなことは無くなるだらうと思ひます。

又余り短い靴を穿いたならば、誰でもよく歩くことも立つ事も出來ませぬ、勿論餘り狹い靴や、余り高い靴や、又餘り小さい踵の付いた靴は善く歩く事も立つ事も出來ませぬ、けれども私は日本で見ます靴の中で、大變短く又大變小さくないのは珍らしいと思ひます。

全體日本の靴の製作人は誤解して居るのであります、短い靴は足を小さく見せると思ふのは間違ひでございます、短い靴は決して脚を小さくも短くも又恰好よくも見せませぬ、只不恰好に見せる計りでございます、而うして第一に足を痛くいたします、足の先に行詰まつたやうな感じのする所の小さい靴を穿いて、誰でも恰好よく歩

けるものではありませぬ、私共の國の靴は、長くして且つ廣うございます、夫故丁度日本の足袋のやうな心持がいたします、何故と云ふに、私が自分に靴を穿いたり、下駄を穿いたりしても、穿きかへたのに心着かない位です、で短い靴を穿いたら私は一哩も歩きませぬ内に脚が痛くなります、夫から皆様が適當な靴をお穿きになりましたらば、猶其上に注意すべきことは、

足を外方に向ける事

夫から膝頭を固くして整然と立つて前方に屈まないこと、次は腰部を後方に出して胸を先方に出すことでございます、私共の國では學校の教師が程よく立つて歩いたりしない所の子供には教授することを許さぬ、若し不恰好にして歩行いて這入つて來る生徒があると、何遍でも家に送りかへして了ひます、而うしてゐる内にはそれが段々習慣になつて、人並外れた白痴か又は餘程の不注意ものでなければ、直ぐ普通に歩くやうになります、それから洋服を着て

恰好よく見せるのには固いコルセットをしなければならぬと思ふことは間違でございます、大變奇麗に洋服を着、又恰好の良い貴婦人達は少しも締めて居りませぬ、只着物の合ふやうに拵へる斗りでございます、其れから後には此婦人達は自分が恰好の惡るくなりませぬやうに身體の持ち工合を注意するのでございます、けれ共外國の婦人は年を老ると大變身體が大きくなりますから、而う云ふ人は用ひることもございますけれども、あなた方は決して必要はないと思ひます、もしコルセットを用ひますなら大變短い緩いのがよろしうございます、それは只帶と呼ばれて居ります。

それから必要なことは長い靴を穿くことがございます、少なくとも半インチ足の先から出て居ないといけませぬ、而して又余り狹くてはいけませぬ、つまり洋服を着てよく見えるやうにするには、今私がお話いたした簡單な二三點を記憶なさればそれで充分でございます、

それからモウ一つは足を外に開き膝をまへに屈めて固く立つ事

腰をすこし後にして胸を張り出すことゝ夫れから頭部の恰好のよいやうに自然に持つと云ふ事でございます、之等は只小さい事柄でございますけれ共、洋服を着て恰好を良く見せると云ふ事については大變關係のある事柄でございます、此事に就て或立派な地位の有方で長く外國に居られた奧樣に教へて上ましたら、其後は其方が洋服を着ますと何處の西洋婦人かと思ふやうに成つてワシントン中のどの婦人と比べても劣らぬやうになりました、で此第一の土臺と成る點をよく記憶しなかつたならば、世界中の婦人はよく立ち恰好よく見え、心持ちよく洋服を着る事は出來ませぬ、これ丈の事柄が即ち洋服を着るについての凡ての事柄の鍵でございますから、此鍵がなくしては決して容子のよい即ち美容と云ふ事の戸は明きませぬ。

寫眞の撮方

伊藤雲峯

私は元來家傳の醫業を修める積りで京都第三高等學校へ入學しましたが、性來の體格は終に之を許さぬので、兼て慰み半分に覺えた寫眞の研究と云ふ方面に轉じました、寫眞と申しても一科の專門學であるから、どうせ始めるなら本氣に正則で研鑽せむと思立つて米國に渡つたのである。

イリノキス大學

外國の寫眞屋で内弟子的修業の上歸朝して開業しつゝあるものは珍らしくないから、專門學校に入學せんと聞合はした結果イリノキス寫眞大學校へ參ることになりました、斯大學は去る二十六年の創立で、米國に大學の設立あるは此校のみであるから生徒も數百人あり英、獨、佛、露の諸外國より遠く來つて學ぶ人々もあり、日本人では私共で僅に三人でした、校則として月謝百弗を前拂ひするのみ、其外は日々

研究する材料に金を要するので、卒業には期限なく、校長の眼鏡次第で何時でも卒業證書を得らるゝのである。

各科の教授

校長がビッセル氏、教頭がマンバー氏で、教授科目は撮影、現像、修整、カーボン、透明陶畫、燒付仕上の六科で之に各々一人以上の專門教師がある。

其教授法の一端と云ふと

撮影科であるなら生徒互に被撮者のモデルとなり位置の安排、光線の採抉より機械の配置に至るまで研究し、其上にて先生の指揮を待つので、教師は一々之に可否の論評を加へ、被撮者の姿勢から、寫す間の程度に就て迄萬端教授するのである。

又現像科の暗室は本校の建物全體の地下に設けられ、五十人位の生徒を收容することが出來る。而して瓦斯で明を取り、周圍に流しあり、生徒が現像液の調和するのと先生が見廻りて實地の講義をする。其他の各科も右同樣で實際の教を受くるのである。

ある、此等は當人自ら出來るなら格別、然らざる以上は萬事寫眞師に托して顔も姿も言ふなり次第に委

顔容の注意

撮影する人の最も注意すべきは顔容姿勢の如何で、苦い顔をした無間な姿では甚だ面白くないのみか、御當人も他人も見て不快を感ずるから注意が肝腎で



せるがよい、此イリノキス大學でも此顏容姿勢の研究が中々八釜しく、天性苦虫を食潰した樣な人にも撮影の際、或手段でニコヤカな笑顏に直させるので、ムッとした顏付には是非とも笑まするがよい。

姿勢の用意

人には各々特色があり、姿勢容貌の揃つた申し分のないものは稀れで、圓顏もあれば面長もあり、種々雜多な特色を帶ぶるが世の多數であるから、撮影するには、此特色を成るべく見苦しからしめぬ樣注意せねばならぬ。譬へば、圓顏の人は橫向きに撮るがよい、ナゼならば圓顏を正面に撮ると牡丹餅然たる姿となるから妙でない、又頰骨の張つた人は之と反對に眞向きになると見よくなる、顏骨の突起し頰のコケた人は其突起の爲めにコケた所が愈々ヘコンで見えるから、斯る場合には光線を下より取る必要がある譯で、要するに、橫向きは鼻の高い人に適し、低い鼻を橫向きに撮ると、益々其本領が現はれてペシャンコとなるので、萬事此釣合を忘れぬ樣心掛けねばならぬのである。又顏の長い人は洋服ならハイカラを着け、和服なら拔衣紋にならぬ樣に用心する。

婦人の用心

婦人は兎角手を隱す風がある、これは手を出すと大きくなると云ふを氣遣ふので、袖を態々前へ持つて來て之をよい隱れ場所に兩手を入れるが普通の樣であるが、何もそんなに苦しんでお薩か豌豆を隱して居るかの如く思はれなくても宜しいので、唯其手を膝なり何所へなりペタリと着けてさへ居れば善いので、決してソンナに氣を揉むには當らない。

逆光線と輪廓光線

寫眞は、此光線の變化により種々の現象を見るので、順光線とは、面部の過半が光線を受けて小半部が影となり、逆光線は之と反對である、輪廓光線とは、顏の廻りや全體の廻りにグルリと光線を取るもので、丁度お釋迦樣の樣に顏を中心として眞丸るく輪廓を畫く樣なもので、一種風變りな現象である。



「御母様おさきに」

と、年も同年位、衣服もお揃ひの、飛白の筒袖着たる、七八人の子供が居並びて、挨拶をすれば、さも満足な面をむけて、莞爾やかに、

「さあ〳〵お休みなさい、君さんはお薬をとりかへて貰つたの？」

と頭を繃帯して居る一番幼きに言へば、

「ハイ先程、姥さんに。」

と何となく恥かし氣に、我にも禮をして出で行きし後、

「美恵さん、彼は皆孤兒？可愛らしいのも居るけれど、一番はしに居たのなんて、何だか、固意地らしいのね。」

と我は問へば、

「孤兒計りと云ふわけでもないのよ。二人計しは兩親が有るんですけれども、不完全な家庭だから貰つて來たの。」

「さう、斯麼にしてると、矢張り可愛いゝでせうね。」

「そりや貴女、もう〳〵可愛ゆくてたまらない樣よ。幾萬の寶にも優ると思ひますわ。それに自分の境遇が境遇ですから。」

と在學の折より心に深く感動する時の癖として、友の間に注意せられし眉根を寄せて、唇少し顫はしぬ。

「でもね、あなたは此節大變顏色がよくなつて丈夫さうよ。神經質らしい處も、なくなつた樣ですわ。」

「さう？心に平和と喜びが滿ちてるんですもの。」

とほのかなる微笑を見せて、正面に向けし顏の、十八九の折よりも、却つて美くしうなりぬ。凄き迄、蒼白かりし皮膚の、少し赤味を帶び、凹みし眼の涼しう張りて、細く高かりし鼻の肉つき優しう、美と云ふよりも淋しみに勝ちし水仙の花は、いつしか海紅の薔薇と變りぬ。我はふと思ひ出して、言葉を續け、

「涙も大方枯れて了つたでせう？美惠さん。」

「枯れましたとも、絶えて久しく泣く事なんぞ、ありやしませんもの。其れにあれ丈の子供の母ぢやありませんか、めそ〳〵泣いても居られませんわ。」

「然うでせうね。一體什麼風の家庭から、彼の兒女等は引取つたんです？」

「種々よ。孤兒が三人に、貧兒が二人。それから一人は私生兒よ。お父樣と云ふ人は立派な人で、隨分聞えた方なの、そら私等と同級に被居した、勝田樣のお父樣ね、あの方なの。先方に引とると言つたのを女親が手離さないで、やう〳〵貰ひきりに貰つたんださうですが、此間、その母親も亡くなりましたので、

妙な手業から私が引どる事になつたの。皆不健全な家庭に育つて來た子供計しだから、大概、固意地、ふてひねくれものなのでもね此處に二三ヶ月も居ると、効果が見えて、可愛らしい、人慕つこい子になりますよ、世間の人は本を忘れて末を責めるとでも言ふんでせうか、子供を、ひねくれ者にした事を忘れて、やれ、ひねくれ者よ、拗者よと云ふぢやありませんか。ねえ秋様、私なんかも能くさう思ひましたわ、散々社會に反抗して、ひねくれて、拗ねて、世に背いて、やりませうと。そしてこの性質が私のあらゆる不幸の根元となつてるんだ、と思ひついてから、自分と同じ様な境遇に育つ子供を救つて、幸な人にしてやり度い、輝きの方面を見せてやり度い、と、から思ひ立つたのが今の七人の母様よ。今ぢや私も子供に敎へられて、すなはな優しい母となりましたの。」

「美恵様、一郎様は、その後如何遊ばして？」

と我が問へば、眉根よせて、唇少し動きしが、

「秋様、その事は、もう私には要なき過去よ。御覧なさい、もう、斯麼……やすみませうね。」

と、置時計、指して立上りしが、彼方へ向きて窓に寄りぬ。由なき事言ひ出して彼が古傷痛めつるよ、とあやまらんにもつぎはなくて、

「夏の夜は更け易い事、もう十一時ね。眞個に此處いらは靜かで景色がよくつていゝのね。この様な處で、一夏を過ですかと、私、嬉しくて〳〵仕様がないわ。」

答へはなくて、さし招くに、我も並びて佇めば、向ふの森も、田も、林も、皆薄墨の一色に、まばらなる家の垣根の、白き花のみ月の光に映えて、閑寂、幽靜、平和の夜、之ぞ我がこの夏を此の山里に過ごす可く友の家を訪ひし、初めの夜の事なりき。

其より幾日かの後の事なりき。徒然なるまゝ友の書齋を訪へば、机に向ひて筆走らせつ。

『美恵様！何を書いてるの？小説？』

と問へば、

『いゝえ、其麼ものぢや有りません。私が小さい時からの事を思ひ出して、書いて見ようと思ふんだけれど筆が澁つて思ふまゝに書けないの。』

と言はるゝにぞ、よくも根氣が續く事よと、訝れば机の上の美くしきカードを指されて、私の生命、私の主義と、微笑まるゝに、げに愛と活動、斯くてこそ〳〵と打首肯れぬ。四邊、靜かに人皆眠りし夜半など、起き上りて、床の上に涙を流して、祈らるゝ言葉の、低けれども、其の中の數句はもれ聞えて、貴とく淸き、その人の心に打たれて、忍び音に泣きしも幾夜。夜毎必らず目醒めて其の祈りをもれきくを、上もなき樂しみに、天使の囁きとぞ聞きける。艱難は人を玉にすとの言葉にもれず、この人の高潔なる心も、皆惱みに勝ち得し賜物にぞ。波瀾多かりし今迄の生涯「ひねくれ者」と題せる過去の日記の節々摘みて、平凡なる我が敎訓にと、日曜の午後友の許しを得て寫しとりつ。今其をこゝに。

* * * * * * * * * * * * *

十才の折の、人には大方母様父様在はせど、我には母様もなく父様もなく、御祖母さま叔父さま叔母さま在はすのみ。赤坂の叔母様は何となう、母様の樣なる心地して、偶々の御訪づれも嬉しく、玄關に其の人の聲する時は何を措きてもかけ出して、叔母様、今日は御泊り？と問ひ、御歸りの時は何となう名殘の惜まれて、送りもせで打泣くが例なり。然れども不思議なるは折々の叔母様の御樣子よ。懷かしがりて親しめば、顏色凄く唇とぢて、言葉もなく、果ては、「御身を見るもいや、何故此世には生れ出でたるぞ」と蝮の樣にい

やがり給ひて、突離し給ふ事もあり。僅かの過に縮み上る計り叱り罵り給ふ事もあれど、如何なる故か倘懸しく、なつかしく、一月逢はねば悲しかりき。

或時、御祖母様に叱られて、赤坂の叔母様、戀しう思ひ入る折も折、其の人の訪れしに、言葉もなくて泣き伏しぬ。

『美恵さん、赤坂の叔母様處へ行き度かないの。』

つて抱き上げ給ひて、

『でもこゝの方が立派だし、御祖母様や、叔母様は可愛がつて下さるし、それに八重様等の御友立は有し余程こゝがいゝでせう。』

と言はるゝに

『いゝえ、御祖母様だつて、誰だつて些も美さんを、可愛がつてや呉れないんですもの、……叔母様！何故美さんには父様も母様もないんでせう？』

と日頃の疑問を打明けし時、

『美恵様、あんたは父様や、母様がほしいの？』

つて涙がはら〳〵と流るゝのを拭もしないで、

『この叔母様はね、美ちやんが一等好きよ。いつも〳〵美さんの事計し考へて……』

後の言葉は聞えず咽び給ひぬ。

『でも叔母様は一郎様や潔さんの御母様だわ。美さんは獨りぼつちよ。』

としんから心細がれば、叔母様は私の頬に御自分の濕れたる頬をひたとすりつけて、

『叔母様が母様になつて上るよ。然うしたらいゝでせう？え？美さん。』
といたはり給ふ。あゝこの叔母様をよき母様としても、父様――父様には誰をかなす可き。
十二才の折の、八重様の美くしき洋傘求め給ひしに、我もほしくなりて、
『御祖母様、美恵にも、彼の様なのを。』
と乞へば、
『美恵のはまた今度ので充分です、小供の癖に、生意氣な、』
と叱り給ふ。母様とはあの様に優しきものか。父様とはあの様に何も彼も買つて下さるものか。私も父様が欲しい、母様が欲しい、と、八重さんが羨やましく、
『だつて八重さんのだつて私のよりか、まだ、よつぽどよかつたわ。』
と言へば傍へに在はせし御祖母様の、
『八重と美さんとは違ひますよ、私生兒の癖に。』
と微笑給ふ。私生兒とは何ならん、此度、赤坂の叔母様に伺つて見んと。部屋に入りて、しせいじ〳〵とひ返しぬ。其後、叔母様來り給ひし折、私生兒の意味尋ねしも、叔母様は打泣き給ふのみにて、答へ給はず、言ふて呉れな、との事にてやみぬ。
十五才。青山の女學院に、八重様と共に入りぬ。今は私生兒との意味も解し、誰言ふとなく我が身の上も聞き知りぬ。眞、赤坂の叔母様は母様にて在はせしなり。父なる人の上は委しく知らねど今は世に亡き人とのみ。嚴格なる祖父君の憤り一方ならず、一年計りは幽閉の身なりしを、赤坂の義叔父様、是非にとて二度目の妻に貰ひ給ひしが叔母様、否、母様の廿の年なりしと。あゝ我は恥かしき私生兒よ。親身の祖母より、

祖父より賤しめらるゝ私生兒より、自覺せし一夜泣き明かしたる翌日より、口數少なく憂鬱の性と變り、情愛薄き家にあるよりもと寄宿に移りぬ。人が我を見て笑ひても、嘲けらるゝかと思ひ、母樣似の美くしき孃樣と讃められては腹立だしく我から世をせまくして、外へ出るさへ稀になり行く。

十七才。きさらぎの空曇りて、今にも六花散り布かんかと思はるゝ冷たき日、赤坂よりの車夫、走せ來りて、

「孃樣、只今直ぐに、御出で遊ばせ、御支度も、何も、いらぬ、唯々急ぎ給へ。」

と迫るに十日余り前より、心地すぐれ給はずと聞き居たる母樣の御容體覺束なしとや、と、思へばひた泣きに泣くのみにて、動きも得せぬと、秋子樣のとや、かくと心づけ、慰め給ひて、漸う〳〵車に乘りぬ。青山より氷川町までの、車輪の遲さ、やう〳〵着きて足許危うく御居間に通れば、

「美さん！」

と只一言、他の人々が心利かして次ぎの間へ退きし後、

「美さん、今度は到底駄目なれば、改めて申殘して置き度い事が……今迄は包んで居たれど、實はお前の母は私です。情けない思ひや、悲しい思ひをする時に、父母を恨んで、何故この樣な身にはと思ふでせう。でもね、私もどの位苦しんで、苦しみ拔いて、一生を終るのかしれない程だから、どうかこの母を恨んで下さるな。必らず、冥府で御身の行末を守つて居ます。どの樣な辛い事が有らうとも辛抱して母樣の跡を踏まない樣に、立派に婦人となつて下さいよ……。」

と御聲かすれて、呼吸苦し氣に、近く坐りて、惜別の涙絞り居給ふ。母樣には義理ある御子の一郎樣の御手を取りて、

『頼り少ない美恵を。』

と合せ給ふ御手のわななき。かくてせまる呼吸、別れがたなと咽せかへる我を殘して、永遠の世に去り給ひぬ纜放かれし小舟の如く、今日よりは、また、何處の波にさまよふ可き身か。

十九才の折。此年の春八重樣も、我も、普通科終へて家に歸る。何樂しみのある可き身かも。折ふしに罵り、嘲り、祖母樣も、叔父樣も、母の罪を思ひ給ひてこそ、我身憎しとも思ひ給はめ。其の人なき今、孤獨の我を哀れと思ひ給はぬか、祖母樣は流石に優しも折もなきにはあらねど、叔父樣母樣に心置かれてやと思はる。實に驚く計りの我が姓質の變化よ。是迄は、無理も無慈悲も忍び、耐へて、過ぎ來しも、この日頃の我は、余りと思へば叔父樣にとて用捨はなく言ひ返す事もあり。然ればぞ、皆樣の憎しみ倚增さりて、我と我が身に針うつ業と知れども、口惜しと思ふ折は、得堪へで、……皆樣のいましめ給ふ御心は、言葉に所作に現はれてしるければ我から身をひくう、何事にも引込み居るに、折々は、ひねくれたり、曲れりと人前をも憚らず落しめ給ふ事もあり。實に我はひねくれたり。愛きてふ事を知らで、育ちし直なる心の樣には非ざりき。然れどこの心の、底なし池の如く深く、大海の如く廣からねば、日每の冷たき仕打をいかで堪へ得ん。己が仕打は顧もせで唯我一人に聖人たれとの御心にや、我もこの世に、生れし一員、母の罪、父の罪の結果にもせよ。人に逆ひはなき筈ぞと、思へば口惜しさの念湧き立ちて、言ひ度き事は山程あれど、胸を押へて苦しむ辛らさ。母樣の御墓に行きて、訴へて、歸らじと心定めし事もあり。

廿三才。「持てる者は倚與へられ、持たぬ者は其の持てる物をも取らるらゝなり、」とは唯に信仰の上のみにはあらざる可し。この叔父樣叔母樣八重樣を一郎樣の奥樣にと、御望みなされ、赤坂の叔父樣も御承知なされしとか。承入なされぬは一郎樣御一人と、召使等の話に知りぬ。然ればぞ昨日、御目にかゝりし折、

常にもなく心細氣なる事を言ひ給ひしが、げに由もなき事を、思ひかけたるぞ一生のあやまり、我は世に容れられぬ私生兒なるを、と、痛切なる自覺の再現と捨てねばならぬ、愛を捨つるの、苦しさに、幾宵か泣きぬ。悶へぬ。狂ひぬ叔父樣母樣の前に、

『立派に思ひ捨てます。』

と誓ひて、やう〳〵八重樣を一郎樣の奥樣にはなしたれど、我が本心の苦悶もさとり給はず、恨みて、憤りて、半ば自棄に、半ば面あてに、結婚し給ひし一郎樣の御心の悲しさ！輕薄女よ、賣女よとの、あらゆるいやしみの御言葉も、甘んじて受けん。わゝ深き樣に見へても、淺さは殿方の御心か。叔父母樣、八重樣の勝利の歡びに引かへて、我は廿三のうらぶれの身、之よりぞ世のひねくれ者、世の憎まれ者を奇形の家庭より救ひ出して、身の限り、愛の限りをそゝぎて見ばや、と思ひ定めぬ。

* ※ ※ ※ ※ ※ * *

此處まで讀み來りて、美惠樣の前半世の、苦しさ悲しさ、斯くまでとは、思はざりし。いとしき御身よ、まだ過ぎたり、としも、思はれぬ廿三の、美くしき容姿を、獨捿と心定めて、七人の子等の母樣とは！假綴の原稿紙、下に置きて、友の身の上、思ひ惱める折、

『秋樣、まだ讀んでるの？つまらないでせう、何處まで？あら！、こゝまで、……這麽ものを見ちや、氣がくさるでせう、もう御よしなさいよ。』

と我より奪ひて、庭の方へ目をやり

『紫苑が大分咲いてね。一ッ花瓶にさして上ませう。』

と机の上の花瓶とりて、出で行きし友が姿の氣高さしそよ風吹きて窓かけ紗々と、高き想ひ胸に充ちぬ。

恐ろしの火事

中川愛氷

世に配所の月てふうれひなからましかば、火事ばかり心ゆくものはあらざるべし、おのれ先つ年有樂町の火事に類燒に逢ひける折『火柱になりてたちたる高どの〻、美しきこそあはれなりけれ』てふ腰折をものしたることあり、さるにてもおのれこの火事に因緣淺からず、有名なる大阪の新町火事にも、越前大野町全燒の折にも、その卷添を蒙りて驚かされたるが、殊に信州上田女學校の火災には、その一部行在所たりしをもて、事なか〱むづかしく、爲に校長矢野氏の自殺を見るに至り、おのれその校には關係なかりしも、この火災後の處置に就て、いさ〻か操觚者としての義務を盡したるが、はしなく災を招きて、さる俠客の義心により、僅に生命を全うするを得しほどの椿事を惹起したり、近くは一昨年の夏、わが家と背合せなる小學校より火起り、火の子

はわが家の中庭の時ならぬ兩國を演じ、家財を取出さん猶豫もなし、たゞ家人に怪我なきやうにと注意しつ〻、彼の棟に火うつれば戶外に出づべしなど云渡して、今は却つて心しづかに、燃えうつりゆく態を眺め居たるが、幸に何一つ持出す騷を見ずしてすみたることあり、いづれにしてもよそのを見るほどのものにあらず、方丈庵のあるじのいたく恐ろしがりしもさることなり、

さき頃より築地あたりに、幾度か火柱たち、鼠のあれ珍らしくなりたるは、やがて火にたゝらるゝ事あるべしなど噂しあへり、いつ孰れの處にも、かゝる噂はするものよと、たゞ一笑に聽流したりしが、

二月十八日の朝、おのれは我家より事務所に行く道すがら、電車路を本願寺前に出づれば、人の立騷ぐけしきたゞごとならず、この前夜おのれは珍らしく本誌の舊發行所なりし國光社に立より、わが社が新たに印刷所をしつらへるにつきて、何くれと語りあひ、國光社にては、この月は殊の外忙がしきもや

うにて、夜を日につげる騒ぎ一方ならざりしが、その社、間口一町にわたれる大建築も、夜の間に煙となりて、殆んど形もとゞめずなり、わづかに印刷器械の泰然と燒据りて、幾臺となく並べるが、座礁せる廢船と見ゆるもあはれ深く、おのれはあまりの慘狀に、車よりころげ落ちんとしたり、

火は午前三時より起り、八時頃には大方燒落ちたり、この社に籍を置く幾百人、電車の便あればとて遠きに住ふもの多ければ、駈付けて鎮火に加勢せしものその一部分に過ぎず、例のごとく春なれば花の咲けるものと思ひ、何ごゝろなく出勤して、昨日の椅子の今は跡方もなきに驚くもの多く、おのれもこの社を辭して既に半年あまりとなれど、空に指さしてあのあたりはわが禿筆を年久しく揮ひし所よと思へば、何とはなしに涙ぐまるゝなり、

火元は昔より我家よりと名乘るものあらねば、いづれをそれと定めかぬれど、これは兎かくは事なきに馴れて、心許せしより、事は起りても小さくですむべきものが、大きくなれるなり、盗まるゝ人に油斷ある譯なれば、少しの油斷、滿都の人を騒がせて一時なりとも幾百人をして途方にくれしむ、恐ろしきは火事よりも、その前の油斷なり、本誌の原稿も危くこの火災にかゝるべきを、事の行違ひが幸となりて、この號のかく發行されしは、大きなる禍の中に、いさゝかの幸にて、わが社にとりては大に眉のひらきし譯にて、國光社燒失の日、期したる如くわが社印刷部の起りしは、不思議の因縁ならずや、顧みれば十八年の久しき、本誌はこの國光社にて發行され、國光社といへば女鑑を聯想し、女鑑といへば國光社を聯想するごとく、國光社は女鑑發行によつて其名一しほ揚り、女鑑は國光社多年の丹精によりて、兎にも角にも婦人雜誌界に一頭角を現はすに至れり、然るにこの因縁極めて深き國光社の、一夜祝融氏に祟られて、たゞに歴史中のものとなれるに至つては、本誌として萬解の涙を注がざらんとするも得べけんや、

本誌と國光社との因緣斯の如く深く、本誌は依然國光社より發行さるゝものと思ふもの多きやうなる中に、おのれ個人としてもまた淺からざる關係を有せしこと、讀者諸孃の知らるゝ如くなれば、その燒跡を眺めては、たゞ夢の如く恍惚として、おのづから蜃氣樓も映出さるゝなり、

先つ年國光社のおのれにその編輯局の一椅子を與へられし時は、本誌はいつまでも國光社によつて發行さるゝものと思ふは當然なるも、まさかにおのれによつて經營さるべしとは夢にだも思はざりき、國光社と女鑑は殆んど同一体として、始終すべきものなりとは、衆目の齊しく見る所なりしも、一たびはその編輯を辭したるおのれが、極端にもその經營の任に當りたる、單に利害の關係よりいへば、國光社もその發行權をおのれに讓らざりしなるべく、予もまた決して受けざりしなり、今にして思へば、本誌は火難を免るべき運命をもちて、おのれの手に渡りしが、片々たるおのれは押せば倒れもすべし、大廈

高樓の陰に宿れば安心なるべき本誌が、却つてその陰を離れて、無事に發行さるゝこと、まづ不思議とも云ふべきものなるべし、

これまで常に火に祟られたるおのれ、こゝに火難を免れし本誌を讓受けたる、禍福これより一轉して本誌が立よる陰として、大に安心すべきほどのものとし、わが社は榮ふべきか、覺束なしとも思はず、自惚れるよとな思ひたまひぞ、

去ながらおのれは、わが手に本誌を出すやうなりてよりこのかた、必ずその初穗は國光社に持ゆきて何くれとその批評をもとめ、こたびの出來榮はよしこの表紙は、この口繪は、など、よきにつけ、あしきにつけ、その批評を此上なき樂としたりしが、今はその樂みを語るべき的としたる國光社の燒失せたる、これより永く本誌を出すにつけて、何となう物足らぬやうの心地す、

禍は常に不測に起る、禍をふせぐは德を積むにあるべし、扨も不德なるおのれ何によつて禍を防かむ



和歌兼題

桃花

東京帝國大學講師　佐々木信綱先生選

天

秋田保戸坐八丁　長谷川薫子

ほろ〳〵と緋桃花散る井のはたの苫路にしろき雛あそぶ

（評）緋桃と羽白き雛との配合、畫をみるやう也。うつくしき歌。

地

東京　中村千代子

笹船を浮べて遊ぶをさな子の桃の花ちる春の川岸

（評）無邪氣なる幼子の面は、桃の花のやうにうつくしかるべし。

人

東京神田美土代町三ノ十二　紀藤榮子

牛追ひて歸る童の影消えぬ桃の花咲く川添の道

（評）結句原作川添の家とあり。さては印象明らかならず。

秀逸

◎古里の庭の緋桃の花さかりむかしわすれぬ春の色かな　東京　青木たま

◎紫の霞のまくも匂ふ迄もゝの花咲く春の山畑　神戸　越川たけの

◎銀燭にひゝなの顔の照り添ひて壁にうつれる桃の影かな　常陸　岡田まん子

◎新墾の麥生かくれに雉子なきて磯野つゝきに桃の花さく　遠江　須部たまき

讀者文藝

◎つの笛や羊もろ子の牧場みち
春の日くれて桃の花ちる
飛驒 南みね子

◎土筆つむ少女やすらふ花のかげ
春風しづか白もゝの散る
伯耆 錦織千代子

◎雛百羽こゝと呼ばるゝ親鳥に
つきてめぐりぬ桃の花垣
越後 松永繁子

◎春の雨拵傘かざす山の家の
風呂にほろほろ桃の花ちる
東京 平塚白百合

◎はやり唄になやみて居ます友訪ふと
桃咲く村を二人して行く
横須賀 柏原美奈子

◎ちごの爲折りて來つらむ三日月夜
ひもゝ笑むなり山がづが宵に
名古屋 山根しげ子

◎我宿の園生の桃の咲きしより
下ゆく水もくれなゐにして
兵庫 梶原玉子

◎ゆく水もうすくれなゐにそまりつゝ
兵庫 梶原玉子

下てるばかり咲ける桃かな
三田ゆづる

◎しづの女のかざしの花になられけり
野中に匂ふもゝの一本
飛澤 浮洲綠子

◎棹さして下る小舟のみぎひだり
桃さきつゞく川添の村
信濃 沖村甲子

◎朧月夜煙は淡し賤がやの
垣根に咲ける白桃の花
埼玉 横田秋子

◎桃さくやひなのまつりのちかづきて
草のもちひをつくは誰子ぞ
横須賀 渡辺佐子

◎桃の花影暖くさす窓に
姉も妹も雛の衣縫ふ
岩代 岸野常子

◎春風や桃さく門に送りいでゝ
嫁ぎゆく姉を美くしと見ぬ
岩代 岸野菊子

◎桃林もゝの花ちる井の水を
汲みにとつどふ島乙女かな
下總 月冲さゆり

◎

なき妹が頰の色に似し桃の花
ま垣にちりぬ春逝く夕べ

甲

○　　　　相模　中島るい子
桃の花遠山里に咲きにけりかすみにあかき色のそふまで
○　　　　兵庫　稻田早苗子
桃の花さかりはいまたはやけれどのとけき春のいろそにほへる
○　　　　近江　杉村玉野
行く人の面もかはりて見ゆるなりくれなゐにほふ花の下道
○　　　　伯耆　錦織よし子
ひめもゝのさかりは過ぎぬしかはあれと君來ますまで花もちらさじ
○　　　　伯耆　錦織さち子
あたゝかき里川下るさゝ舟のしばしとまりぬ桃のちるかげ
○　　　　神戸　足立ゑい子
訪ふ人もなき山里の桃の花ひとり咲てやひとり散るらむ
○　　　　神戸　足立あさ子
餅酒をひさぐ田舍の片庇しうばが手植の桃ぞ咲ける
○
三千歳のよはひたもてと藐々かみそのに咲ける白桃のはな
○　　　　茨城　増田やい子
人しれぬ山ふところの一つ家に色そにほへるひめ桃の花

○　　　　伊豫　攝津玉枝
たが植ゑし尾上の桃かことしより神のみまへに笑ひそめけり
○　　　　磐城　木幡きよ子
桃咲きて杣の渡しもいと紫けく花に賑ふ谷かげの村
○　　　　東京　佐々木ヒサ
春の水淺く流るゝ谷川の石にしがらむ白もゝの花
○　　　　兵庫　梶原玉子
我宿の桃咲きしより木陰ゆく人のおもわもくれなゐにして
○　　　　兵庫　梶原玉子
紙雛に折りて手向けし桃の花うすくれなゐに咲きそめにけり
○　　　　秋田　三浦しや
旅ゆきてつかれやすむる山畑に夕日匂ひて桃の花咲く
○　　　　東京　森紫香子
くれなゐの桃の初花さきにけりかざしにせんと笑める少女子
○　　　　北海道　佐藤央子
こそまきしたねはいつしか妹のかさしに匂ふ桃の初花
○　　　　須磨　有村よし子
紫に山そかすみてたかとりのふもと一面桃の紅くも
○　　　　須磨　有村紫子
紫に山ぞかすみて紅のくもかと見ゆる桃の花その
○　　　　東京　水田ふみ子
桃の花さゝけてまつるひなかざりその世〳〵のさまそたかしき
○　　　　東京　倉重千惠子

一枝のもゝをひさきて行く稚兒を羽風ゆかしくてふのおひゆく

乙

○　　東京　藤山あき

少女子が祭れる雛に手向けたる心つくしの白桃の花

○　　須磨　有村紫芳

梅はちり櫻はまだし桃のはなひとり艶なり春のよそほひ

○　　須磨　有村紫子

桃のはな艶なるきみがほのいろによりてさきぬうすくれなゐに

○　　須磨　有村とみ子

みちすがらつくしつみつゝいさゆかんもゝの花さくもゝそのゝさと

○　　須磨　有村滋子

さくらには色こそおとれ桃の花實さへ結ひてはるのとかなる

○　　埼玉　横田やな子

少女子か桃咲きたりとうれしみて雛のまつりの日數かそへん

○　　武村よれ子

翁媼かむかし語れる繪日傘の小袖に桃の花のひら／＼

○　　東京　岩谷淺子

彌生には三千年までのかすよみに桃のさゝつきくまんとそ思ふ

○　　陸前　菊地とみゑ

さほひめもかすみをわけてながむらんわかもゝそのゝ花のいろ／＼

○　　陸前　菊地みさを

うつくしく花さく桃をたをりきていさかみひなにたむけますらん

○　　兵庫　木本石子

くれなゐの雲とまがひし遠方の桃はいつしか散り果てにけり

○　　神奈川　飯田榮子

緋もゝさくわらやれびくき家にきて花よめ見たりふり袖すがた

○　　佐賀　藤松りか

賤かやにまづれるひなは少なきもたなにあまれるひめ桃の花

○　　越後　松永松葉子

よそほひし林の桃の花は皆天つみほゝになつかしみ見る

○　　下野　井上尙子

故さとの妹につけたり咲そめしひもゝふうじて都の春を

○　　筑後　藤好多喜子

足引きの山の淺邊に枝たれて氣高く咲けり山人の桃

○　　東京　平塚いと子

汽車あれど菅笠わらじの旅もよし七堂伽藍桃の花さく

○　　名古屋　山根しげ子

江の村やうし引歸へる童の心なりせにひ桃ちるなり





和歌兼題

春の曙

貴族院議員
御歌所參候
子爵入江爲守先生選

天

名古屋市南武平町　山根しげ子

ゆくかりの影もおほろに久方の
そらまでかすむ春のあけほの

地

常陸土浦町八五〇　岡田まん子

春風に花の雪ちるみよしのゝ
霞も匂ふあけほのゝそら

人

神戸市山手通八丁目二七〇　越川たけの子

島山の松もほのかに見えそめて
浪路かすめる春のあけほの

佳調

◎

住の江の岸うつ浪ものどかにて
ほの〴〵かすむ春の曙

東京　青木たま子

◎

横雲のわたるさみえしやまの端の
花よりしらむ曙のそら

岩代　岸野常子

◎

ほの〴〵とかすめる空も美しく
梅が香かよふ春の曙

武村米子

◎

ほの〴〵としらむ山里みえそめて
花よりあくるはなのあけぼの

三田ゆづる子

讀者文壇

◎ほの〴〵と霞ばるゝやみよしのゝ
花よりあくる曙のそら　東京 紀藤榮子

◎をち方の山またやまはなしなへて
花になりゆく春の曙　東京 岩谷淺子

◎打けふる柳の枝にあり明の
月はかすみぬ曙のそら　伯耆 錦織千代子

◎霞うすくこく嶺の松原あけわたる
箱根の山の春の曙　秋田 長谷川薫子

甲

○ほの〴〵と霞の間より明けそめて花の香ふかき朝月夜哉　相摸 飯田榮子

○あさなきて霞の奥の海士のこゑ今日のふな路や長閑なるらむ　茨城 増田やい子

○しかすかに風また寒し梅園のにほひゆかしきはるの曙　東京 藤山あき子

○みよしのや花に白みし殘月の影ほのかなる春のあけぼの　東京 平塚白百合子

○殘月は麥の穂波浮ひて雲雀囀る野路の明ほの　横須賀 柏原美奈子

○山のはに花もかすみて月かけの梢にのこるはるのあけぼの　横須賀 渡邊比佐子

○花の雲今はとしらむ曙に鳥が音かよふ山際のさと　埼玉 横田やな子

○あけぼのゝなかより出つる天津日ににほひ初めけり花のみ山は　東京 水田ふみ子

○朝月夜かすみに消ゆるあけぼのゝ花の錦にしくものそなき　須磨 有政保子

○やまもとのをちの一村へたゝりぬかすみにけふる明ほのゝそら　北海道 佐藤央子

○すまの浦舟の帆かけも見えそめて濱にあけゆく春の曙　東京 三輪靜子

○けふりかとみし音の葉もかすみけり龍門の山のはるのあけぼの　神戸 足立あさ子

乙

○かれの音も霞渡りてほの〴〵と花よりしらむあけほのゝ空　兵庫 木本石子

○よもすがら物思して春の夜に心せかるゝあけほのゝころ　陸前 菊地みさを

○　兵庫　稲田早苗子
つり舟はかすみのうちに立こめてほの〲明くる淡路島山
○　飛騨　南　みれ子
沖遥や霞たな引そことなく花の香うくる曙の空
○　相模　中島るい子
有明の月の光りの消えあへで高嶺にあかし春の曙
○　佐賀　藤松りか子
島山はかすみわたりてしらみゆくなみまに見ゆるいざり火の影
○　須磨　有村紫芳子
紫のかすみたつなり鶯かひのみれほの〲とあくろしのゝめ
○　東京　倉重千恵子
里人はまた起きゐらし春ながらあかつき寒むき井戸に里みる
○　筑後　藤好多喜子
花の開さゝやく聲に起きみればおぼろに霞む春の曙
○　下野　井上尚子
庭とりのなく音のどかに薄かすみ里なゝこめる春のあけぼの
○　越後　松永紫子
乳のみ子が母のみ膝に夢さめてわらふににたる春のあけぼの
○　江見貞子
ほの〲と明け行く空をゆく雁の聲さへかすむ春の山里
○　伊豫　攝津玉枝子
おのづから月の名残りも白う見えてながめいやます春のあけぼの
○　東京　平塚いと子
霞もる浪の音もなき伊勢の海やかみ代ながらの春のあけぼの
○　下野　月沖さゆり
眞帆片帆霞こめたる大刀根を下り行くなり春のあしたを
○　名古屋　山根しげ子
船とまり夢かあらぬか曙のおぼろ〲の島山のかげ
○　越後　永松松葉子
紫にわらへる山はやさし音にかはとかたらふ春の曙
○　東京　佐々木ヒサ
たとへても言はむ方なし紫の横雲かゝるあけがたの山
○　磐城　木幡きよ子
過ぎしよの花の盛もめに見ゆる盖し吉野の春の曙
○　須磨　有村紫子
梅が枝にやどれる月のかげきえてしらむのきばに風かほるなり
○　兵庫、梶原玉子
遠山の霞の底に月おちて花より明くる東雲の空
○　横濱　鈴木まつ子
大そらも香の匂へるこゝちしてゆかしかれける春のあけぼの
○　森紫香子
をちの山薄紫に包まれてゆかしくにほふ春のあけぼの
○　岩代　岩野菊子
憂き事もしばしわすれて眺めけりのどかにかすむ曙の空
○　埼玉　横田秋子
山からすいまだ林に聲せぬか山さくら門は明んとそすそ

○
白なみの八重なる上の海士小舟まつみもそめぬはるのあけぼの
須磨　有村すま子

○
春風に花のおもかげ立初めて山も霞みて今朝は見ゆらん
神戸　綿本しづ子

○
たちこめうし霞のうちにほの〳〵としらみて見ゆる氏神の森
信濃　沖村甲子子

○
鐘のねも靜かになりて明がたの景色をそふる春のあけぼの
東京　中村千代子

○
ことのれも遠くきこえて須磨のうらなみぢしづけきあさぼらけかな
須磨　有村よし子

○
山のはの霞はあけに匂へともふもとの村はなほくらくして
臺灣　浮洲德子

○
またかすむれぐらの聲を尋ぬれば花よりしらむ春の曙
秋田　三浦しや子

○
紅に空はにほひて遠山の花に見わかぬ春のあけぼの
美作　鈴木綾子

○
風ほから嵐のうなりは野に高くかすみをやふる春のあけほの
伯耆　錦織よし子

○
此けしき何にたさへん一よし野の花に見添るあけぼのゝ空
神戸　足立ゑい子

○
はの〳〵とあけゆくそらやのきつとふかれにこほるゝ白梅のはな
須磨　有村とみ子

○
よひのまにふる春雨もばれそめて花上しらむあけほのゝそら
陸前　菊地とみ𛂁



日本女子大學教授　文學士鹽井雨江先生選

天

嫁ぐ夜

東京牛込區佐内坂町三七　平塚白百合子

今宵はもう私は此の家の者ではないのだと思ふと、いつもはうれしく見る雛かざりも、何んとなく淋しい、けれども、私の心を割つて見たら嬉しさとはづかしさと恐しさの密合だらう。三十分の餘裕を頂いたので、もうこれを限りの處女時代の名殘を惜まうと、銀燭おぼろの雛壇に向つて、今更ながら見上げると、金屏にかこまれて綾の袖美しう重ねた大内裏雛は、供へられた白酒に醉うたのであらう、うまいしてゐるらしい。五人囃も音を絶

えて、衛士の守るばかり、此處桃のご殿は、しづかに更けてゆくのである。

私はヂッと晴裝の振袖を膝に重ねて、見上げ見下したが。目は吸ひよせられたやう、京人形に止まつた。指折りかぞへると、もう十三年前、京の土產にと父上が買うて、此の雛壇にかざられたが、あゝ、まるで夢のやうである。

桃の花さく背戶の菜畑に、絵日傘さして、此の人形を背に子守唄うたうた事、秋の彼岸詣に、お寺へ連れていつた事、お隣のお千代さんが友禪着せれば、私もと泣いたり、まあどうであらう、毎年雛祭の時には、必ず父上は此のやうに美しう早うなつて見せよと、京人形を指さしてはおつしやつたが、時はいつか私を十八の女としてしまつたけれど、今日のはれの式を待わびられ父上は、もう三年前草葉の蔭である。

あゝ、私は娘の時代を短くくらして、もう人の妻となるのである、父上の魂しもつた京人形、それももうゆるされぬのである。只夫や姑に仕へて、私はこゝまで思ふと、おぼつかない、たよりない氣がして、ホロ〳〵と涙がこぼれた。

あゝ、今日は笑むべき日であらうか。つひ姉樣に伺はなかつたが、姉樣もやつぱり涙を堪へていらしつた。シト〳〵と廊下を踏む音がするので、もしや不吉の涙を見られては、と、次の間にすべり出て、姿見に向ふと、われながら美しい裝に、覺えずほゝゑみは頰に浮んだ。と、衣づれの音と共に母樣は、こぼれさうな笑顔を、袂の影から「もう時がたちましたよ」と、ヂーッとお見つめになる。

ハイと返事はしたものゝ、島田の髷重い頭は亂れて、母樣や兄樣弟と、佛壇の前にヒッタと座した時は、知らず〳〵心細さがわいて來た。

人のどよみが遠く聞える、玄關におくり出されて、車の上にまかせると、もうポーとして、母樣にいひきかせられた事が、頭の中で亂れ合ふばかり。之れで一家の妻のつとめが出來るかしらむと、何んとなく身體が引しまるやう覺えられた。

（兩評）嫁ぐ少婦の情、描かれて面白い。筆も何處となく

才學が兼つて居て、ゆかしい。

地

朝の散歩

茨城縣女子師範學校内　増田やい子

軒の南天の木のあたりに、雀のこゑがする。もう夜があけたのであらうか。でも、ねむたい、床がなつかしいと思つて居ると、君ちやんかきて、姉ちやん夜があけたよ。昨日の約束と言はれたので、驚ろいて床よりいて、では君ちやん、月見が岡に散歩しませうねと、いつて門をでた。筑波山にかゝつて居つた雲は、がきけすやうにきえて、も朝日がはなやかににほひそめた、中天には、まだ青白い殘月がかゝつて居る。限りなくつゞいてをる麥畑、末はかすんで居つて其のさきはわからない。◎一羽の鳥が朝日をあびて、其のかすみの中にきえてしまつた。にほひゆかしい若草をふんで行くと、君ちやんは麥笛をピー〱とふいてゐる。善い音がしますねといふと、私雲雀が大すきだから、雲雀と合奏するのよといふ。いちばんの高いところに登つて、遥かに南の方をながめるとまばらな桃林の中から、白帆のかけがちら〱と見える絹川を下る舟であらう。あゝ、もうどつかへきえてしまつた。君ちやんは、愛らしい目をして、私はもうすみれ摘んだから、かへらう〱とうながす。そよ〱とふく風は、花のかをりをのせて、袖をふきかへす。なんだか寒むいやうなきもちもする。あゝ、もうみどりふかゝつた筑波山はだん〱うすらいできてがすみのきぬもやぶれそめた。

（雨評）美しい清い氣が動いて居る。

人

平塚白百合様へ

下總佐原 磯屋方　月沖さゆり子

其後は無音にのみ打過ぎ、まことに申しわけがございません。おかはりはありませぬか。梅さけど鶯なけど、母に別れし少女の胸は、淋しうてなりませぬ。私は昨夕、水音寒き刀根の畔に立つて、一人泣きました。今の窶れたこの姿！少女に唯一つのほこりとうたはれる黒髪も、みだれ〱て、――あゝ、これでも、青春の血もゆる若き少女だと言はれませうか？君よ、お察し下さい。

筑波の山は、河をへだてゝ、刀根のあなたに霞んで仰がれますが、なぜか妾の胸の中は冷たい。永却に解くる期なき氷にとざゝれてゐるのですもの——幻にみるおん許のみ姿—丁度朝日の前にかゞやく櫻の花のそれのやうに美しいだらうと思つてゐます。私のやうに、いつも過去の黒い影に囚れてゐる少女ほど、はかないものはありませぬ。私は、廣い〳〵大野原に、孤獨捨てられた孤兒ですもの、今は、もゆる若い心も、徒らに冷たい灰と化してしまつたのです。母に別れて、冷たい他人のもとにとらはれの身となつてゐる身は、日陰の花です。美しい春にまためぐり會ふのは、あゝ、そも、何時のことでせう、思へば、哀しうてなりません。日々みなさけ深き父母のみ手に抱てゐます君がおん身上、羨しうてなりませぬ。あゝ、許しませ、よしなきくりごとのみ申して——どうか、この幸うすき私を、永却に妹と思召して、はぐくんで下さい。私はまだ今年十七の少女です。あなたは思ふに、私よりお姉様だらうと存じます、もしちがつたらお許し下さい。いづれいとまがあつたら、永い手紙を差しあげます。筑波颪冷たき折りから、お身お大切に、影ながらお許樣の身に幸あらんことを祈つてゐます。

（雨評）孤獨の悲しき情を訴ふるところは、よく書かれて居る。

秀逸

◎春宵小月且　横須賀　渡邊比佐子

○月

柳に嬲られながら、春の月が、朧の頬冠りをして、ソッと、垣の隙から覗いては、ほゝ笑んでゐる。

○雪

昨夜から降りつゞいた淡雪は、今朝若菜賣の聲と共に止んで、築山の富士さへ、半は顔を出してゐる。

○花

門の紅梅も、二ッ三ッ笑ひ初めて、南枝北枝思ひ〳〵に媚を呈して、庭の上に赤醒さんの畫いた樣な疊紛を落してゐる。

○水

池の眞中に、澁れた女波男波は、相共に崩れて、汀に迫つては消える。消えては亦起る。起ては長く、短く、斜に、楕圓形に月影を弄ふ。

○琴

今宵の舞りにと、灯暗い南の離亭で、ギーと琴柱を締める音がする。誰れであらうかしらと思ふと、いよ〳〵靜かに冴え、心耳に澄む。何所からか、痒ゆい梅の風が、笑厭面を撫てゝ香た。

（雨評）才華點々

○◎歸る人　下野　井上儔子

電燈の光が淡い室の片隅に、赤い髮を垢じみた蒲團の襟に埋めて居たお夏は冷たい夢からさめて、細い手をついて、靜に身を起した。夕方から吹出きだした雪風は、小やみもない、庭の大樫の枝をふいて、强い音して窓にあたる、又あたる、一寸の隙もない。お夏は、吹雪の淋しい音に誘はれて、果てもない處に行きたいと思ふ。耳をすますと、其音の奥の〳〵の方に、自分がはいつて居るような寂しい氣がする、末は、涙がやせた頰を傳はつて、薄黑い襟元に流れる……お夏は泣くまい眠らうと目はとぢても、心は冴えかへり、二年前を追想する。倒れんとした家の柱を支ゆる犧牲に、姉は柏崎に身を沈める。自分は兒麓の大工場に入つた。今思へば、餘りに强かつた。親に視せまいと、離別の悲しみに涙は落さぬ心の中のつらさを、人はしらぬ、鐵窓ならぬ硝子窓に、越路の空を眺め入り「何ぼんやりとして居るの」と朋輩に脊を打たれたも、幾度か。廻らぬ筆に、月に一度は國への便り、此のつらい苦しい仕事も、苦勞させまいとの心から、一度も泣いたことはない。國からは、いつも母さんの文字、泣いて讀まぬ時はない手紙は箱枕の中に秘めておく。時々だしては、熱い涙にぬらす。思ひは思ふほど、果てもない。お夏は遂に顏を埋めて、身をふるはして泣へた。外には吹雪がいよ〳〵狂ひまわつて居る。

お夏は病故解雇された。お夏は泣いた。老親が病を得て歸る子を見て、どのやうに歎くことであらう思ふと、身もよもない。他國の土に成るよりは

めては懸しい親の顔を見、なつかしい故里の土になるのが、仕合せと健氣にも決心して、顔を上げた。お夏の目はなみだに光つたやつれた頬には笑みをさへ浮ばせた。

（兩評）前段は面白いが、後段が唯だ申し譯け文のやうで面白くない。此の文は前段だけにして、題を病床のお夏とでもした方がよい。さうすれば、筆は稚いが、慥に人を泣かしむるものがある。

◎梅見かへり

東京　倉重千代子

あゝ、くたびれた。日が短いと云つても、朝、霜柱のある頃から、日の暮れまで、能く歩いた事。山本様も新田様も、あのだるさうな腰附き、オホ……私もあんなのか知らむ。ふと東の空を見ると、丁度綸絹で包んだ様な十三夜の御月様、酔つたやうなこの夕方、梅が枝を肩に重い足をひきずりながら、畦道を辿り行くのである。遠近の賤が家の淡い燈火は夢のやう。どこからか幽かに琴の音が聞える。こんな片田舎にも、風流な人があるとみえる。私は足の疲も忘れて、嵯峨野でも辿つて居るかのやう。はてに、赤いリボンをかけて琴を彈く妹が、目にうつる、すると、又、白衣の女官の緋の袴が見える。うつとりとして考へて居る折から、ひゞく里のかねに驚かされて、美しい迷想は消えて、あとかたもない、鐘がやむと、皆申合したやうに、急き足になる、無言で歩いて居たが、一番前の新田様が、何んと思つてか、急に佇んで、オホ……山本様も私も意味は分らないが、笑はされてしまつた。遅くなると、内で心配してますから、少しも早く歸りませうと云つて、また急ぎ出した。山本様の肩の梅が、一片二片地に落ちた。何んだか情ないやうな氣がする。町へ入つた所の四つ辻で、明日遇ふ約束をして別れた。あゝ面白かつた、今夜はどんな夢を見るだらう？

（兩評）情景はよくうつッて居る。

◎妾學校時代の思想

秋田　加藤空子

妾は、縣南に方たる、△○村と言ふ、極ぐ僻寒の地に出生ましたが、幼少い時から秋田市の叔母さんに養育されました。軈て、小學校も卒業し、それか

ら秋田高等女學校に入學し、何か彼か普通教育も首尾好く卒業して、社會に出だのは、僅かに二三年前の事。現今から、學生時代を追憶して見ると、全々夢同様。奈何して那麼考へを持つてあつたかと、妾乍ら吃驚する。獨り妾計りでも有るまいが、人間の希望は各々異ふ。それと同時に、空想も又異ふのであります。

妾が當時の空想と言うたら、他人様と殆ど異ふ。先づ第一、浮氣で空想が多い、又虚榮心が高いのに自惚の强い事と言うたら、學校全体三本の指に數へられて居た。音樂師の成功談を聽くと、即時音樂家に成り度い。美術學校生徒募集がある等と學校の同窓が言ふと、美術家。敎員、女子新聞記者、文學家歷史家、華族令孃の肖像等、雜誌で見ると、華族の令孃を羨やむ、瞬く感じた頭腦の印象は、旣に其地位の人に成つて了ふ。處世上の空想は、それからそれへと、まはつて、俳優、女爵夫人、女辯護士、有らゆる無差別から覺醒ぬに、學校も卒業して、いざと成ると、四隣の風は鹽辛い、可弱い妾のはだを刺激する。玆に、初めて空想の夢から覺醒た妾は、學校に居つた時代の空想から、何を取つかまいていいか、不可解なくなつて了ふので御座いました。

叔父上は、頻りに上京を促し、叔母上は、頻に出世を奬める、それから、妾は落着いて考へ出し升た。社會は妾の思ふ儘に成らない。妾の意志は薄弱である、斷々乎たる決心が無い。すると、上京しても到底成功はおぼつかない。斯う思ふと、過去が恨めしい。聞き覺した講堂の修身が殘念になる。それから、妾は、斯う決したのです、一層の事、當分は敎員をして、精神的修養が肝心である。それから、上京して、妾の適當な職業に就く方が安全であると。其の旨を叔父上や叔母上に談しますと。大變に欣ばれまして、○○小學校の敎員となる事に成りました。這麼風で今も矢張り敎員をして居ますが、本年卒業なさる方々にも、卒業したからとて、乘氣にならずに、凝と考へてから、良く自分の決心を求むるのが、大切な事でせう、一寸の考婆心から、自分の事を書いて、御參考まで申上ぐるので御座います。

（雨評）女學生の一讀すべき價値のある文である。

○わかいほは　須磨　せきもり

西は、僅かびか岸を遡らし、生ひ茂る木の間に、朔既いくらか少し見ゆる。北は、綢しきの天神の宮居、老松の下にいと神さびておぼゆ。南は、松ごしに海の見えたる、實に、よきものゝ少しなるはいと愛らしと、かめ千の宗匠の寧ども思ひ出て、ゆかし。こゝは名におふ行平の通ひ路なりとか。月清き夕、松風村雨の有りし姿も見ゆること、いとゞなつかしき心地す。村雨の松は、この後の池のあたりにあり。老いて中ばくちたり。千鳥なく夜中、そゞろに歎心も出で來て

須磨之浦家まだらなるいそ松に
月影さえて千鳥なくなり。

○梅と鶯　東京　福田琴調子

軒はかたむきぬ。庭は荒れすたりぬ。その竹まがきのあたりに誰に見せばやとてか、匂ひこぼるゝ紅梅の一枝。春はまだ寒くて、夕日は早や斜め。

昔よ去年の春ながら、庭にむかしの主あらず。心づくしの主の、花に別れし心はいかに。今はいかにや思ふらむ。花や變らぬ色香を、誰れにまゐらせんとする。あゝ有爲轉變の世の中よ。これを鶯聞はんとすれば、彼方の梢に飛んで、ホーホケキョー……。

○

東風滿と、異芳を送るのとき、谷間に咲ける、一もとの梅、下ゆく水の情緒さ、を偲むが如く、いと淋しげにたてり。まりさて、色飽くまでも紅く、香あくまでも高し。

この淋しげなる紅梅、その身の甘き汁もて、鶯の君へ、左の如き詞を。

君よなどてとく來まさぬ。わらはが冬籠りの夢は、來る宵に破られて、早くも君を待ちつゝあるに。――君よ、などてとく來まさぬ?。

○轉地せる友　山梨　小澤蝶子

近頃寒さ一層嚴しく相成り、當地は一昨夕は昨夕は雨など降り出し、朔風寒く身に浸みて、誠に凌ぎにくゝ成り申し候。夫に付けても、思ひ出たすは、兄上樣の御病体、いかに暖かき御地とは云へ、何處も同し冬の空、などか寒さに洩れぬ事や有る、潮風すさぶ朝や夕、お休に障る事もあられるかと、轉案せられ申し候。殊に、稍朧轉地せられ候折り、幾分御風邪の趣きなほ快復するの時に至ずとか申され候頃、私出京致し候爲め、其の後の御樣子如何かと案じ暮し候へど。心に委せぬ今の境遇、豫想以外の繁忙に追ひ廻され、未だ細かに伺いも致し得ず打過候だん、御宥恕願はしうなん。猶過日は御手紙に預かり、尋なく拜見致し候。絹子樣永々御苦勞せられしも、道[illegible]、此度又日交いに御出で爲されしとの御事、誠に御苦勞樣に候[illegible]健康の者が保養がてらの避寒でさへ、退屈は免がれぬものを、まして、御病人の御看護とは。昨年は、永々の間、御伯父樣御看護を一手

引き受け、今又知る人もなく語ふ者とて有らぬ埜に、怒打つ潮風を友として、時雨ふりくる窓の下に、獨り心ななやまし御看護遊ば、さる事の、いかに淋しく又御疲勞遊ばさんかと、御推察申し上げ候。さるにても、御苦勞の甲斐顯はれて。此の頃は御快方に向はせられ候趣き、頃日文夫が飯田町を訪うて承はりたりとか傳承いたし、誠に嬉ばしき限りに候。申し上げる迄も無之候へど、最も恐るべきは風邪に候へば、極寒の氣の身に障らぬ樣、くれ〴〵も御注意遊ばされ、たとへ薄紙剝ぐ樣なりとも、日毎々々御快方に向ひ、一日も早く御全快有らん事を祈る處に御座候。

先は取り敢へず、御疎遠お詫旁々、御近狀お伺ひ迄、如此になん。末筆ながら、兄上樣にもよろしく御傳へ下され度、又御看護の爲めに菊子樣にお障りなき樣御注意なされ度、右亂筆御判じ下されたく候、かしこ。



新體詩

日本女子大學教授 文學士鹽井雨江先生選

天

○祇園の姉より　　遠江國引佐郡都田村新木　鈴木　いわ子

流るゝは涙なりけり。今日も亦
眺めやる東の空ゆ、湧き出づる
雲の樣にも、偲ばれて、
母と、そなたを。
生業の、詮方なくも、友染の
艶麗姿にて、立ち舞ふよ、
心ならずも。
思はじと、思ひつめても、思ひ出でぬ
母と、そなたを。

怪し露、目に輝けば、其の度に
凶と責められ、驚きて、
泣顔かくす……繪扇よ……振りの袂よ。
故里の、母や妹は、何時の日か
春を笑はん。吁今日も、雪降り出でぬ。
今頃は何をなすらん。
薪採りて、市に行きてか。
人の衣、洗ひてあるか――榮もなう
朽つる妹か、あな哀れ
女盛りの十六を、仇に過ごすか。
やよ妹よ、姉を、恨むな。吾も亦、
悲し罪の子。廿歳の
今日も血に泣く。三弦の音の、
いかに寂しき、いかに悲しき。

(雨評) 言ひまはしは、今一いきと覺ゆるよしあれど、情はあはれに忍ばるゝものあるを、よしとす。

地

鄙の春　東京市京橋區本八町堀三ノ五　福田琴調子

まだらに殘る淡雪の、　下萌え出づる若草や、
春に酔ひ寐の牧牛の、　夢にも見ゆる春の色、
里の小川のせゝらぎに、　調べも清くかなづるは、
春の女神がたはむれの、　うたに合する小皷か。
岸の柳の芽も若う、　吹き來る東風になよ〳〵と、
玉搔かけし枝垂糸、　寫すもやさし、水かゞみ。
長くつらなる山々は、　けふ初がすみたなびきて
自然ぼがかす彩筆に、　眠るが如き遂げしき。
麓に近き山畑や、　村の少女のうちむれて、
若菜つみつゝ謠へるは、　誰れを戀ひての投節か、
つやをすてたる束ね髮、　さすがにかざす本の、
菫の花の紫も　色はゆかしき鄙の春。

(雨評) 新しくはあられど、調の綺麗整ひたるを、よしとす。

人

花賣娘　東京神田美土代町三ノ十三森齋堂方　紀藤榮子

花を召しませ、花を召せ。年は十三名はお花、
山家育ちの孫娘、　幼い時に二親に
別れて、いとしや、ぢゞばゞに　つかへて暮すしほらしさ。
雪が降らうが雨降らうが、　かゝさず通ふ京の町。

花を召しませ、花を召せ。
きり／＼しやんと、紫の
たゆげに持つた花の籠、
桃の花やら、八重櫻
花を召しませ、花を召せ、
朝霧深い京の町、
門に佇むお花子の、
朝日は照つて、ぴか／＼と
花を召しませ、花を召せ、
若き男の子が、花賣りと。
答へ兼ねてや、美い
やがて、渡した白桃の、
花を召しませ、花を召せ、
心を、花に譬へたら、
咲いた白百合、香も高う、
一人眺めて一人笑む、

赤の前だれ、緋の襷、
帶を結んで、草鞋はき、
咲いてこぼれてたは／＼と
花が主か、主が花か。
優しい聲を張り上げて、
露の滴る花持つて、
姿美し、きら／＼と
光を放つ、露の玉。
聲に開いた高窓に、
呼ばれてお花、流石にも
顔紅の花が散る。
一枝はお花の心とよ。
まだ戀知らぬお花子の
深山がくれの谷陰に、
朝夕うつす水鏡、
ほんに優しい花かいな。

（雨評）此の頃多く見る花賣娘にて少しめづらしくはあらねが、優美ならずとは申され難からむ。

秀逸

東京　平塚白百合

老杉の枝重らかて、
雪に法衣の襟正し、
こだまにひゞく遠なりの、
風にまかせて吹き入るゝ、
尾の上の峰々はせめぐり、
琵琶八景は影消えて、

紛々として吹きしぶく、
朝看經の朝の鐘。
餘かすれてはたやめば
欄白炎し、のみ堂。
吹きおろし行く山かぜに
唯霏々として粉雪とゝぶ

（雨評）想に今少し力を入れられなば、壯大なる詩ともなりけむを、惜しい事をせられたり。

我が友

筑後　藤好多喜子

去年今頃は、我友と
通ひしものを、かつはたま、
遊びしものを、夢なりや。
たが手をとりて遊ぶらん。
明けくれ北の空をのみ
あゝなつかしの我友よ。

手を携へて、學びやに
花咲きし野に山に
あゝなつかしの我友よ。
姿に友なく只ひとり、
ながめぞくらす悲しさや
たが手をとりて遊ぶらん

（雨評）もの足らされど、整ひたるはよし。

歸途

東京　三輪千代子

風そよ／＼の朝朗、
霞める不二を眺めつゝ、

野越ゆる川越え尋ね來し、　桃の花咲く乳母の里。
雲雀は空に高く舞ひ、　黄なる菜の花、青き麥、
いさゝ小川の水温み、　今を盛りと咲き揃ふ
蒲公英遊糸草、　花より花へ移り行く
蝶の風情の面白く、　彼の奥に聞ゆるは、
牧場の牛の吠ゆる聲、　摘みたる草を餅にして、
入相近き鐘の音に、　歸るに重き家づとや。
唄ふ雲雀と舞ふ蝶と、　塒の床に歸りつゝ、
安く夢路を辿るらん。　そよと吹き來る夕風に、
かさせる花のひら〳〵と、　なりてこほれて美くしく
夕日かゝよふせゝらきに、　靜心なく流れ行く。

（雨評）面白き詩境なれど、想も辭もまだ銑錬足らざるかなしむ。

春野に立ちて

下總　月沖　さゆり子

蘭花さく森の野に、　今したゞずむ夢心地、
あゝ、そのかみの追想ぞ、　胸にほのめくたまゆらよ
少女なればや、花かざし、　母と行きにし此野べに、
孤りたゞずむ今の身の、　もろき運命(さだめ)に泣きぬれぬ
和風みちし天地は、　今よろこびの溢るれど、
母に別れし少女子の　胸の小琴に、徒らに
悲哀の曲をかなづのみ。　ふとしも偲ぶ若き日の、
歡樂の華欲りしては、　今更ながら、現在の
不安に喘ぐ姿みて、　あゝ絶望のなげきのみ、
胸にあふるを、如何にせん――。
花にくるへる蝶々よ、　汝は知るかや、うらぶれの
若き少女のこの思ひ、　あゝなけゝとて、なけゝとて。

（雨評）詞に涙はあれど、情に涙なき心地す。末段の蝶の一節も、添へ物のやうなる心地す。削る方よからむ。

驚盤

美作　鈴本　錢子

花咲かば
癒えなんとのみ、樂しみし　春は訪ひ來て、古寺の
庭にも、風はかなれども、　蕾ながら散りゆきし、
あゝ、我が妹は、たらちねの　やさしき胸にいだかれて、
光りつめたきいしぶみの　下にぞ、永久にねむるなる
世はまちわびし春としも、　知るやらずや、苔の下、
恩愛ふかき母と子の　夢や、いづこに迷ふらむ。
水手むけつゝぬかづけば、　鳥かなしく鳴く空を、
さとわたりくるそよ風の、　捧げし花に聲ありて、
一すぢ細き、線香の　烟も、さッと亂れぬる。

あゝ、細々と立ち昇る　行方やいづこ、亡き人の、
笑みます園か。あゝさらば、　塔婆のいろも鮮かに、
ま草もゆる新墓の、　春とこしへに靜なれ。

（兩評）いまだ情が足らず、筆も練熟を缺くをおぼゆ。

忍耐

茨城　山口せん子

木枯すさび　霜氷ほる
冬の寒さを　かへりみず、
匂ひも淸く　咲く梅の、
花にならひて　つとめなば、
桂の枝も　難からじ。
天をひたして　よせかへす
大海原さ　なる水も
もとは險しき　岩かげや
木の葉の下を　くゞるなり
人の世もまた　變らじな。
やよ、諸人よ、　たへしのぶ
心なくして、　世に立たば、
如何なる業か　とげられん。
やさしき梅の　かをりもて、
荒き浮世の　浪越えん。

日頃親しかりき友の卒業を祝ふ

茨城　增田やい子

學びの庭に　分け入りて、
花なも實なも　折られける。
君の榮えを　きゝませる、
父母のみ心、　いかならん。
春の花みも、　もみぢはの
匂ふ夕へも、　もろともに
手綱ひきつれ　遊びしか。
樂しきことも　うきことも、
共に分ちて、　なぐさめつ
なぐさめられしうれしさよ。
今はとしごろ　すみなれし
學の庭を　たちいでゝ、
遠きあなたに分るなり。
あなあつかしの君よ君、
つとめはげみてたゆみなく
かざしし花を　ちらすなよ。

靈山

東京　倉重千惠子

仰がずや
巍々と聳ゆるこの山を。
旭日徐々にのぼりつゝ、
其の半面をそとてらす。
四つきの間白衣して、
崇嚴と仰がれし山、

金色の美しきに變り行く。
仰げば胸に塵もなく、
心に一つの邪念なし。
空想起らば、仰げ、この山を。
濁心起らば、仰げ、この峰を。
またゝくひまに、迷ひはさめむ。
されば、この山よ、人の爲め、
また世のために、惜むなく、
輝く光を永久に誇れ。

佐々木信綱先生選和歌兼題

◎四月　花下蝶◎五月　殘鶯◎六月　夏月◎七月　雨後蟬◎八月　午睡◎九月　女郎花◎十月　秋田家◎十一月　暮秋虫◎十二月　夜雪。

入江爲守先生選和歌兼題

◎四月　行路花◎五月　雨中新樹◎六月　疎屋の夕顔◎七月　百合◎八月　松下泉◎九月　秋色浮水◎十月　月前菊◎十一月　水上落葉◎十二月　船中千鳥。



東京帝國大學講師　佐々木信綱先生選

天

渡し舟繪日傘乘せて蝶のせて
　青柳霞む村に入りにけり

常陸土浦町八百五十　岡田まん子

（評）うつくしともうつくし。集中の佳作といふべし。但下句原作柳の霞む村に入けりとあり。加筆とよみくらべてさとり給へ。

地

春のあめ茶のめけぶれるかげにして
　唄うつくしき宇治少女かな

東京牛込區佐内坂町三七　平塚白百合

（評）其唄聲きくらむやう也。三句もと木がくれにとありしをもて改めつ。

人

春の海おとなき磯に杖たてゝ

岩代國伊達郡小手川村　岸野常子

松原ごしの富士の根を見る

（評）温雅の作。

秀逸

さやかにも一本まつの影見えて月すみわたる武蔵野の原　東京　三輪勝子

◎俊寡の段々染に風みえて撥さす袖に花ちりみだる　岩代　岸野菊子

◎まほ片ほ霞に消ていそ櫻かづ散る波にかもめまいとぶ　東京　關芳野

◎ゆきずりの人ほゝゑみて物云はず祇園花道月朧なり　東京　紀藤栄子

◎日あたりの南のゑんにはしゐしてうつゝにきゝぬうぐひすのこゑ　須磨　有村棠子

◎なみの音もかすかになりぬひるもなほしづけきいほのたまくらのまど　須磨　有村つし子

◎月朧ろなき母墓に香たけば烟の末に面影ぞ浮く　下總　月沖さゆり子

◎船はしる北太洋をくじら追ふますとに高し片われの月　東京　平塚いと子

◎河邊柳
のどかなる河邊を渡る春風に一ともとなびくいと柳かな　森紫香子

◎春風
吹きぬるむ風に湖氷とけそめてさゞなみ立てり滋賀のうみづら　大阪　小谷きう子

◎白梅のかをりみにしむ樓に琵琶のねさゆるおぼろよの月　下野　井上鈴子

◎荒屋桃花
あれはてゝ住む人もなきわらふきの庭にさびしく白桃のさく　兵庫　木本石子

甲

○きのふけふけふりし野澤に來て見ればもえ出にけり春の若草　伊豫　金田春子

○心　　埼玉　横田稔子

異國の手ふりあしとり學べどもやまと心は物にゆるがず

○　　東京　中村千代子

秋か子も學びの庭につどひ來て月の桂を折らむとすらむ

○　　茨城　山口せん子

うち霞むのべのをちこち綠してよめ菜つむべき春となりけり

○　　須磨　有村文子

露のなくれきふつゝゆめにいろまひろしつけき弓のいぼりかな

○　　北海道　佐藤央子

今朝よりは池のこほりとふきしきて春のしるしの風わたるなり

○　　橫須賀　柏原榮奈子

惱みわびこもろ小窓の燈に心細きて淋思ふかな

○歸雁　　磐城　木幡きよ子

さらぬだに花の夕は戀しきに故鄕さして歸る雁ね

○　　名古屋　山根しげる

渡し舟よびさめつゝもさる引の柳のつゝみ急きゆくなり

○　　神戸　木本石子

山かげの淋しさまさる賤家がに梓音づれて燕乃なく

○　　下野　井上尚子

笛の音も琴のしらべもたえはてゝわが世とかすむ春のよの月

○　　東京　倉重千惠子

矢叫びのこゑかとぞ思ふ玉あられふる音凄き那須の篠原

○　　遠江　須部たまき

夜もすがら疑物語りにおきたらず松吹く風と共に明けゝり

○　　飛騨　附　みれ子

みんなみの離れ小島の若草にねむる羊の夢愛らしき

○折にふれて　　神奈川　飯田白露

つみくさの少女がすてしかざしとも見るべき花よすみれたんぽゝ

乙

○　　神戸　足立あさ子

我庭の黒板塀もしら雪のつもり／＼て日は暮かぬる

○　　神戸　足立ゐい子

靜さの通ればさびし降雨のあし音もなき藁葺の庵

○花有情　　埼玉　橫田やな子

芳野山花に心のうばゝれてをとつひきのふ今日も來にけり

○　　橫須賀　渡邊比佐子

妹があたへし息のうつくしくやさしき息に紅梅のさく

○殘雪　　茨城　山口せん子

はうきもて掃くも本意なし我が宿の垣根のもとに殘るあわ雪

○詩　　埼玉　橫田秋子

唐のやまとことの葉かきやりて我國ふりによむべかりけり

○山里雪　　神戸　しづ子

朝ぼらけ千里くまなやふる雪に絶えて人こぬ山のへの里

○雪中の松　　伊豫　益田春子

小松原雪のけしきたけさ見ればみどりの梢花にぞなりける

讀者文藝

○松の雪を見て　伊豫　金田春子

ふりて行くしるしも見えぬ松がえに花ぞさかせしけさの白雪し

須磨　有村もとゐ

○

いかばかりおもひて多きこよひかなまつふくかせもことのれとき久

須磨　有村はな子

花やらし月やはつらし渕みてふすいはののきばにつとふかれのれ

須磨　有村とみ子

○花の宿にて

住よしのきみがみむろの花のかなたもとにしめて家つとにせん

横濱　鈴木まつ子

○朝鶯

けふの日もいかによきこゑふりつらむあしたさやけくなく鶯に

秋田　三浦しや子

○

はるかなる谷の戸になく鶯は此春雪にとざゝれにけむ

越後　松永繁子

○思ふ人

憫しき二人が仲のたゞ一人はかなくしなばいかゞあるらむ

筑後　藤好多喜子

○

明けがたの雲井の空にたちのぼる霞ぞ春のはじめなりける

茨城　増田やい子

○海

はてもなき海になりたや我心さす方しらすなりはてやせん

兵庫　稲田早苗子

○折にふれて

なめらかにたゞよふ波の海づらとこゝろの底はたのまさりけれ

近江　杉村玉野

○亡き姉を思ひて

去年までは共に祭りし大裡びなかたみと飾る今日ぞ悲しき

神戸　越川きく子

○川柳

川柳緑の糸を春風にくしけづるらし水鏡にて

神戸　越川たけの

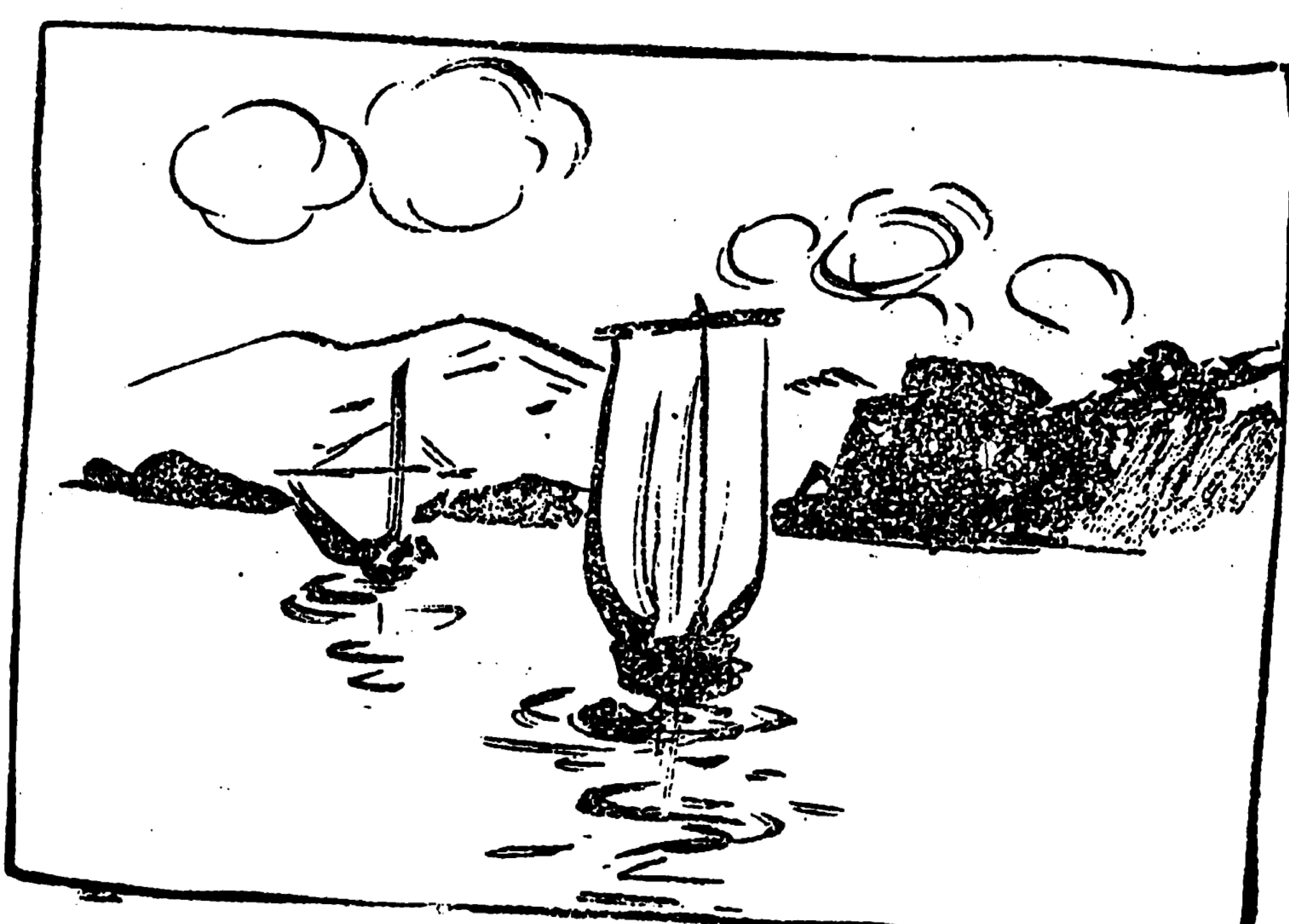
○落梅

鶯の羽れさへ心やらるゝにこのころあるゝ梅の下風

須磨　有村たもつ

○

紫や紅かば雲や霞かひの木立あらそふ夕日かゞやく



讀者文藝





俳句

内藤鳴雪宗匠選

天

磯の戸や春は白梅小蛤　岩代國伊達小手川村　岸野菊子

地

花吹雪まろうど迭路にして　下總佐原磯屋方　月沖さゆり

人

春の人皆花笠を着たりけり　横須賀市　柏原美奈子

長閑さや我が影を追ふ蝶二つ　東京　倉重千鶴子

牛曳い戻るや花の夕月夜　飛騨　南　みれ子

薄月夜燒野の道に迷ひけり　遠江　須部たまき

岩の間に遊ぶ鳥あり春の海　東京　福田琴調子

姉妹各花の定品め　常陸　岡田まん子

讀者文藝

春風にさそはれ出り従弟同士
長き日や山鳥の尾に風渡る
梅活けて女主人の茶室哉
吾戀のそれにも羽子の裏表
かご松に雨の三日や破れ紙鳶
柩舁く人に梅散る野道かな
鶺百羽野に放ちけり春の風
千金の家を借りけり梅の花
干物に薄き日あたる冬木かな
西行も濡れけん小野の時雨かな
初春や神にも似たる伊勢の人
温き日や梅さく軒の尉と姥
若草や人の牽き來る驢馬二頭

東京　芦原浦子
埼玉　永井文子
大阪　木村春江子
東京　三輪千代子
在濟國　稲田つる子
　　　蓮女
岩代　岸野常子
仝　　仝
横須賀　柏原美奈子
仝　　仝
飛驒　南みれ子
仝　　仝
相摸　安藤登喜子

女子教育講演會

久しく中絶したりし女子教育講演會は先月より毎月一回開催、諸名家の講演を乞ひて、その筆記は毎號本誌に掲載すべし、而して本誌讀者諸嬢はこの講演會に無料傍聽するを得ることゝせしが、女子新聞發行準備の爲、事務多忙につき、三月まで延期したり、

定價

	前金	定價
一册	前金	貳拾錢
三册	前金	五拾七錢
六册	前金	壹圓拾錢
拾二册	前金	貳圓拾錢

全國遞送無料

廣告料

五號活字二行廿三字詰

	特等	一等	二等	並等
四半頁（十六行）	六圓五十錢	五圓	四圓	
半頁（三十二行）	二十圓	十一圓	九圓	七圓
一頁（六十四行）	三十五圓	二十圓	十六圓	十二圓

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）◎前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし◎領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし◎爲替は四谷區霞ヶ岳町卅九番地中川愛氷宛に願ひたし◎御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十二年一月廿八日印刷
明治四十二年二月一日發行

東京市四谷區四谷霞ヶ岳町三十九番地
編輯兼發行人　中川良平

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷人　佐藤保太郎

東京市四谷區四谷霞ヶ岳町三十九番地
發行所　女子新聞社

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷所　中屋商店活版部

懸賞募集規定

従來の如く、兼題、及雜題和歌、短文、新體詩、俳句を懸賞募集す、その規定左の如し。

すべて天地人の三等に分ち、天は金壹圓、地は金五十錢、人は金三十錢を賞與し、猶選者に乞ひて、特別秀逸の作ある時は規定の天賞一圓以上五圓迄の賞金、又は名家の式紙短冊等を賞呈する事あるべし

投書用紙は半紙に限り、短文新體詩はもとより、兼題も二つとも別々の用紙にしたゝめて、姓名を其傍に記すこと、但し投稿は下段に印刷せる投書箋を切抜いて添ふべし、投書箋は一人一枚に限る、投書箋添付なき者も選に入るを得べけれど賞品を呈せず、

但し一人に付兼題和歌(二)雜題和歌一首づゝ、新體詩短文一篇づゝ、俳句五句迄とす、而して〆切は前月十日までに着するもの。

右規定に違反するものは、入選するも賞品を呈せざるのみならず、其投稿を沒書にすることあるべし

投書家注意

◎投稿は嵩多き時は開封(第四種郵便物として)にて願ひたし、毎回不足税を徴収されて迷惑尠からず。

◎投稿には用紙に天地左右をあけ、少くも綴るに差支なきだけの餘白をあけられたし。

◎投稿用紙は必ず半紙を用ひ、葉書又は並外れの廣き紙また狹き紙、薄きロール紙等は御免蒙る。

◎入選して賞品を得られんとする方は、この頁を隠なく一讀せられたし。

◎投書箋は一枚一人に限る。

◎入選の時、賞品を得んとする投稿者は、此用箋に住所氏名を詳記して、投稿に添付せられたし。

女鑑 第十九年第四月號 **投書箋**

投稿者

住所氏名

私立
東洋女藝學校
神田中猿樂町

生徒募集

○規則ヲ改正シ教員ヲ增聘シテ

四月八日始業ス

●本科（三ヶ年）專修科（二ヶ年）速成科（六ヶ年）短期講習（三ヶ月）各級共入學ヲ許ス

●科目　裁縫、造花及摘細工、刺繡學科ハ高等女學校程度

●入學資格　尋常六年卒業以上

○時勢ノ渴望ニヨリ技藝教員養成ノ爲メ師範科ヲ新設四月八日始業

●教科　裁縫科（和服及洋服共）造花科（造花及摘細工）刺繡科ニシテ小切細工物、編物及袋物ハ裁縫ニ綿細工、瓶細工、押繪等ハ造花科ニ屬ス

●授業時間　毎週卅三時間（一ヶ年卒業）倫理一時間　國語漢文二時間　繪畫及圖案六時間　理科二時間　教育學及教授法二時間　手藝六時間　專攻實技十四時間

●入學資格　高等女學校卒業程度

●師範科卒業生ハ參拾圓以上ノ月捧ニテ招聘ノ旨數ヶ所ヨリ申込ミアリ

女鑑

毎月一回一日發行

第十九年第參號

（明治四十二年三月一日發行）

明治卅五年三月十二日第三種郵便物認可

